
流石、えみや様。いい性格しています！

華山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流石、えみや様。いい性格しています！

【Nコード】

N9658P

【作者名】

華山

【あらすじ】

こんなギャグもどき。

みんなの知っている衛宮 士郎でもなくエミヤ シロウでもなくえみや しろうです。性格を改変にしてこんな衛宮ってどう？と言う感じ。

短編から連載に、週一の程度で。

短編連作は思いついたらドシドシ書きますです。

事件1。 えみや様と日常から非日常。 (前書き)

衛宮士郎は存在しない。

エミヤシロウは哀れ。

えみやしろうは愉快人。

それゆえにセイバーは白い。

短編からのコピー

事件1。 えみや様と日常から非日常。

どこにでもあります、学生のえみや しろつです。
楽しく学生生活をエンジョイしております。

「すまんが、ストーブを修理してくれ。」

「了解。 500円な。」

お金は勿論頂きます。

だって、勿体無いじゃん。 こんな技能は将来に役に立つし！。
優等生だと優遇されるんだよね。」

「毎回、済まない。」

おっと、忘れてた。

知っている人も知らない人にもご紹介。
目の前に居るのが生徒会長の一成だ。

「それと最近は資金が削られててな。 知らんか?。」

はい、うざい!。

訳するにお前が学校の金を糞っているのかって聞いている。
あの校長あとで絞めます。

「問題事が起きたんじゃない?。」

さ、部室に行った後で校長だね。

俺はこれでも、クラブに入っている。 お金は在るだけいいに決まっ

ている。

「よっ、会長。気分はいかがですか!。」

こいつは…一応俺の友達の間桐 慎二。

ワカメが特徴だ。別名は負け犬だ。

俺が考えました。

てか、

「会長って何の事だ?。後で頼み事でも聞くか?。」

「す…すみませんでした!!。」

用は脅迫。

なんだよ、其処まで酷い事してないよ?。

してませんよ?。

ゴム弾で虐めるだけなのにどうしてそこまで怯えるのだからね。
後は言葉責めしてねちねちしているわけです。

「ならいいけどな。」

さて、チャイムが鳴ったし早速教室に行って

ホームルームという帰るまでに無駄な時間を過ごすか。

面倒くさくなってきたなあ。

もう、いいや。

ボーっとして置きますか?。

ダダダ…バターン。

ズゴ…。はあ、面倒。

「最近 下」

「はっ、なんだっけ?。」

すぐに立ち上がる担当。

なにこのご都合主義は、耳が良いよな。

藤姉。虎なだけあるよな。

言葉の続きは、下腹が出てきたよな。です。

軽く、見られては困る。解析には自信があるのが俺クオリティ!。

「帰るんじゃないですか?。」

「そうだった!。みんな最近は何騒だから早く帰ってね〜。」

じゃあ、帰りましょう!という掛け声で帰っていった。

俺は、ストーブの修理に頑張る事にする。

クラブよりこっちが優先だったりするのですが、何か?。

生徒会室にそのストーブが置いてある。

壊れたストーブはここに置いてある。

「お仕事お仕事つと。」

壊れた部品は作る。

じいさんは不向きだって言われたけど、こんなに便利なのにどうしてさ。

わけわからない。

俺は魔術を使えるだけの一般人だ。

解析だってそれに属し、見るだけで大体は理解できる。

後は十万位でアレが買える。

改造用のパーツも買わないといけないな。

じいさん、マジで感謝しています。

「これは、寿命だな。」

さて、もう一度 見る（解析）。

これは作れない。

うん…外がうるさい。

カバンから鏡を出して外を見る。

なんで、持っているのかって？。

ユーフォーキャッチャーで手に入れました。

桜にあげる予定でしたが。

可愛いらしい桜色の装飾やらで可愛くきれいな鏡。

野郎の俺が持っているのは場違いです。

なんでさ。なぜに遠阪いるんだ？何あの変態な二人は誰。

しかも、銃刀違反してるよ。

まずは、警察に電話しよ。

学校名と用件を伝え、宜しくで切る。

さ、裏門から帰ろ。

そそくさ、遠回りをして逃げる俺。

ばれたら、死ぬな。と呑気に考える。

あの最厄から10年。やっとの10年。

死なんてすぐ其処だった。

ただ歩いて歩いて…死ぬ■■死ぬ死ぬ■ね死ぬ死■。

考えるのをよそう頭が痛くなる。

裏門を通ると

「よお、坊主。」

「うわ、噂の変質者さん。警察のお世話になってください。」

はっ？と返事をされるが無視。

遠くからサイレン音がする。

変態は後ろを見てあせる。

天下の警察だよ、身内に弱い警察だよ。権力は美味しいよの警察です。

隠してあるバイクに乗って逃げる。

「おい！！待っ」

エンジン音で相手の声が聞こえなくなる。

デットライブになりそうだ。

複雑な操作をしながら逃げる。

相手も早い。

「ウーマっているだなっ」と！。

実際に居ると信じられている生き物事だ。

現在の代表がイエティ。

過去の代表がカーバンクル。

間違っているような気がするけど、気にしない！。

エンジンの煙だけでは撃退は無理。

「お前待ちやがれ！！。むしろお前けんぽーいはんじゃねか？！！。」

知るかー！！。

だったらその赤い長槍を降ろせ！！。

だったら、これだ！。

「なんでだよー！！！！！！。」

なにを！バイクにはギミックを、ギミックといえば銃です！。

着弾すると爆発する物にしているが悠々と避ける。
うぜー！！。胡椒爆弾でも食らえ！。

「んな、ごほつ！。」

さ、家へ直送！。

人様の屋根を伝って真っ直ぐと帰るのですた。
当然、まったくのエンジン音がしません。

少しする程度ですがね。帰ると、メンテナンス。

排煙を利用した圧縮銃弾使っていたのですが、蔵で整備。
弾丸を詰める。

「イテツ。チェーンが切れたか。」

チェーンを積めてある箱を探るけど、いいのがない。
いてて、また切った。

お目当てのチェーンを見つけて、嵌める。
嵌めようとすると、光った。

「サーヴァント セイバー召喚に応じ参上した。問おう、そなたが
……わたしのマスターか。」

また、携帯を出す。

面倒だ。こんなに変質者に会うなんて事は。

「マスター何している。」

「警察に電話。」

黒い、お人形な人に睨まれる。

なんです。

「わたしは怪しい者ではない。」

はつきりと告げる。

ならばと、電話をするのをやめる。

話の内容によつてはやばくなると思った。

「ラインは、あるか。ならば」

なにが起きるのがわからない。

どうなつて居るんだ。

この状況に着いていけない。

「我が剣はそなたと共に在り、そなたの運命はわたしと共にある。
この剣に誓い、そなたを守ります。」

どうなっているのやら。

「よう。」

「変態タイツは帰れ。」

そついうと固まっていた。

なんだこいつは、困ったさんだな。

「たしかにな。」

項垂れていた。

同情なんてしない。できるわけもない。

セイバー？がタイツにつっこむ。

黒い聖剣を携えて、向かう。

なぜに聖剣だと思うのかわからない。

でも、相手の筋肉のつき方はどうなっている。

セイバーのつき方もどうかしている。

相手は力に体格が勝っている。

セイバーも同じぐらいの力と技術が上だ。

「どうなっている？。」

どちらにしろ、魔術師の本分だったらしい。

厄介事はお困りですけど、やらないと死ぬな。

「追撃プログラムスタート。消しにかかれ、攻めのツルギ！」

避けるのを避けさせてやるよ。

ためてある、ツルギを追撃に使用。

及び盾のツルギを始動。

「やっかいだな！」

「なぜ、こんな事ができるのやら。」

剣と槍が打ち合う、攻める、防ぐ、弾く。

なんだよ。この高レベルの戦いは！理解を超える。

ツルギが尽きた。

なんで、こんな事になったんだよ。

「さぞ、立派な英雄なのだな。」

「言っとけ。俺たちは立派なわけがないだろ。」

赤い槍をセイバーに向ける。

不敵な笑みでどこことなく血管が浮いている。
怖い。

ワインレットのシャツにネクタイは緩めで金のネックレス。
上着も、ズボンも黒。

あ、いけるかも知んない。

セイバーは、シンプルロリッシュが似合うな。
胸とか少ないし。いけるな。

黒か赤がいい。あの白い肌に似合うだろう。
解析魔眼は便利だ。

普段は意識なく使っているから、苦勞もしない。

「駄犬は駄犬らしく行動すれば良いものの。」

「おめえ、言つたな?。」

赤い槍が、禍々しい赤い魔力が溢れる。
よくわかる。

セイバー、逆鱗に触れたな。

「手向けだ。ゲイ・ボルク!。」

セイバーの肩を貫通する。

ふんと、堂々と立っていた。その姿は、騎士に見える。

「気が済みましたか。」

ちっと、声が響く。沈黙が走る。

なんだよコレは、セイバーは何か知っているのかみたいな素振りだった。

相手がため息が吐く。

「へいへい。駄犬らしく行動しますよ。」

走っていった。早いなあ。

蒼い残像が残っているぐらいに、早い。すごい。

セイバーが、俺の方を向く。

「で、聖杯戦争を知っているか？。警察に電話するなんて馬鹿（一般人）のすることだが。」

「なにそれ。」

いうとやっぱりかと、言う素振りをされた。いや、状況に着いて行けないっす。

「なによこれ。」

あ、言うまでもなく庭には凸凹が出来ている。

俺の性です！あはは。

とりあえず。

「遠坂、なんでここに居のさ。お茶なら出すけど。」

たしか、蔵に冷蔵庫とポットが置いてあるんだ。それを取りに行く。

「衛宮君って魔術師だったのね？」

あれ？優等生でマドンナ上等な遠坂凜。
敬語はどうかした。

お隣さんもあれ？という感じに庭を見る。

「学校の変態さん、どうかしたの。」

いうと拳をにぎり、にこやかにしていた。
む。やばいな。

逃げた方がいいのかな。

この怒り方、桜に似てる気がする。
にこやかなところが特に似ている。

「あんた。どういう事なのよ！」

「凜、落ち着け。まず、庭の惨状をみて頭を冷やせ。」

漫才なのか解らないが、うざいな。
よし。

「今のところまではっ」

「よし、クリティカルヒット。」

人を引いてみました。大丈夫かな！。
俺も笑ってみた。引いてるよ。
うわ、その顔って素敵よ！。

「うにゃーおにやら何をやっとする。」

生物色物の猫、うちのマスコット。

「ネコアルク。黙れ。」

「さーсенでした!。」

遠阪凜は思った。

えみや しろうは逆らってはいけないと。

黙れと言った時の眼は恐ろしい眼であった。

アーチャーは驚いた。

なぜだ。

衛宮 士郎ではない。こいつはなんだ。

そして、早く降りてくれ。

重い。

セイバーは嬉しかった。

衛宮 士郎は最高のパートナーになると。

知っているだろうか、衛宮 士郎だったら切り伏せされる所だったのを。

しかも、彼女はどこかの平行世界の黒セイバー、オルターセイバーである事を。

役者は変わり、歯車が動く。

運命を変える戦争が始まる。

そして、この話の言葉で遠阪 凜は吹いた。
なるほどと、サーヴァント側は納得した。

「ようは、パラレルウォーズって事か。」

「はい!？。」

(たしかにな。)

「その通りですね。」

マーボー神父では

「喜べ、君の願いが叶う。」

「どの願いが?。」

「気のせいだ。気にするな。」

大丈夫かと心底で心配していた。

白い少女は

「わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言うの。」

「

「美女と野獣コンビか。」

「はい?。」

「いや。美少女と野獣か。」

うれしかったのは言うまでもない。

お友達は

「慎二、どうなりたい？。」

「すみません、すみません、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

「ほう、きれいな90度だな。」

「すみません、すみません、マジで調子に乗りました。申し訳御座いません。」

「許すか。」

「ギャン。」

「踏み心地は良し。」

真面目に可愛そうであった。

そんな感じの聖杯戦争。

パラレルウォーズが始まる。

地味にネコアルクも活躍する。

短編からの大体のコピーです。

事件1。 えみや様と日常から非日常。（後書き）

衛宮士郎は正義の味方を目指す。

エミヤシロウは自分を殺す事を目指す。

えみやしろうは普通に近くて遠い自身の将来を目指す。
こんな感じです。

前書きのセイバーは、肌が白いです。

短編からのコピー

事件2。さようなら、日常。（前書き）

まともな話になりました。

ギャグらしきもどきが多くあります。

事件2。さようなら、日常。

まずは、この一言から始まった。

「聖杯戦争の監視役の所に行くわよ。」

「え？なんで。」

すんごく睨まれる。

彼女の独断に決定事項ですか。

足元で餌を求める馬鹿ネコに軽く蹴る。

デコピン程度に。

度に行き過ぎたら、メリーゴーランドに強制お風呂の刑に処します
が。

メリーゴーランドはグルングル回すだけ。

ただ、勢い良く、回ります。

「あんたのためにしてんのよ。其処を解りなさい！！。」

理解できないです。

まあ、欠片の親切心があるらしいですが、俺には理解できねえ。

まあ、ネコアルクのことはガンスルーしているらしいですがどうでも
もいいや。

「つか、戦争は夜みたいじゃないか？。なんで今、出歩かないとい
けないんだ。」

訳：てか、昼間がよくな？。

いうと、あつと言う声がする。

何、このマドンナは理解ができない。

「…あんたねえ。奇襲とか、今すぐに襲われたらどうすんの!!。」

たしかにそうだけど、馬鹿？。

「まず、調べるだろ。しかも、遠坂と学校が同じだから襲われにくいと思う。」

こうなれば、うっか凜だな。

正論をぶつければ、ぐむむっと悩みだした。
なにこいつ。

「そうだけど、あたしのこととはどうかしら。学校で襲えるのよ。」

まあ、こっちも正論。

だが、切り札を切らせて頂く。

「はい、冬木になんであんなにでっかいお家兼神社、お寺があるんでしょう?。」

いきなりの事だから、意味解ね?という顔になる。

お隣のアーチャーはなに言っただとそんな顔。

この話の前、空白の時間にクラスを教えてもらいました。

「はい、其処でこの冬木に聖杯戦争が出来るような霊地があるんでしょう。」

ん?と言う。

解ってないな。

心の中でニンマリ。

いやゝ其処まで言ってもわからないんだ。

「で、昔からそんな霊地の子孫が今も生きているでしょう。」

解りやすく言っと

はっと、した顔になった。

「魔術師としての素質がある一般人がいるんだよ」

言葉を続ける。

「学校でも、万が一で関係のない奴が巻き込まれるなんて困れないのか？」

うつと言う声が、遠坂からする。

ここまでくれば、後は叩き止めず。

言葉必殺の一撃を今！。

「俺たちの日常の崩壊に参加するのか？」

一般人もどきの俺が言うのも変だが、事実だ。

警察沙汰になるだけでも厄介なはずだ。

警察にも、俺みたいな魔眼持ちだったらややこしい事になる。
だから、わかってほしい。

「マスターなら消してもいい。でも、そういう事はやめてくれ。」

俺は、遠坂を殺したくない。

ライフルで一発で死ぬし、大体がアーチャーが気付くだろう。

だが、それでも、俺は日常を守るためなら殺しだつて喜んでする。
それが平行世界で唯一人、えみや しろうなのだから。
沈黙が続く。

「わかったわ。学校では、戦わないように心掛けるわ。」

「絶対な。自己防衛に当たっては当て嵌まらないからな。」

でも、沈黙が続く。
何がいけないんだ。

「でも、条件はあるわ。」

「なに。」

気になるなあ。

どこかにこやかで、勝ち誇った笑顔になっている。
俺は確信した。

「聖杯戦争の監視役の所に行く事よ。」

結局は、俺の負けかよ。

まあ、そういう事なら、喜んで。

「マスター、着る物はないか。私は霊化が出来ないんだが。」

素材がありましたので即興で縫い、ミシンがけをぱつと終わらせた。
図なら、頭の中にありますから！。
その出来に、

「高そうな服ね。贅肉の塊だわ。」

「マスター最高だ。」

（私の負けだ。）

遠阪それはないだろ。
んで、

「セイバー！いきなり着替えんなよ。」

すぐに後ろを向く。
勘弁しろ、この貧乳め。桜を見習え。

「すぐに終わらせる。照れ屋か？」

聞くなよ。
で、

「布切れはなんだ。」

「下着を知らないって何処の生まれなのよ。」

たしかにそうだ。

下を見よう。そうしよう。
だって、目の前に鏡が合っらどうすんの。

「教えてあげるから！？。くっ、でも、勝った！！。」

きつと、胸の事だな。

でも、それはどんぐりの背比べや耳クソ目クソと同じだぞ。
ここからは女子トークになりそうだ。
その前に、

「アーチャーも、後ろを向いているのか?。」

どうなったかは、想像に任します。

でも、そんなことより学校はどうしょ。もちろん、セイバーのだ。
俺を守ってくれないとやばいらしい。

俺は死ぬ事は、セイバーが負ける事消える事になる。
にしても、悪質な戦争だな。

生贄を捧げよ。望みが夢が叶う。になる。

あれ、でも、どうして受け取り先がサーヴァントなんだっけ?。
で、高エネルギーだから危険だという事か。

其処を何とかすれば、マスターも受け取り可能ではないのか?。
怖いな。

学校では、校長を脅せばいいや。

偽名はトリスにしよう。

そんな電波を受信しました。

「終わったわよ。」

「うむ、最高だ。褒めて使わす。」

んな感じで、監視役に会いに行くのでした。
それで、

「なに、してんの。」

なにさ。

警戒心はないのかと心配する。

「動く武器倉庫の銃倉庫になっている最中。」

後はクリスタルな木刀。

勿論、神秘つきでいろんな意味で切れます。

愉快的ダンディおじい様に頂きました。

お願いして作って頂きました。

おじい様曰く俺の性格は正常で愉快だからしいけど。

意味不明です。

しかも、失礼でした!!。

食費を払え!!。

「あつ、そう。」

なにさ。

突っ込み満載ですか?。

*マジで、満載です。魔術師から見ても異常です。
なんでさ。

ん?俺は何に突っ込んだ。

後、ネコアルクにお願いしてついていました。

「高級猫缶のために頑張るにゃ。」

その脅しの風景に遠阪 凜は驚かなくなってきた。

外で歩くとかなりの人、人。

戦争が聖杯戦争が起きているなんて、知らずに徘徊している。

うわー危ないな。

「で、何を詰め込んでいんのよ。そのコートには何の素材のやつが。」

聞き方がオブラートなんでその期待に答える。

「アルミー式に小型系にルーン弾が沢山。」

いうと、かなり顔を顰められました。
理解できない。

「ここがそうよ。」

「うわ、間桐家より暗い。」

否定の声が聞こえない。

なんだか、かすかに死臭もする。

あれつと、思い自分を匂ってみる。
違うな。

中から？、うわ。

「なんだか、怖い。お化け屋敷より迫力ある。」

中から、化け物系のモンスターがでて、全然不思議じゃない。

「そうね。」

うわ、否定しろよ。

まあココまで来ると賛成もするよな。

「監視役は外道だから気を抜かないでね。」

「私はここに残ります。」

わゝ素敵な位に信用されてないな。

しかも、きつぱりと言い切るセイバーがいる。

それで、教会の中に入る監視役は、どんな人？
入ると

「遅いではないか、凜。」

「うわゝ外道シスターならぬ、外道神父さまですか。」

さあーと小声に出してしまった。

そっちですかと納得した。

「セイバーのマスターを連れてきたわよ。」

*実は、そんなシスターもいるんだよ。

実際に居るんだよ。

その事はこの二人は知らない。

「君が？。」

「もどきの衛宮士郎。」

魔術師でもない、一般人でもない。

だからもどきだ。

中途半端な俺だから仕方がない。

いうと、振り返る外道。威厳在るお姿です。

「ほう。」

何感心してんですか。

変態は死滅しろ。

「だいたいの説明は済んだから、報告しに来たのよ。感謝しなさい。」

ふ、て笑う。

うわー悪そうな人だ。

でも、7：3ヘアーが似合いそう。

サラリーマンに転職したらと言いたくなった。

あと、伊達眼鏡着用で。

「では、衛宮士郎よ聞け。」

はい？。

「10年前の大災害は聖杯戦争によるものだ。」

どうすると、言っている。

決まっている。

「保」参加するから、まずは黙れ。「そうか。」

言葉の先は絶対に保護だろ。

大きなお世話です。

知らないおじさんのお世話になりたくもない。

「…終わったから、帰るわ。」

遠阪がいうと外に出て行っただ。

帰ろうとすると、

「喜べ」

悪顔のおっさんがいた。

何を？

「君の望みは叶う。」

「どれが？」

医者？デザイナー？機械関連ですか？。それとも、服飾関連？。

どれも、捨てがたい。

考えていくうちに絶妙な顔になっていた。

「いや、気のせいだ。気にするな。」

俺は外へ出て行く。

出ると、アーチャーやセイバーが少女を射殺すぐらいの目つきをしていた。

キレイな子だな。

将来有望だ。

怖いと可愛いのコラボ。筋肉ムキムキと幼女。鉛と雪。似あるな。

「なら、教えてあげる。」

何が起こったか、点にも解らない。

やっぱり奇襲に合いました。

さてどうやって、遣り過ごすかを考える。

「わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言うの。」

「

感心する。

名乗るなんてどうかしているけどでも。

「美女と野獣コンビか。」

有名な劇でそんな劇がある。

コンビは抜きでね！。

きょんとした顔は可愛く見える。

でも、子供がチェーンソウを持っているのと同じ状況だ。

「はい？。」

おどろいてんな。

でも、ところどころが壊れている。

なんかの欠片とかが残っている。

あ、でも言うなら

「いや。美少女と野獣か。」

えみやしろうは、戦いにのめり込んで行くのであった。
さあ、えみやしろうが求めるハッピーエンドになるのだろうか。
運命修正率、3%
いまだにジリ貧だぜ。

事件2。さようなら、日常。
(後書き)

では、次回。御機嫌よう!!。

短編？。タイガーコロシム マジ狩るアッパー、ブレイク。by えみや（前書

なにをやってんのよ！。

わたしー！ー！ー！。

めちやくちやヤバイのにさあー！ー！。

短編？。タイガーコロシウム マジ狩るアッパー、ブレイク。byえみや

ここはどこだ。

そして、この町の名は…ステッキは誰？。

「きゃー！ー！！呼べました！！。」

うん、ウーマだ。

マジで子供たちが喜ぶぞ。

「私は素敵に無敵な不思議な「まずは、教える。」ひつ。そんな物
下げて下さいまし！！。」

勿論、銃です。

リコルが素敵に酷いハンドガンです。

リコルとは、反動です。

くねくねする素敵に無敵な不思議なステッキさんは疑問げだ。

「あれー？。でも、どうしてです？。どうして、どう見ても衛宮士
郎さんですよ？。」

正義の味方、よろしくな？。衛宮士郎ですよ？。」

うわ、何その痛いのは誰です。

しかもここは夢ですか。寝ていたはずだし、可笑しい。

あれ？。起きている筈の現実の記憶が思い出せない。

きっと、コレは夢だ。

決定しました。

ここは夢の根城だ。

「正義の味方はしてもないけど、確かに俺がえみやしろうだ。」

いうと、うん？なんだかシャキンと言う効果音が出るぐらいに真っ直ぐになる。

なんというか、胸を張るといつかうん。

「そうですか、それはそれは面白いです」

まずは、その脳みそをカチワレ。
身体を真っ二つにしる。

「なんだか、怖くなっちゃいましたけど。いってらしゃーい。」

落ちる浮遊感、こいつは

「お前はやっぱり私刑。」

そうやって、俺は正義の味方という幻想を抱く馬鹿の住む町へと向かうのでした。

その後の、素敵に無敵な不思議なステッキさんはガクガクブルブルしていた。

「あう、なんだか怖いです。」

そこで、出てきた。

お馬鹿オレンジ。

真面目に役に立たない参謀で御座います。

素敵に無敵な不思議なステッキさんも参謀ばいのですがそこはスル
ー。

「なにが役に立たないですか。」

失礼。

「にしても、ルビーちゃんが怯えるなんて何かありますね?。」

気になります。

いうと、素敵に無敵な不思議なステッキさん、ルビーちゃんが反応する。

素敵な事を思いついたようで御座います。

「衛宮士郎 いえ、えみやしろうはなかなか面白そうですよ。」

こんなのありですね。カレンさん。

企みを孕んだ声でいうルビーちゃん。新しい玩具を見つけたようです。

連れて笑うカレン。

「あら、楽しそうね。」

ここで、マジカル三人衆は企みを開始した。
続く。というが、

「マジで、あのステッキはマジで狩る。」

このえみや しろうが問題沙汰を連発するのは言っまでもないのは
読者の知っての道理で御座います。

本気で続く。

短編？。タイガーコロシム マジ狩るアッパー、ブレイク。by えみや（後書

なにやってんのやら。

好きな時にドシドシ書きます。

事件3。うーん、意味が解んない。（前書き）

短編はどうでした？。

楽しく、両立しよう！…というモットー。

作者こと、華山は無計画者です！…。

行きまーす。

事件3。うーん、意味が解んない。

「アルンツベルンですって?。」

うーん、解りません。

って、あれでしたか。

「空白の時間で説明したあの始まりの三家のAさんですか?。う…遠阪?。」

つい、うつか凜と呼びそうになった。

しかも笑う。

そんな姿に相手さんはタジタジ。

まさか、脳内変換の事ばれましたか!。

「てか、エンカウント率高いよな?。変態二種にセイバーに遠阪に
って。」

「確かに言えなくもな。」

セイバー、返事を有難う。

そんな会話で相手がはい?と言う顔をする。

それは勿論だ。

だって、サーヴァントは七人。

そのうちの4人に会った事になる。

うわ、今更笑えない。

「よく生きているわね。でも、わたしが殺してあげる。」

はい、現実味がないですーすー！。
マジで意味解んないよー！。

「バーサーカー、殺しなさい！」

直訳、狂戦士。

かなり怖いです。

おじいさんといういい勝負しています。

「ここは同盟ですねー。」

きりつとした顔の遠坂さん。

魔術師と言うのはお仕事の名前だと嬉しいです。

よく言う、仕事顔ですね！。

んで、お馴染みのセイバーの鎧姿。
戦衣装ですね。

「なんで、えみや君ってそんなに余裕かましてんのよ。アーチャー！。

」

「わかつている。」

がんばれーと俺は呑気に構える。

だって、この中で最弱なのは俺じゃん。
どうしようもないねーです。

「セイバーは定位置で頑張つてな。」

「了解です。」

俺だって、援護の一つはしたいが専用の装備がいる。才能が無いから無理。

狙撃には自信があるけどさ。

何を装着しようか迷うな。

取りあえずは、魔眼を最大に発動。

指輪を左の人差し指に嵌める。

なんていうか、セイバー、殴ったりもするんだ。

そんな腕力に鉛色の戦士がガードにまわる。

受身にならないと、後ろのイリヤスに当たるかも知んないもんねー。

セイバーってチート？。と思える腕力を発揮している。

「なによ。バーサーカーにそんな攻撃するの？。」

まるで、有り得ないと言っているみたいだ。

なぜにそんな事を言えるのかが疑問だがどうでもいい。

周りに破片が散らばる。

まあ、俺に出来るのはコレしかない。

「点火。」

魔術回路の一つを強制開通。

これも、ダンディおじいさんがくれた。

属性で唯一つの適合した、火を発動。

他の属性指輪あるよ。

魔術回路は火の属性の物で、指輪は底上げ用だ。

「ルーン展開。」

そして、銃を相手に向ける。

弾には火のルーンを刻んである。

そのまま狙うとセイバーにも当たるので別を狙う。
リフレクトショットを狙う。

物にあてて弾の起動を変えろという荒業的な技術。

「相乗、爆裂からチャージ。」

狙うのはどこでもいい。

このショットは普通ではない。

おじいさんやカレー魔人のお墨付きの一撃。

（セイバー、少し補給を絶つからな。）

（へたな一撃をするなよ。）

2、

セイバーが相手の攻撃を避ける行動に移る。

3、4、

打ち合い、それに気づき相手は猛攻撃を仕掛ける。

5、

それでも打ち合いには応じるセイバー。

流石、だと思わざるおえない。

6、

相手はこちらに気付いた。

しかし、来ない。離れればイリヤスにセイバーの剣が襲うからだろ
う。

7、8、9

お互いに防戦になりつつある。

この一撃を受ける模様。

奥の手の1でも食らえよ？。

「10、フレイムバースト!。」

あたし的にはよくは解んない。

えみや君は確かに一般人に近いと思ってはいた。

でも、今のこの状況は何?。

三節の呪文にタメが何秒かがいるみたいで実用性が点にもない。
前衛が居てこその一撃と言えるわ。

「どうなっているだ。」

アーチャーも驚いている。

これって、どうかしてるわ。

塗装は剥がれ肉の焼けた匂いが充満。

どういう原理でここまでの威力を出せるのかしら。

「ごっほっ、ごっほ」

吐血ってどういう事なの!。

どうしようもないな。

「ほら、しっかりしなさい!。」

遣り過ぎた。

調子に乗って貯め5秒を10秒にしちゃった。

まあ、いいよね?。

頑丈すぎる死徒でも10秒もあれば十分だ。
でもさ、反動がきつい。

「じっほ、じっほは!!」

吐きまくってしまっ一撃なんです。

反動が異常の一言だし、バズーカー片手打ちよりも酷い。

一応は強化を軽くしたけど、それでも在り余す。

にしても、遠坂って優しい所あるんだな。

安心したよ。

「へー凄いじゃない。でもね、バーサーカーは生きているわよ。」

いうと遠吠え。

勘弁してください。

「なによ。どう言っ事よ!?!」

俺の火力はたしか、それでもAはギリである筈だよ?。

あゝ、

「逃げていいですか?。」

「駄目よ。でも、こんな馬鹿な一撃を出した御褒美に教えてあげる」

なんだか、絶望するカウントダウン。

「真名はヘラクレスなの。」

「ヘラクレスですって。」

絶望に染まる。

こりゃ、水晶刀では無理。

底上げ用のあれを使用しても無理だ。

天下の宝刀を出せば、何とかはなるけど後が面倒になる。

「じゃ、狂いなさい。バーサーカー。」

笑えないな。

しかも、狂ってもないですか？。

制御に割く魔力が在るんだ。

「ほお、まだまだ楽しめるといふ事か。」

はい、戦闘狂バトルジャンキーがここに居る！！

でも次の瞬間に眼が鼓膜が酷い事になった。

閃光に爆音。

「遠坂？、アーチャーってボマーなんですか？。」

「知らないわよ！。んな事。」

遠坂よ。まず、そんな言葉をいうか？。

まるで真名？を知らないと言ってるような気がする。
あっ！？。

「セイバー！！無事か！。」

煙の中から黒い姿が見えた。

どうやら、ココからだと言はれる形はある。

「掠り傷だ。問題はない。」

その目の前には盾になったと思うネコアルクの姿が。
ぶすぶすとなっているが無事そうである。

「高級猫缶分は働くニヤぞ。」

相手も、立っておりどうしようない事だ。

「ふーん、眠たいから帰るわ。じゃあね、お兄ちゃん。」

現実逃避げに帰る始まりの三家のAさん代表。
しょうがなくもない。

こいつの耐久性にはおじいさんもドン引きでした。

「妹なんて知らんぞー！ー！ー！ー！ー！」

じいさん！隠し子なんて作る暇あったのか！。

それに俺には妹なんて居ないぞ！。

いても、あんな美人さんではないぞ！！。

確信はある！。

「あ、そう。」

後姿にはかわいい女の子にしか見えませんでした。

遠阪の方を向くと何やらと悔しげでした。

齒軋りしていて、学校のマドンナが消える。

一成、お前の雌狐発言は間違っではなかったぞ。

「えみや君、始めに言った事覚えてる？。」

「Aさんですか?。」

ぎろりと見られた。
なんです。

「同盟よ!。同盟してやるっていつてんのよ!。」

逆切れきた!。

カルシウムどうぞ。牛乳をどうぞ。

「オニヤ、ふざけ過ぎニヤ。」

「お前もな。」

そんな一言で逃げるように帰っていった。
俺たちも帰ろう。

明日の材料とかを確認して、高級猫缶を上げてから寝よ。

黒黒絶望。

万の敵を切り伏せ、丘で朽ちる少女。

その姿は美しく、はつきりとした金色の髪に翡翠の眼。
諦めずに何かを望む。

しかし、その望みは叶えずに黒き暴君として光臨する。
隣に居るのは誰だ?。

それにココは冬木の地だろうか?。

でも、其処に居るのは俺であり俺ではない。

正義の味方に燃えて、そして俺に殺される。

俺に似た誰かがそれをする。

自分の理想を重ねても違和感がある。
むしろ、吐き気がする。
早く、帰りたい。
早く、現実に帰りたい。

そんな感じで朝が来ました。
早朝とされる5時58分に起きる。
珍しく6時より前に起きた。
汗でビッシヨリしていた。
早く、ご飯を作ろう。

「マスター、おはようございます。」

そうだ。

昨日は忙しくて忘れていた。

「その、マスター言うのを止めてくれないか？。色々、やばいからさ。」

「どう言う意味ですか？。」

内心でため息をした。

これは重症だなと感じたほどだ。

「当然、今日から学校に行くからだよ。」

俺の事はしろつで、偽名はトリス・カティナ・スブルンランカで。」

趣味全開の名前。

眼をまんまるにして、反応が面白い。
驚きの一言だろうか。

「あと、ネコアルクは家の警護を宜しく。」

「アイニヤ。」

「りょ…了解した。」

さて、用意しなければ行けないなあ。
後で訓練もな。

煮込み料理にしよう。

ささつと皮を捲って切って、いい大きさにザクザクッと切る。

調味料も入れておく。

朝連のために起動。

痛みは我慢。

でも、

「珍しいな。投影が成功した。」

そんなこんなで煩い朝がやってきたのである。

事件3。うーん、意味が解んない。(後書き)

次回はステータスです!。

おいおい、真面目に誤字が大量に
報告有難うございます。

えみやのステータスとタイガー道場！（前書き）

まんまです。

えみやのステータスとタイガー道場！

「はい。ここでも参上、タイガー道場だよー！」

色物大好き書き易いのです。
お隣が皆さんお馴染みの

「弟子一号です！。ウツス！」

「なんていうかー？しろくくんってチート臭しない？」

大丈夫です。

むしろ、この位が丁度良いのです。

なんせおじいさんとネコアルクの知り合いですし？。
前々から決まっているのです。

「へー。」

それに地味にネコアルクは活躍していますよ。
主に盾にですが。

「あの猫がですか？」

「猫って言わないの！ネコアルクちゃんは誰かさんの親戚的な存在
なんだから！！」

そうですね。

そういえば、弟子一号さんはネコアレルギーでしたっけ？。
いや、猫が嫌いでしたよね？。

それに師匠の言う通りにそんな存在なんですよ。

「すごいのか?。」

そんな時に素に戻らないで下さいよ。
凄いですよ。

しかも、地球と同じ重さでも耐えられる強靱さなんですから。

「ね?。素晴らしさが解るでしょう?。」

いなよ。

面倒臭。

「えーそんなこと言うとなんか何でも良い事になるんだよー。」

「そーだそーだ。」

まあ、脱線しましたけど。

えみや様のステータスもどきをドウゾ。

えみや しろつ

中立・混沌

筋力 B - 魔力 D (B + +)

体力 A 速さ C + +

耐久 C + + + 幸運 D

魔術 A？

「あれ？なんで宝具欄に魔術があんの？。」

えみやだつて英霊じゃないの！。
かわりに魔術なの！。

「なるです。」

「はい！じゃあ（B++）ってなんですかー！。」

瞬感的な魔力量です。

作中にあつた貯め込みの魔力です。

それにえみやの魔術回路は丈夫だしさあ。

それと、魔術A？は威力だよ？。

「たしかにそんな事どこであつたよね？」

ですね。

では、ユニークスキルやその他！。

マイペース EX

相手の調子を狂わせる、自分のペース。

これだと、AUOもタジタジになるだろう。

投影魔術 ？

修理の時に使用している。
なにか秘密でもありそうだが…？。

解析魔眼 ？

解析されたものは何でもわかる。
扱う人によってはセクハラもできてしまう。
オーダーメイドの服が欲しければこれで一秤。
秘密がありそうだ。

銃器の取り扱い B

ココまで来れば十分だろう。
だが、銃大好きっ子のえみやにはAにも匹敵したりもする。

ルーン魔術 C

それなりに扱かえる程度。
それでも、弾丸に彫る位だ。

持ち物編

オーバーバイク六号

えみや作のオーバー機能の原型をなくしたバイク。
今のえみやの愛用機。

オーバーバイクの歴史。

初号機は大破。

一号は大破。

二号、大破。

三号はテスト運転時にカレーの魔人に買い上げ。

四号は銃機能を付けたが大破。

五号はおじいさんにプレゼント。

ちなみに三号は走り易さ、頑丈さ、安定に収容率重視。

五号は速さ、消音機能付き、静かで迷惑はかけない素敵機能。

愛用の六号は銃に消音さらに頑丈で安定性がよく扱いにくい。
癖が強く、無意識に強化している位だ。

人を轢く事も収納もあり。

「ひくですか!?!。」

うん。アーチャーを轢きたかったからね。

「おいおい。犯罪ですよ!?!。」

大丈夫です。

亡霊さんにしかしませんから!。

「それでも、どうかしています。」

属性指輪 B

属性強化を目的とした指輪。

五大元素の指輪もある。

計六個。

火の指輪にはルビーが使われている。

「そういえば、お兄ちゃんって火を扱ったよね?。」

ん。そうです。

エミヤシロウも展開時には火も出てきたのでもしかしていけるんじゃない?

やね?と言う。

思いつきでね。

「在りちや有りかな。」

クリスタル刀 ?

おじいさんから貰ったもの。

刃を潰した物理的には切れない。

ある意味ではよく切れる。

「なんじゃそれ?。」

思い付きです。

以外にえみやしろうに関わっています。

「たとえば?。」

性格など。

「すげ!」

まあ、そのた色々ネタを練り込みます。

「なにそれ?」

えみや様の外道ブリが出ればいいです。

「意味わかんないけど外道だわ!?。」

では次回。

えみやのステータスとタイガー道場！（後書き）

あっていましたかね？。

ステータスはあっていましたか？。

聞きたいのです。by華山（前書き）

その為に開設しました。

聞きたいのです。by華山

はい、作者の華山です。

弱った事にオリジナルキャラを出したいのです。

そこで読者に問います！。

出すべきか、出さないべきかを！！。

ここでそのアイデア、ステータスを出します。

それで、判断してください！。

聞くなよって言うな。

かなり悩んでいる作者なので決めて欲しいのです。

すいません！！。

お願いします！。

最後に、申し訳ございません！。

銅根 あかね 悠太 ゆうた 10歳

混沌・独立

筋力 E 魔力 B - (?)

体力 E 速さ C

耐久 C 幸運 EX (- EX)

魔術 ?

ひたすらの御馬鹿。

夢も枯れ切っていて将来の不安を感じるお年頃。

枯れる事なき幸運を味方に魔術を極める魔術使いである。

ある意味で最強を誇る10歳児。

その魔術は独創的そのもので、遠距離戦では優位に立てるわけもない。

彼の持ち味はひたすら引き籠もり、使い魔のような人形を操作して戦うスタイル。

彼の使い魔兼メイドさん？たちは記憶触媒を大量に消費している。

自身の脳もそれに使用している。

使い魔は喋り、ハリセンなどで叱っていたりもする。

性格も多種多様で戦闘も出来る。

遠坂凜が聞いたら、即倒れるのは言うまでもない。

サーヴァントは、キャスターかデイルムツド。

キャスター時の掛け合い

「あら、何で外に居るかって？。今の私にはその必要すらないのよ。」

「んな、感じっす！！。」

「馬鹿、黙りなさい！！。」

「了解っす、師匠！！。」

デイルムツド時の掛け合い

「では、いい加減に外に出ましょう。」

「嫌だ。」

「はい、駄目ですよ。」

「引きずり出すなあー!!。」

な感じです。

思い出しましたが、師匠って被りますよね。

ディルムツドさんになりました!!。
有難うございます。

では、おねがいします!。

聞きたいのです。by華山（後書き）

有難うございました！。

事件4。ハロー、じゃ、帰る!!。(前書き)

そんな感じでゆるっとう!!。

事件4。ハロー、じゃ、帰る!!。

朝連が終わると、ちょうどよく桜と虎が来ました。

「ハローハローしろつ君。ご飯頂戴な!。」

「お早う御座います。えみや先輩。」

朝ごはんの嵐が来る。
止めて欲しいな。

「しろつ、そいつら誰だ。」

どう言おうかな・・・?。

「その人、誰なの?。」

「そうですね。誰です?。」

桜は怖い。

藤姉は本格的にヤバイ。

俺が随分前に強化した虎竹刀を構えようとしている。

ココで言いましょう。

俺が決めた偽名を名乗りましょうか!!。
そうじゃないと俺が死ぬ!!。

「トリス・カティナ・スブルランカだ。えみやさんの関連でココに来ました。」

最近はこの辺りが物騒と聞き、飛んできました。名目は短期留学で。

「

ナイスタイミング!!。

なんという外見の良さだ。

さらーと嘘八百つてよく言うものだ。

へーと感心する2人。

「私は、藤村大河って言うの。

私もね、最近は何騒って聞いて桜ちゃんの護衛をしているの!。
後はコレ。しろろ君が注文の品だよ。」

手渡されたのは俺が雷画さんに注文した物だ。

神秘が宿りそうなぐらいの年代物だ。

俺の心はホクホクです。

部屋の隅に置いて机を見た。

セイバー改めトリスさんと藤姉が席に座る。

俺と桜で器に移すやご飯をよそったりとそんな感じで用意した。

「美味しくない。」

なんですつと?。

冷蔵庫の中に余り物のハンバーグがあったので食パンをチン。
挟んでザックと切る。

「しろろのご飯は美味しいんだよ!。」

猛烈に言ってくれて有難う。

「これでいいだろう?。」

多分、コレでいいと思う。
いいんだよね!。

「悪くは、ないな。」

なんだか、もつきゅもつきゅと音を立てている。
あれ?、可愛い?。

「まあ、さつさと食べちゃっぞ!。」

そんな感じのえみや家の食事風景なでした。
おいしいなあ。
セイバーが可愛いなあ。

んで、

「行つてきますよーだ!!。」

大慌てで学校に行く藤姉。
早めに行けやと言っています。
俺クオリティですだよ!!!。

「桜、行こうか。トリスも行くぞ。後ネコアルクも。」

猛講義のネコアルク。
しかし、飼い主様に勝てるわけがない。

「なんでニヤ!!。お留守番はどうした!?。」

ほら、お決まりの文句。

同情の眼が集まっている。

「俺が死んだら、猫缶が貰えなくなるぞ。」

「勿論如くに着いて行かせて頂きます。」

こんな朝の風景である。

学校と言うのは面倒臭いというのが定評だ。

しかし、俺からしたらお金パラダイスである。

一回の修理費は500円。

そして、クラブ費と言う名のお金。

うっはうっはで御座います!。

「朝のクラブ会を行います!。」

このクラブは校長を脅してここまで自分勝手に設立をしている。
決定権は俺にある!。

うちのネコアルクはクラブのマスコットとして居たりもする。

運び込む方法は鞆に突っ込むだけです。

勿論、専用入れ物を用意はしています。

「はい、えみや先輩。」

慎二の妹の桜はこの会計士のような係りをしている。

慎二もこのクラブのメンバーの一人だ。

でも、最近は顔出さないんだよね?。

一度位は焼きでも入れるべきかな?。

「はい、会長。」

美綴綾子です。

俺との同級生で色々な達人で鉄人である。

遠坂凜とは仲がいいという噂があったり無かったりしている。
なんだか強い人である。

その他にはガイが居るのだが、
自由参加なクラブなのでそんな感じで来たり来なかったり差が酷いのだが、どうでもいいな。

「なんだ？この集まりは。」

「おー皆に紹介する短期留学しに来ました。

トリス・カティナ・スブルランカさんです。」

ガンスルーする俺、酷い？そんな物は聞く気もないね！！。
そんな俺に不安を持ったの知らないが握り拳を作っていた。
これは不味いと思うが無視しよー！。

「ここはだらけて遊んで楽しく高校生活を

過ごそうと言う目的を持ったとんでもクラブなんだ。知らなかったのか？。」

「問おう、しろつ。あなたは何を考えているのですか？！。」

はて？、そんなに悪い事しているのか？。

「…」

美綴は思った。

仕方がないと、実はこのクラブに所属している理由がえみやを止めるためだからだ。

もつとも空回り気味だが。

セイバーいやトリスには同情に染みた思いがあった。

やつとまともなのが来た。と

ココまで着たら同情します。

「先輩素敵です。」

そんな桜は素敵発言。

そりゃ、あんな事があってなんだか救われちゃった、あは。的なのりである。

しかも、彼女はえみや教やらを立ち上げている。

正式名はえみやファンクラブなのですが。

「ニヤー駄目だわ。」

ここにも、まとも人がいますがこいつは色物生物である。

喋る事はしては行けないのだが…。

「ニヤー!!。」

勿論、制裁はサイレンサー付きの銃でしかもアルミ弾である。

簡単にアルミホイルを丸めただけである。

結構危ないのは言うまでもない。

「何をやってんの?」

勿論、えみや様は怖いのです。

なんで、こういうの守らないのかな？。
俺のお願いにすら聞かないのなら一対一の頼み事をしなければ行けないなあ。

「ニヤ、ニヤ。」

「よしよし。もう二度とするなよ。」

もう、そろそろしたら時間なので解散にしなければいけないなあ。
今日は真面目に時間が無かったです。
勿論、校長は脅して許可を得ました。

毎日のホームルームにトリスの自己紹介。

それでも、眠気が出る。

最近によく違和感がある。

最近は気持ち悪い。

甘ったるいし、気持ち悪い。

よって、虫の居所が悪いのです。

慎二が居ればいいのになと思いつつ、授業を受けていた。

昼頃になるとトリスの御ご飯要求もきたけどなんなくクリア。

で、今は放課後のこの時間には、

「だれです？。」

またまたの変態さん。

あれ？、エンカウトン率高くね？。

「すみません、すぐに終わりますよ。」

はい？。

確かに紫は高貴な色とされている。

しかも、俺はセイバーが居ないのよ!!。

あ、やば、死んだ。

「おい、ライダー。殴り込んでからな。」

「…はい。」

なにこれ？。

慎二って、聖杯戦争に参加してんだ。

ちよつとおい、

「慎二あのさあ。」

呆れてものが言えない。

こいつは、絶対に馬鹿だ。

「凶器を振り回して楽しいのかよ？。」

俺に仕返しとか？、仕返しなのか。

はあ、馬鹿じゃね？。

死ぬかもしれないのにさあ。

「どうでもいいや。うん。」

俺が少しでも話すとびびる。

ありゃゝ遣り過ぎたのかな？。

いや、俺は悪くない、悪いのは大体は慎二だからな。
桜の事に関してもだけど、あれ？。

「なあ、慎二。俺との約束を守っているよな？。」

「はい！勿論で御座います！」

ビシッと敬礼。

うん、ならばよし。

嘘ついたら針千本ならぬ弾100発なのですから。

もしも、心が傷つく事したら本殺し一步手前にしてやるよん。

「では、頂きます。」

はい？って。

「俺は襲われる事ってないぞ！！。」

女じゃありません。

相手は女の人だからまさか！！。

「性的に襲われる！？。」

「「しませんから。」」

まるっきりの否定、突っ込みを有難う。

でも、少しも安心しませんよ！！。

水晶刀をさらりと取り出して、発動する。

「断ち切れ、^{アフ}開。」

開いた穴にライダーが入る。
勢いで突っ込んだらしくどこぞへ消えていった。

「な、ライダー！。どこに行っただよ！？。僕を守ってよ！！。」

必死さが伝わるお言葉を有難う。
で、どう調理しようかな？。

「ひっ！！。」

ふふふ、楽しみだな？。
そんな時、4人は見ていた。

「慎二、どうなりたい？。」

遠坂凜の視点でどうぞ？。

うわ、えみや君？その水晶の刀はどう使うのよ。
噂の番長ってえみや君の事だったの！！。
じゃあ、とある学校に喧嘩を売ったてのはほんとなの！！。

「すみません、すみません、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

ライダーの視点です。

すみません。慎二。
守れません。

しかも、アテネ並みの恐ろしさがあります。
ゆえに手を出せません。

あと、えみや…でしたね。

こうなったら、ジャンジャカボコすかしてください。

「ほう、きれいな90度だな。」

セイバーお嬢様の視点

なんとという外道。見てて清らしいぞ。

しかし、なんだ。

突っ込み所が大量に多いぞ。

しかし、私の知っている衛宮士郎はもっと矛盾があったのだが、ここまでいくと凄いぞ。

だが、金色と同じ事をしている気がするが、まあいいか。

「すみません、すみません、マジで調子に乗りました。申し訳御座いません。」

アーチャーさんの視点

なんです。

私は、俺は、こんな事をしていない。

しかも、次は土下座している。

怖すぎる。

こいつはマジで誰ですか。

どこでココまで振れ曲がったのだ？。

誰か教えてくれ！！。

こいつを殺しても、全然問題事しか起きないと思っている自分が怖い！。

「許すか。」

なんで寛大な俺がここまで怒るかって？。
死んでいるかもしれないからだ。

俺だからこんなもんで済んだものの、俺以外だったら死んでいたぞ。
おもに遠坂とかさ。
反省しろよな。

「ギャン。」

ワカメ視点

痛い。

僕のせいなんだ。

たしかに、ライダーで脅してやろうと反乱してやろうと思ったんだ。
ホントだよ！。

桜にだって親切心から脅しながらも頼み込んだんだよ！。
ちょこつと脅して、んで頼み込む予定だったのにさ。

こうなったら、桜の事を喋っても協力してくれないとやばいんだよ
！！。

「踏み心地は良し。」

しょうがないなあ。

家に連行して話してもらいますかね。
うん。

「わたちの出番って少ニヤくね？。」

「「知るか」」

事件4。ハロー、じゃ、帰る!!。(後書き)

さあ、次だ。

マジ狩る。第1話の轢いて出てきてジャジャジャーン！（前書き）

さあ、死に急ごうか？。

マジ狩る。第1話の轢いて出てきてジャジャジャーン！

「弱った。」

彼、えみや しろうはかなり困っていた。
そう！この有様にだ。

「うーん、どうしようもない。」

目の前には白い猫耳少女？である。
しかも、なんだか可笑的い。

「思い出せないな。」

勿論が如くに

彼は絶賛世界の強制力という嫌がらせを受けているのである。
しょうがないといえば、そうなのだが。
目の前の少女は

「暇だなあ。」

と愚痴っており服装もとんでない。

なにこれっと言いそうな自分を堪え夢だからと言っ夢の言葉で納得
して

ノーマルバイクを想像してみると出てきた。

「なぜに、まあいいか。」

そんな軽いのりで乗ったえみや様です。

その行動がとんでもない事になるのは言っまでもない。

「あー！なんで君がそんなのに乗るの！法律違反だよー！！。」

少年は思った。

どうでもいいじゃん。

いや、まじでその皺寄せがココの衛宮士郎に大迷惑をかけるのです
が…。

「悪・即・斬！」

「なんでさあああああああ~~~~~！！！」

君が悪い。

そんな騒ぎに

「なっ！どうして衛宮…バイク！？。」

「なぜさ。」

なんだか、ボロちい赤主従。

大変だったのだろうね。

魔法少女騒ぎはさ。

「うるさいー！！。」

失礼しましたーと。

「あーもう、轢くぞ。ゴラゴラ。」

そう言いつつ、銃を取り出したえみや様。
どうしようもないね！。

そんな様子にさらにびっくりな赤主従。
そして、

「コラコラホラソラ行け行け行けドンドン。」

んな勢いで銃乱射。

勿論、ゴム弾。

安全配慮はしているらしいです。

「きゅう。」

「なんでこうなる。ガク。」

流れ弾でやられて気絶。

不意打ちに近いもんね！。

「そんなの楽勝よ！。」

言うまでもなく弾いていた。

「あんたは人か！！。」

にっこりという白い不審者。

警察はどうした！！。

真面目にさ、警察はどうした！？。

と思うえみや様。

なんていうか、タイトルの略がえみや様になってるよね？と思う作者。

「ガイアが私にもっと輝けと「もう良い。」なんでよー。」

確かに痛い人だ。

えみや様は我慢は…出来そうにない。

頭を手で抑えて直視で出来ないと言わんばかりの仕草。

まあ、精神年齢は幼いが。

タイころあっぱーしている人は多分解る筈だ！。

詳しくはファンタズムーンのEDでお願いします。

精神年齢が低いのが諸解りである。

「あーもう、お前はひくぞ。」

どちらのひくでしょうか？。

解るはずもない。

まあどちらの意味もあるだろう。

オーバーバイクを取り出すえみや様。

「おお！！カッコいい！！。」

確かにそうだ。

その前に憲法違反しているのは言うまでもない。

ただ、白い不審者はそんな常識もない。

銃に対しても憲法違反だというのを知らない。

常識人は

「きゅう。」

「…。」

この通りであります。
だから、ボケにボケを重ねる泥の掛け合いである。
酷い有様だ。

「じゃ、地に帰れ!!。」

「キャイン!?!。」

オーバーバイクはどうしようもない馬力があります。
なのでこの有様です。
改造しすぎのバイクは凄いです。

「適当に回るか。」

そんな風景を2人が見ていた。

「士郎がくれたよ!?!。どうしょ!!。」

あわわと、しながら決意したように虎竹刀を構えた。
彼女は藤村 大河。

ああ、更なる混沌がココにいる衛宮士郎に災いが来るのは言うまでもない。

もう一人は

「ほう、これはこれは面白い。」

言峰綺礼である。

彼は面白そうに楽しそうに笑っている。
更なる混沌が冬木の住民を襲うのは言うまでもない。

「きやはー、おでんって美味しいですねー。」

彼女も活躍するかも。

マジ狩る。第1話の轢いて出てきてジャジャジャーン！（後書き）

えみや しろう

虎力 9

コスチューム：ツナギ（青）

武器：水晶刀（刃無し）

必殺技：銃乱射

超必殺技：オーバーバイク轢き当たり

都合のいい記憶喪失者。

自分のことや自身の持ち物、

冬木の地形などを覚えているのに人の顔や名前が思い出せない。

夢だと思っている。

なぜか、武器を出す事が出来る。

もちろん、彼は出てきませんから！。

ある魔術少年の偶然、彼の魔術（前書き）

さあ、行ってみようか!!。

とんでもなくネタバレ的な感じがするよ。

ある魔術少年の偶然、彼の魔術

おれはいつものように世界を描く。
ここにもおれの拠点を結ぶためだ。
これもおれのため。

世界と世界を繋いで魔法陣を描く。
世界とはなんだ。

それは幻想する事、現実だと錯覚する事だとおれは思う。
故におれは担い手であり紡ぎ手である。

「告げる」

いつもの事を行うだけであった。
なぜって？さあ、今になつては解る筈もない。

「我が名の下に銅根悠太の名の下に繋がれ」

求めるものはネットワークと同じぐらいの回線でもある。
ケーブルと繋げる行為と同じ事のはずだった。

「揺れずに広がり点と点を線で繋げ」

これは偶然に等しい事だ。

天文学的な数字に近いのだとおれは理解はしている。

「ここに証を、繋がり在这里に作る」

魔術師と言うのは研究者で探求者だ。
魔術使いは唯の探求者だ。

おれはつくり、描き、欲望のままに行動する。
おれ自身のためだけに頑張る。
それだけだ。

「おれは望む。ここに海路を造る！」

出来た。

そのはずだった。

たしかに成功したが、

「デイルムツド・オディナ 召喚に応じ参上しました」

誰！？。

おれにはそんな才能なんてない！。

何、かつこよすぎだ！！。

誘拐して来たの、おれという男はさ！！。

「あなたが私の主でよろしいですか？」

しかも、紳士的——！！。

混乱しているおれに気を使う人。

ってたしか、あっそうだよ。

可哀想な英雄だよ！。

あれ？でも、どうしてなんだよ。

「どうかしましたか？」

「いや、ちょっと混乱しました。」

原因は…あった。

おれと書の繋がりを切ってなかった。
オフってなかった。

「聞くけど、おれがあんたを呼んだんだね?。」

聞かないといけない。

事実がどうであれ、聞かないといけない。

どうしようもない事態。

こうなると、封印指定だっけ?。

確定したよ、おれ。

隠匿とか、結界系はしているけどさあ。

「はい。」

コレは無いでしょ?。

「おれでいいの?、いやその前に呼んでよかったの?。」

「はい、勿論です。」

いい人だー!!。

姉ちゃんや姉貴と違って優しいよ!!。

後ろからなにやらと、反応があつたので向くと、翡翠の短剣があり
まして…。

「…なぜベガルタがここに?。」

思わず声を出したデイルムッド・オディナさん。

…宝具じみた作品がおれの机の上にあった。

「おれのせいなんだね。」

偶然に偶然が重なりおれはおれたちは一緒に生活をする事になった。
とりあえず、

「まずは、話し合いましょう。そうしましょうね?!。」

混乱しているおれの頭にはそれしか無かったわけだ。
相手も、おれの混乱っぷりを見て同意してくれました。

「形式は質問をお互いにするやつ。一問に答え合っつていうので、
いい?。」

それと、忘れそうだ。

「あと、答えたくなかったら答えなくてもいいし質問が無かったら
無いつて行ってくれよ。」

「解りました。」

お互いに疑問に思うことも在る筈なのだから大丈夫だと思う。

「その前に椅子だな。座って。」

指先で椅子を操作してディルムッド・オディナに座ってもらった。
おれが座ると相手も座る。
マジで騎士ですね。

「まずはおれからね。」

聞きたい事はココだ。

「英雄なんだよね?。」

そう、ここだ。

相手さんデイルムツド・オディナは英雄だ。

疑うわけは無いが、確かめないといけないとおれは思っているのです。

「たしかに英雄ですが、正式には英霊です。」

「そうか。」

たしかにそうだな。

死んでいるわけだし、仕方がない。

にしても、本物か。

凄いな、おれって偶然だとしても魔術のレベルが高いということになる。

「次は私ですね。」

何が来るかな?。

と期待をするおれが居る。

マジで本物の人だぜ!!。

感動せずにどうすんだよ!。

「ベガ! いえ、なぜに短剣があるのですか?。」

…、仕方がない。

おれの魔術について教えるしかない。

覚悟は出来ているけどさ。

「あれはおれの魔術の副産物と言える宝石で鉾石な短剣だな。」

これについては軽くは話さないといけない。

おれの魔術も大概だからなあ。

バグが酷いですよ。

「それだけじゃ、わかんねえよな。」

手元にあつた窓の書を持つ。

暖かいのでカイロ代りに持っている事もある。

「銅根悠太の名の下に、開書！」

選択はおれの魔術の中で一番硬い金属。

出したら、すんごい事になりました。

魔力の濁流が起きた。

「こんなものがわんさか出てくるのがおれの魔術ね？」

そんな感じに書を閉じた。

「閉書。」

殺気を感じる。

後ろと魔王が降臨していました。

なんだか、蛇が見えるよー！！。

「悠太、なぜに引き籠もりに行ったのですか？。そちらの方は、誰

ですか？。」

流々子とかいてルルコと呼ぶ、このメイドさん。

元は魂で自縛霊です。

おれの作った人形の中にいる。

ボーンチャイナ製です。

「偶発的に召喚しちゃいました。」

「はい、そうですかつて納得しますか！？。ご飯は食べましたか！」

ちらーと眼を逸らす。

…ははは、人生どうにも行かないなあ。

「また、サプリメントと点滴や栄養食だけでしたか。」

「ひつ。」

なんですか、栄養があるからいいじゃんと言いたいと言っても無駄だ。

怒ったらやばいもん。

「あの、どういっ。」

ぎろりと睨まれたディムは引込んだ。

「黙って下さい。」

おれは泣きたいです。

女は強しとよく言います。

「食べないと拒食病になりますよ?。」

「だつてさ、め」

ギロリ。

あわわ、御免なさい。

怖いよ。怖いよ。

そりゃ、おれが悪いのだけどさ!!

流々子をまだまだ笑っていて怖いよ!!。

「今、ここで食べて下さいね。」

おれの好きそうなご飯でした。

面倒だな…。

ギラリ。

「はい!!。」

私は状況把握ができません。

この人はユウタのお姉さんでしょうか?。

大丈夫でしょうか、この呪いはどうしようもないのですが。

「すみませんがこの方は子供で夢が引き籠もる事なんです。」

…はい?。

なんでしょうか? 頭を殴られたような気さえしました。

どういう意味ですか?。

「馬鹿で馬鹿でわたしのような駄目な人までに眼をかけるお人です。」

」

もう一度いいます。

どういう意味ですか？。

今の状況はどうなっているのでしょうか。

「厳しく優しく接してやってください。できれば」

「食べたー！ー！！。デーム、執事服とか着てくれないか？。」

はい？。

なんですかそれは。

「我が儘にも付き合ってください。」

またもや笑顔。

汗が出そうです。

「後は日本文化や文字などを覚えてくださいね。常識もね。」

…、なるほど。

納得しました。

「わかりました。」

それにしても、呪いに等しい気配が余りしないのですた。

あれ？と思いましたので覚えてからで聞かなくては…。

これでは覚えないと聞けませんね。

で、その後

「抑えているんだ！これで過去の失敗はないぞ！！。」

「有難う御座います。」

デイルムツド・オディナ

筋力 B 魔力 D

速さ A + 耐久 C

幸運 E 宝具 D

上記はコピーです。

悠太曰く可哀相な人。

その通りに幸運が低い。

黒子の呪いがなぜか効果が低くなっている。

莫大な魔力で押さえ付けているらしい。

どこでその魔力を補給している？。

ある魔術少年の偶然、彼の魔術（後書き）

はっはは!!

ドンと恐ろしい事になりますぜ!!

魔術少年の本領発揮（前書き）

3連で頑張っていますぜ。

真面目成分の補給！！ですだ！。

魔術少年の本領発揮

刃と刃の演舞、技術と技術の打つ掛かり合い。
これぞが幻想と儚き幻想の戦いでもある。

「ありやりや、御強いですね!。」

軽く愚痴を零す黒の槍兵。

彼の髪は黒く槍も黒い。

しかし、誰の眼が見ても彼が弱いのが解る。
だがそれでも張り合うのは意地に近いのだろうか。

「そちらも凄いではないですか。」

彼はフィオナ騎士団の随一の戦士であるので、
その技量は解るのはそれほどの技術や経験がいる。

「そうです?、嬉しいですよ!。」

負けじと黒い槍を不意打ちと言わんばかりに攻撃する。
しかし、すぐに防ぐ。
当然のことでもある。

「騎士ならそんな不意打ちはしませんか?。」

不思議そうに聞くデイルムッド・オディナ。
彼は騎士であるから、そんな事はしない。
絶対に有り得はない。

「軍師役がメインですから、ね!。」

からんと、黒い槍が弾かれて地に刺さる。

「あちゃー、鈍りましたかね?。我らの主、宜しく願いしますね?。」

いうと消えた黒い軍師。

正座でうーんと唸る悠太に似た人物。

彼の手には軍師の槍を持っていた。

「はあ、毎日は精神、魂を休まずに修行で練習、教えの通りにしてんのなんでノアが負けんのかなあ。」

ため息に疲れを込めた声。

その声に返事をする騎士。

ここまでにお似合いな主従はいないと感じたりもする。

「そうそうに負けるほど甘くはありません。」

まあ、コレほどまでに戦えるとは思いませんでした。」

賞賛を贈るものの納得が行かない様子である。

誰もが完璧を求めるのは言うまでもない。

しかし、ここまでの完璧ぶりは無茶振りに等しい。

しょうがなくもない彼は子供である。

「ユウタ、あなたは其処までの技術を魔術を使用してて大丈夫ですか?。」

彼は銅根悠太である。

流々子のボディ人形は自分のためだけに作った人形が元である。人形師の技術を持っている事になる。

ココまでに細密な人形は珍しいのは余りはない。

「へーき、へーき、毎日してるから大丈夫。」

言うが、その顔は若干蒼い。

白い顔である。

無理しているのは言うまでもない事実である。

「明日ですね。もう寝てください。」

「いやーだ!!。」

問答無用に腹部を殴るデймさん。

しょうがない、彼は悠太は無茶の塊なのだから。

「有難う御座います。」

なんて言う事でしょうか。

人の言う事が聞くというのは嬉しい事です。

感動します。

「いえ、まだ我らの主は幼いですから仕方ありません。我々はしっかりと守り、御仕えすれば良いです。」

確かにと頷いた。

本当に言うまでもない。

本物の騎士というので影響を受けるでしょうね。

良い方角に成長しています。
感激で涙が出そうです。

「その通りですね。」

私たちは総合して我らの主と言ったりもする。
私も偶然ながらも仕えているようなものですから。
さてと、手に持っていた鞆から執事服と本一式、
常識から日本語を覚えるための手書きの訳書を出した。

「では、しっかりとお願いしますね?。」

「はい。」

しっかりと覚えてくださいね?。
それとペンの使い方とシャーペンの使い方を教えますか。

ディルムツド・オディナ

聖杯補正がなく、ただいま勉強に明け暮れている。
それでも主のために頑張る真面目な人です。
執事服をきたりもする。
なんだか、楽しそうにしている。

銅根悠太

なにやらと変わった魔術を使ってみたんだ。

『鈍りましたかね？。我らの主、宜しくお願いしますね？。』

ノアの一言や悠太の

『毎日精神、魂を休まずに修行で練習、教えの通りにしてんのに
なんでノアが負けんのかなあ』

には裏がありそうだ。

と言うより、伏線に近い。

オブラートに簡略的に会話しているのと同じ。

魔術少年の本領発揮（後書き）

後、一話で銅根悠太は参戦。

魔術少年は決意して刃を向けた（前書き）

死ぬ染む。

駄目だよね？。あぐ。

魔術少年は決意して刃を向けた

あれから半年が経った。

やっとの旅行である。

ディムは慣れてきたみたいで執事服も似合うようになっていた。

「旅行、旅行！あははは。」

随分昔に陸の海路を繋げた所がある。

旅行先は

「冬木ですか。」

そう、冬木だ。

なんだか、暗い顔をしているが何があるだろうか？。

大丈夫だと有り得ないと言っているので良いとは思うがどこにそんな心配があるのだろうか。

おれには解らないし、詳しい事は聞けそうにもない。

あんなに暗い顔をされると聞けそうにもない。

マジで聞けない。

「早く行きましょう。」

大荷物を持つ流々子もどこか楽しげだ。

当然だと思う。

ココは田舎の山奥だもん。

ひっそりこそこそするのには最高の場所。

「そうだ！！早く執筆活動を始めなければいけないぞ！」

良い資料があれば最高だなあ。
思い感じてはしゃぐおれたち。
今は夕暮れ、夜に近い。
早く向こうに着かないといけない。
アイデアも書き綴らないとね？。

「承知しました。」

魔法陣に乗るとあつと言う間にお家に着く。
みんなは居るみたいだ。

ここはおれの先祖の家で鍵も管理もおれがしている。
昔は、政府公認だったらしいけど詳しくは知らない。
解っているのはここが曰くの地であることだ。
でだ。

なぜにここに女の人の居るのやら解らない。
左腕のない人。

魔術に関わっている。
おれの感が言っているんだ。

「包帯に特製の300年物の薬を。」

「…はい。」

今となつては貴重に等しい薬。
魔術効果やさまざまな効果のある薬。
雑に使っても効果は変わらない作りらしい。
まじでここん処は遺伝はしているなあと思うところである。
魔術って手間隙がかかるのだからな。

「ディム、手伝ってくれ。」

「いいのですか。」

安心させるためにおれは笑った。

確信はしている。

こんな事はすぐに終わると予感していた。
良い方向に終わると感じている。

「わかりました。」

この人に聞かねえと思いながらベットまで運んだ。
運ぶと左腕のパーツを探す。

本来ならば専用に作らないと行けないがなんせ時間がない。
丁度良いのがあればあまり手間がかからないのだが…。
そういう事でここはディムに任す事にする。

「おれはこの人の左腕の替わりを探しに行ってくる。」

一言かけて部屋を出た。

掃除なんてしなくても新品そのものだ。

こんなとこまで魔術が敷かれている。

なんという手抜きだよと感心しながら人形部屋にはいる。

「よお、坊主。」

「なんで、天然記念物がここにいるんだ!!。」

いうとはあ!?!と声を上げられる。

あながちこの表現は間違っではないと思いますよ?。

そう、ほいほいと亡霊さんに会いますか!!。
ココ、重要!。

「まあ間違つてはねえな。どっちにしろ死んだ貰うぜ。」

.....。

「嫌だ。」

たたーと逃げるおれ。

無計画ではありません。

あの人形部屋にはトラップがあります。

その内に武装をする。

「セレクト。名軍師の一式。武装、グラゼモア。」

ノアはおれの作品でもあり、友に等しい。

そして、クレイモアなんて呼ぶのはどうかと思ったのでグラゼモアで通している。

鍛冶師のおじいちゃんの霊と交渉してついに作ってくれました。

お家に居ますし住んでいます。

大剣を使うお姫様の愛用剣であります。

名前はエレン・エル・エタシエス。

それらしいでしょう?。

ただ、コレだとかかなりの眉唾ものだ。

だから、初っ端から仕掛けるしかない。

もう、破壊しつくしたらしい。

「じゃ、始めるか?。」

「来なさい。」

すべて、この剣の一撃で沈めます。
かなりの効果が付いているとは言っても、これはやばすぎです。
だって、もう、ピンチスキルが発令してるんだよ。

相手が来る。

軍師一式のおかげで反応はできる。

相手は油断している。

無理もない。こんな子供なんだから多少の油断はある。

勝負は一撃だ。

一瞬だ。

「生きる道は、この向こう!。」

一撃を避ける。

キーの言葉で火事場の馬鹿力と偽の宝具である魔術礼装を発動。
及びピンチスキルの底上げ。
的確に切断する。

「ち、やるじゃねえか。」

肩から左腕までの一撃。

沈み切れない。

血を見て腰が抜ける。

俺様は見慣れているのに、おれが見慣れてないせいかな?
動けない。

「あ?、この程度だったのか?。」

初めてなんです。

おれが初めてなんです。

「じゃ、死ね。」

埃を払うか如くに殺されそうになる。

金属音が響いた。

「ディム!。」

「まったく、どうしようもありません。」

助けが来てくれたが知らずが安心した。

まだ目の前の恐怖が居るのにといいのに。

相手はごちゃごちゃ独り言を言うが聞こえない。

念話なのだろう。

お姉ちゃんたちも得意だからなあ。

「じゃ、俺、帰るわ。」

「どうしてです。」

ん?と反応する蒼い槍兵。

こちらに殺気がギョングン感じます。

まじで気絶しそうだ。

「あんたもサーヴァントだろ?。諸事情色々で本気で戦えないんだわ。」

いうとすぐに去っていった。

どういうわけだろうか。

わからない。

でも、助かったのは言うまでも無かった。

「あなたたち。」

ココの家にいた左腕がない女の人がいきました。
包帯でグルグルだった。

隣には流々子がいた。

「話があります。」

そして聞いた。

聖杯戦争と言う話を。

10年という短い時間で始まった事を。

彼女、バゼット・フラガ・マクレミッツは元マスターである事を聞いた。

封印指定執行者である事を聞いた。

そして、襲われたサーヴァントは元々はバゼットのサーヴァントである事を。

「不甲斐無いばかりに言峰綺礼に奪われました。」

もう、逃げ出せないぞ。という声が聞こえた。
こうなれば、悲劇を喜劇にしてやると誓った。

魔術少年は決意して刃を向けた（後書き）

ですが、もう喜劇なんですよ。
頑張れ。

来週には事件5を出します。
と言っても、明日ですけどね。

事件5。 お前たち、待つて!?(前書き)

えみや様がついに外道に走る

悠太参戦!。

またもやシリアス風味。

事件5。お前たち、待って！？

「さ、話せ。」

これは、聖戦である。

話してくれないと困る。

どういふ事は話してくれないと困りますな。

「まずは、令呪だな。どうした。」

言つとギロツと睨みだす。

一瞬に空気が変わる。

どういふ意味だ？。

「話せない。」

はい？、ん？、解らないな。

これは…。

「知らないや教えないとかじゃなく話せないでいいのか？。」

こくりと頷く慎二。

これはよく解らんな。

「あの趣味悪い結界はあんたがしたの？。」

うわー心臓に悪い。

なんです？遠坂つて魔眼持ちですか？。

ただの睨みにここまでのさっきとは、魔術師さまさまですねー。

「そうだよ。お前ら以外のマスターを出すだけのただの脅しだよ！」

ふーん。そんな声が響く。
そんな中で

「紅茶だ。」

アーチャーはなにしてんの？。
人の棚を漁りやがってよ。
銃乱射でもすんぞ。

「良い紅茶を買っているな。」

あたかも、意外だと聞こえる。
失礼な。

俺が機嫌取りに使う奥の手の紅茶を使うなんてお前は非道だ！？。
次は、どうしよ…。

「しろっ、どうかしたか？。絶望した顔になっているぞ。」

聞くな。

「魂を融解する悪趣味そのもの結界を脅しって
どういう意味なのかしらね？。」

うわー、それって調節すればバイオテロ風に出来るじゃん。
それはそれで便利だな。

「慎二、触り位に発動しろ。」

「「「「はい?。」」」」」

なぜさ、そんなに俺の提案がおかしいか?
みんながすごい顔になる。

「あんたね! どういう意味よ!。」

猛抗議のうつか凜。
ぐわーーて、虎がお前。

「マジですか?。」

何いつてんのさ。
セイバーは俺の味方じゃないのか?
とんでも案なのかよ。

「これがお前の答えか?。」

うん、お前は何を言っているのかな?
見張りはどうした。
まずは其処からだ。

「このこが言った事を聞いた上の話ですか?。」

このこって遠坂の事だよな。
どうしたの?。
魔術師ならそんな平和的活用を考えてくれよ、と心の突込みを入れる。

「くわしく言えよ、答えろよ!!。」

非難の嵐。

お前等は人の話を聞く気があるのか解らない。
理解できんぞー。

「まずは、黙るニヤ!。」

しやしやり出てきた、ヘンテコ生物。
うんうん、よく解つてらっしゃる。
理解してくれる暖かさココにあるぞ。

「こんな外道にも考えがあると思うニヤ。其処を聞けい!!。」

でも、ウザイので麻醉吹き矢。
クターと寝る馬鹿猫。

「なあ、慎二にうつ…遠坂。俺たちって学生だよね?。」

なんて微妙な顔してんだ。

遠坂にいたっては危ない。

ついついつつか凜って呼びそうになった。

危ないなあ。

「だったら、バイオテロ風にすれば休みが貰えるじゃないか!!。」

しらー。

うん解っていたけどコレは辛い。

「まあ、在りだけ学校内にマスターが居るって伝わるんじゃないのか？」

「大丈夫！。遠坂だと思うのが落ちだから！」

和やかになりそうにもない。

「確かにそうだな。凜、どうするのさ。」

遠坂凜がかなりの形相になっている。

後ろには真っ赤な火が見える。

髪の毛がゆらりと蠢く。

ツインテールがゆらら～って動く。

「魔力放出か？。」

呑気に構えるセイバーさんどこかニヤニヤしています。

というか、サーヴァント組みはかなりといって良い位に退却中。どこぞの戦車みたいに退却中。

ほら、突付いたら腐るって言うアレ。

厄介事は勘弁ですかね？。

俺の本能が言っています。

危険だと、マジで赤信号です。

「どうなってんニヤ？。」

知るか！。

「はぁ、この生物は何で出来てんのよ。」

御怒りが収まったのか!!。
いや、そんなわけがない。
俺の直感が言っている。

「何か?。」

「いえ。」

沈黙沈黙。

あれ?、怖い、なんだかなんか怖いわ!?。

「決めたわ。あたしはここに居るわ!。」

ちよつ、お前、止めてくれ!。

これじゃあ、俺たちはマスターだって宣伝してんのもと同じじゃないか!。

「毒を食らうのだからこの程度いいでしょう?。」

「え?、でも、「同盟を組んでいるから拒否権なしよ。」さいですか。」

なんだか、どうでもいいや。

うん、人生は強引には押し進めたらならんだ。

いざと言うときは柔軟に対応しなければ行けないんだよ。

これ、俺の経験ね?。

「じゃあ、荷物とか取りに行くか。慎二、セイバー行くぞ。ついでにライダーも。」

講義の声が聞こえるが無視。
俺からの一言。

「拒否権はありません。」

はい、撃沈したぜ。

そんな感じに部屋決め。

慎二はすでに荷物は大昔にあるし、部屋持ちだ。
んで、さらーと決まる。

「荷物持ちされるとは思わなかったが。」

そんなセイバーの一言がありました。
着々と部屋をみる。

「お、洋風とかもあるのね。ここにするわ。」

荷物を置いてさっさと去る。

あとは女の子の時間だ。

すごいね？。

居間に言っただけ。

慎二によれば、明日の朝当たりに発動するらしい。
よかったよかった。

打ち合わせでは、簡単に藤姉が着く前に発動。
ようは藤姉に目撃者に仕立てるといふ事。

「俺の良心には傷つかないな。」

「この外道が。」

はて、何処が外道かな？？。
ふふふはは。

「お待たせ。で、なんでアーチャーが執事服着ているの。」

無言。

可哀相な子としたかな。
最高だわ。

「一家に一人は欲しいな。」

呆れ顔になるうつか凜。
なんです。

意味解んないぞ？。

「同情したわ。」

「まっただ。」

にしても、良い紅茶だ。
おいしい。

で、警報が鳴る。
あれ？、ああ、夜ね。

「敵の侵入だつてさ。」

一瞬で用意する人たち。

うーんこの時間を害するってどついう奴だよ、まったく。

少し時を遡る。

「うーん、ここにサーヴァントが3騎、居るみたいだ。」

当たり前ならな。と思う。

ん？、口調が違うつて？。
勿論だ。

今の俺様は痛いキャラだからな、当然の事よ。

「しかし、本気でアレの試し射ちするのですか。」

夜風が気持ち良い。

さあ、まずは炙り出した。

「当然だ。俺様とデймがあの家からサーヴァントとかを炙り出して」

視点が高い。

それでも、デймより低い。

おれよりかはずっと高いのは言つまでもねえ。

「おれが空から射る。」

マルチヘクタルは疲れるが我慢が肝心。
さあ、魔術師の夜が始まるぞ。

「天を駆ける担い手はここに。」

カードから飛翔の概念を引き出す。
複製の書を携えて空に飛ぶ。
おれの他に、ピエロとノアが護衛に着く。
なわけなので2人にも術を敷く。

「行つて来るね?。」

「仰せのままに。」

うん、マジで騎士だわ。
カッコいいな。
憧れるわ。

「ピエロがなんでこんな地味な役なんだよ。もう、嫌ドウ。」

ピエロといいつつも、服装が控えめ。
おれが言うのがおかしいがマジで逝かれている。
これもおれの作品。

「はいはい、場合と状況によっては我らの主が死にますよ。」

さすがノア。
流石リーダーです。

その言葉に反応するピエロ。

「無理無理無理無理無理だよーーーー！！！！。」

はぁ、では

「「作戦開始」」

俺様はディムと襲撃しに行き、
おれは空に駆け、そして魔術？を発動しに行った。
空は広くただそれだけだ。

「開け、我は窓を開くもの。」

空間が歪む。

さぁ、始まりだ。

「総員、打ち型用意！！。」

声が響く。

指令を指示を出す。

見守るのはピエロとノア。

「全員、構え。」

命令指令はディムが侵入し、強襲する。

外に出てきたサーヴァントに撃てばいい。

所詮は魔術師。

根源を知るための最後の手段である、聖杯戦争。
年老いた奴らがどんな手を使っても知りたがる。
どんな手を使っても、人を殺してでも。

自分の利益になるのなら自身の子供ですら利用する。
薄汚い魔術師はささと消えてしまえ。

「ひゅう。早いね?。」

しかし、この俺様の結界を感じれるのか?。

答えは否。

隠密に密やかに敷いた結界に気付く事はありません。

おれと同じ魔術の使い手、担い手でなければ不可能だ。

それに、おれが操作しているパーフェクトボディは次点作品だ。
まあ同調率とか色々あるからこのぐらいの完成度なんですよ。

あ、口調を戻ったじゃねえか。
気を付けねえと。

で、今に至るわけだ。

「若い?。」

「なんだよ。老人様と思ったか?。」

何だこいつ?。

大慌てで外に出たのは良いのですが、なんですか?。

ちゃんと水晶刀を持っているぞ!。

お隣さんはかつこいいぞ!。

執事服でも着れば良いのになあ。

「なによ、こいつら。たった二人で攻めてきたのかしら。」

うん確かにそうだ。

でも、なんだ？。

違和感がする。

空が目の前の偉そうな奴に違和感を感じる。

「デイルルド・オディナ、久しいな。」

「セイバー？。」

知り合いか？。

いや、そうだとっても釣り合うわけがないな。
性格とかさ。

「…私は会った記録がないのですが？。」

「デイルム、気にすんな。きっと、前回のいずれかに会ったんじゃないか？。」

どういう意味だ？。

でも、この数だ。

大丈夫だと思いたい。

「それに俺たちの役目はちゃんと果たしたじゃないか。」

はい？。

つつ！？。

痛い、痛い。

異常を感じる、オカシイ。

コイツも、空も、世界がオカシイ。

「おい、えみや大丈夫か？。」

頭が割れるように痛い。

学校にあったライダーの結界？と違和感の感覚が同じだ。
すべてに違和感を覚える。

「そんじゃ、撃て。」

空から大量の矢が降ってくる。

一本一本が大量の魔力を含んでいる。
とんでもない神秘。

「全員、私の後ろに来い！！。」

アーチャー！。

お前、かつこいいぜ！。

頭を抑えながら俺に出来る全速力で走る。
遅い遅い。

セイバーに腕を持たれて、何とかなる。
背中もかつこいいな。

「ロー・アイアス 熾天覆う七つの円環。」

なんだ、小さく声が聞こえた。

ローアイアスの前の言葉が聞こえたような気がした。

でも、聞き取れない。

保険は念入りにしますか。

遠坂の目の前で発動させるのは

気に引くけど死にたくないので発動しようとする。

六華が咲き、見る見る散る。

おいおい、やばいじゃんか！。

「断ち切りて、開け。」

どうしようもないな。

最後の一枚になる。

「^{アフ}開。」

最後の一枚が消え、黒い裂け目が出る。

それは、とんでない質問劇になるなと思い。

彼らは去っていた。

置いて行かれたよね？。

事件5。 お前たち、待つて！？（後書き）

はあ、難産な気がするなあ。

お前たち、待つて！？はえみや様と悠太の事です。

次回は解説です。

タイガー道場、解説編だよ。（前書き）

解説編開始です。

タイガー道場、解説編だよ。

「ハロー皆さんお馴染みの師匠だよー。」

「同じくお馴染みの弟子一号！」

こちら作者の華山が解説させていただきます。

「つといますと?。」

いい処いつています。

正しく、解説。です。

だって、オリジナル系を発令しているから解説もいると思ってね?。

「親切だねー。なんだか入らないような気もするけど。」

まあ、所詮はわたしの自己満足ですからね?。

そこは誤解はしないで欲しい。

「「はい」」

まずは悠太。

前話には魔術師というのに並々ならむ怨みを持っています。

彼自身も利用されそうになっていました。

「ふーん、かなりの重い事情ね。このギャグ風味利かせた小説の癖に。」

いうな。

時々ぐらいはえみや様もシリアス風味を効かす事もあるよ！！

「嘘だ。」

「そうっす！。」

それと、俺様発言がありました。が、魔術少年の始めの話に

流々子とかいてルルコと呼ぶ、このメイドさん。

元は魂で自縛霊です。

おれの作った人形の中にいる。

ボーンチャイナ製です。

というお言葉があります。

一応は人形を操作しているのと同じ事をしているのです。

「じゃあ、人形さんが仕事して、自分はテレビ見て煎餅とか食べれるわけですか？。」

そんな感じです。

まじめに、おばちゃんみたいだ。

「五月蠅い！！」

はい。

「それって大丈夫なの？。大変そうだけど。」

流石御弟子さん。

大変なんです。

「「へー」」

簡単にいうと話を考えながら仕事するのと同じですね。

話がポンポンと出て楽しくなってきたのに注文を聞き逃すってやつ。

「ちょっと、リアルでなにしてんの?。」

いうか、聞くなよ。

「おいおい。」

しかも、仕事する手が遅くなるし、大変なんだよね。
それと同じ?。

「わからねーっす。」

説明がコレしかないのよ!。
理解してください。

次に破魔の嵐。

矢の嵐に合いましたでしょう。

あれにも仕掛けがあります。

「む?。どこに?。」

あーネタバレ! にならないか。

魔術少年の魔術少年は決意して刃を向けたのに出てきた、鍛冶師のおじいちゃん作です。

「おお! なにそれ?。」

すいませんけど、そこは読んで欲しいな？。
お願いします。

色々解説つきっぱい話ですし複線もありますから。

「ちょっと、オススメするの？。」

それしかないんだよ。
お願いしまーす。

「まじで無計画なんだから。」

ロリブル魔は黙って。

「酷いよ。」

「よしよし。」

次はえみや様の水晶刀。

おじいさんの関連の品なのは話の中でも解る。
むしろ、遠坂の関連に関わるお品です。
そんな感じで完！！

「まってい！」

なに？

「私の虎竹刀については！！。」

たしかに、実はかなり強くしています。

藤村大河もね？。

「おお！活躍するのね！」

はい、その通りです。
では

「「またね！」」

タイガー道場、解説編だよ。（後書き）

宜しくです。

ワンコって癒されるわ（前書き）

ちよつとわたしの作品とのクロス。

書きたいのだよ！。

すべての終わり、始まりの後の彼です。

まあ、読んでくれると良いなあなんて？。

読まなくても大丈夫よ！！。

ワンコって癒されるわ

俺は、人を拾いました。

人の家の前に転がっていて濡れ鼠の男の人がいました。
下を向いていて、なんだか拾わないといけないと直感した。

「家で雨宿りしないか。」

言つとこちらをジッと見上げた。

すんごい睨まれるけど無視。

持っていた傘をコイツに渡そうとする。

すんなりと持つてくれ、家に向かう。

玄関の鍵を開けるとすぐにタオルとかを取りに行く。

「拭くぞー。」

すたとんと座つて、すんなりと無言で受け入れる。

可愛く見えてきた。

こいつは野郎だぞ？。

なんだ、この愛らしさは。

チンの音がしたので取りに行く。

「ほら、ホットココアだぞ。甘いのが大丈夫か？。」

こくりと頷いて、飲む。

何回かに分けて飲む姿に萌えを感じそうだ。

飲み終わったらしく、ジッとこちらを見上げる。

ワンコだ。

茶色のワンコだ。

えっと、次に風呂だな！？。

その後にホクホクぬくぬくの自家製のカレーを食して頂こう。
それと、寢床だな！。

「風呂が沸いているから入って置けよ。」

キュウと首を傾げる。

こいつは美形、イケメンだから可愛く見えるんだ。
そくに違いない！。

そうだ。場所を教えなければ！！。

「あーこつちだ。」

教えるために風呂場までに案内する。

てくてく後ろについて来て、鴨の行進を思わせる。
まじで、可愛いぞ？。

「ここだぞ。着替えは後で持ってくるから。」

「いいのか、こんなにしてくれて。」

確かに。

それだけでなく、剣を持った不審者だし。

いつもの俺なら絶対に警察に電話しているな。
でも、今はホクホクです。

「いいの。あんなとこに不審者が居たら困るからさ。」

ふーんと言いながらこちらを見る。

さて、俺は服を持っていかないとな。

何が良いかなあ。

体格とか良いから、着物でも良いような気がする。
ははっはは！！、良い素材だよ！。

簡単にワイシャツにGパンでいいや。

良いのあったかなあ！。

これを、持つて行くぞ！。

よし、コレでよし。

次は、カレーだ！！。

昨日は、カレーパーティーだったからなあ。

真面目に、リア充は死ね。

あの伊達眼は消えやがれよ。

ハーレムなんか屑よな！？。

火を強火にして、器やご飯を持つて来る。

「よし、後はカレー待ちだ。」

良いにおいがしてくる。

カレールーなんて邪道ですと言うのが解らなくはない。

だが、カレールーとは日本の文化なのだ！。

どろっとしたあのカレーは日本改良されているのだ！。

あのカレー魔人はそこまで解らんのか！！。

これでよし。

ちようど良いとこに来た！。

「座った座った。」

言つと適当に座る。

さすがに正座じゃないか。

外国の人っぽいもんね。

翡翠色の眼か、綺麗なもんだ。

「頂きます。」

お、日本文化を知っているのか！。

良いところがあるじゃないか。

テレビを付けると殺人事件の特集があつた。

人が切られたという簡単な事件。

刀のような物で切られたらしい的な？。

食べていたスプーンを止めて

「それ、俺の事だわ。」

「ふーんそう。」

どうでもいいや。

こいつが人殺しでも関係ないしね？。

うん、1日漬けのカレーは美味しいよ。

「それだけ？。」

当たり前だ。

と言いたいけど、怖いとは思いますが。

「あんたは俺を殺すのか？。それなら、話は別だけど。」

本音はこっちだ。

誰でもそうでしょうか。

間違っただけじゃない。

間違っただけだ。

「早く食べて寝ろよ。」

いい一日だなと、俺は思った。

部屋は客室用を代用する。

コイツ用の部屋にしまおう。

そうしよう。

食べ終わったらしく、俺は案内した。

「俺はルカ、ルカ・シンクコードって言うんだ。」

「えみや　しろうだ。宜しく。」

案内した部屋に入って行った。

そうだ。彼はルカは野良猫に似ている。

野良なのに餌とか貰っているような感じのワンコだ。

…じゃあ、ルカの飼い主はどうなってんだよ。

早く、迎いにきてやれよな。

次の日にはルカは居なくなっていた。

しょうがない。

でも、手紙があった。

【しろうつて、おかしいね？。まあ、ありがとう。

またのひまがあつたらとまりにいくよ。

けんはちゃんとかくしていくからね。b y るか】

「丁重な奴だな。」

さて、ご飯の用意だ。

虎に感づかれる前に後始末と！。

ワンコって癒されるわ（後書き）

勝手にカレー魔人の話がちよろっと。

カレー魔人は外国でカレーを知ったのだから

日の浅いうちは受け入れないと思う。

伊達眼はだれですかねー？。

可愛いです。

銅根悠太のプロフィール。的なやつ。(前書き)

作者のために設置。

銅根悠太のプロフィール。的なやつ。

銅根 あかね 悠太 ゆうた 10歳

混沌・独立

筋力 E 魔力 B - (?)

体力 E 速さ C

耐久 C 幸運 EX (- EX)

魔術 ?

ひたすらの御馬鹿。

夢も枯れ切っていて将来の不安を感じるお年頃。

枯れる事なき幸運を味方に魔術を極める魔術使いである。

たまに不幸に見舞われたりもする。

ある意味で最強を誇る10歳児。

その魔術は独創的そのもので、遠距離戦では優位に立てるわけもない。

彼の持ち味はひたすら引き籠もり、使い魔のような人形を操作して戦うスタイル。

彼の使い魔兼メイドさん？たちは記憶触媒を大量に消費している。自身の脳もそれに使用している。

使い魔は喋り、ハリセンなどで叱っていたりもする。

性格も多種多様で戦闘も出来る。

遠坂凜が聞いたら、即倒れるのは言うまでもない。

さらに夢には引き籠もると言う前代未聞の問題がある。

ゆえに独立と言う目的意識。

眼が大きいのは10歳児だからです。

うまく画像が脹れていたら良いのだけどさ。

> i 1 7 1 3 5 — 2 3 2 8 <

追加。補足。

手先器用らしく、人形は自作。

幽霊が見えるらしい。

流々子や鍛冶師のおじいちゃんを雇っている？みたいだ。

本書（作中には書と書きました。）

大量の魔力が宿る。

悠太との繋がりがあり、ラインのオンオフが出来る。

まだまだ秘密があり。

窓の書

カイロ代わりに持っていたりもする。

金属や宝石などを取り出せる。

秘密あり。

流々子

ロマンが詰まった入れ物の人形。

ギミックが凄いらしい。

悠太の事が心配でたまらない。

ハリセンやフライパンで注意しに行く。

ストッパーでもある。

生前の事は、覚えていない。

ノア

軍師役。武器には槍。

実用性のある指揮棒をと悠太が考えた結果である。

なぜ役と付いているかは判明していません。

ピエロ

道化師。サーカスの花形でもある。武器は短剣など。

トリッキーな技や技術を持ち、独特な性格をしている。

ウザイ。

プレスや炸裂ボール、ダーツなど多彩なオールグラウンド系。

天然記念物

悠太のセリフ。

ランサーに向けての発言。

英霊を使い魔にしている事が希少であるための言葉。

セレクト
選択

装備を選ぶための一節呪文。

ピンチスキル

ようは危険になると発動されるスキル。

ゲームさえも魔術の材料にしている。

一撃で殺される場合に発動する。

また、一撃必殺持ちでも発動されたりもする。

名軍師の一式

ノアの装備の一式。

軍服と部分鎧やらのセット。

グラデーション・エアでも、

知名度があれば長い時間存在できるんじゃないのと言う頭で現実化した物。

悠太のプロジェクトの成功したのでなんとかグラデーション・エアの問題をクリア。

スキルは千里眼と先手必勝、回避。

軍師らしいスキル。

かわりに紙装甲に近い、回避スキルがあるため。

ピンチスキル、勝利をこの手に。

先読みして一撃は入れるぞと言う前衛と自分の強化。

ピンチスキル2、死ぬなら一撃を。

火事場の馬鹿力。かなりの苦痛と痛みを伴う。

グラゼモア

エレン・エル・エタシエスの武器。

大剣であり、片手でエレンは扱う。

悠太が装備したのは実物のような幻である。

宝具もどきの扱いで開放技が

「生きる道は、この向こう!。」

大剣を振るい回避無用の一撃を炸裂される。

回避しようとしても範囲攻撃なので当たってしまう。

最低でも3メートルは離れないといけない。

だが至近距離で発動されるため、回避無用といえる。

カード

飛翔の概念を宿らせているものやら色々ある。

飛翔なので4枚羽の絵が書かれていたりもする。

カードを手に一節呪文を唱えたと概念引き出し可能である。

制作時に手間隙かけているので、才能がなくても使用が可能。

最低でも、魔術回路と魔術回路に属する力があれば発動可能だ。

銅根悠太のプロフィール。的なやつ。(後書き)

んな感じで、脱記事が多くて困るよ。

事件6、困惑極まる赤と赤銅の外道（前書き）

この人らがメイン。

語りがアーチャーです。

事件6、困惑極まる赤と赤銅の外道。

ごほん、代理のアーチャーだ。

只今に置いて私が代弁者紛いな役をさせて頂く。

なんと言つか、えみやしろつの脳内が汚染されているとの事。
よく解らん。

グロの18禁になりそうならしい。

ちよつと待て、マジで脳内には何が咲き誇っているのだ？。えみや
しろつ。

「えみや君？。アレは何？。」

それはそうだ。

私が解析した結果は水晶製であることは確実だ。

さらに空間を切ってべつの空間に繋げるなんて凧の目指している第
二魔法の関連になる。

私が心配しているのは凧だ。

このえみやしろつは何を考えているのですかの一声だ。

普通じゃない、普通なわけがない。

調べた結果は学校を支配しているに等しい事になっている。
なんでさ。

どうなっているのさ。

いかん、いかん。

ついつい、素に戻ってしまった。

「うつか凧の癖に黙れ。」

…はい？。

うつむ、たしかにうつか凧つと読んでもおかしくはない。

可笑しくないが、魔術刻印が光っている。
ガントを打つ気ですか。
ちょっと止めに入ろうか。

「アーチャーそこに居なさい。」

「しかしだ。こいつのペースに巻き込まれるなよ。」

ここを言わないと流石の凜でも口論には負けるような気がするのだ。
ま、そんな効果は一瞬だ。
実に悲しきかな。

「お疲れ様です。茶菓子もありますよ。」

ライダーにその元マスター、セイバーが寛いでいる。
私が知る風景ではない。

「ん、じゃアチャ男の真名知ってんの？。
俺みたいに未熟じゃないからさぞ高名な御方なのでしょうね。」

うわ、そう言うのはやめてくれ。
怒りで拳が凜が震えているではないか！！。
どうしようか、こいつは。
絶対に私の知る戦争ではない。

「うるさい。」

「んゝ何々？。聞こえないーい。」

うわ…。

うん、逃げよう。

擦り切れた私でも解る真っ赤な赤信号。

「ライダー、茶を今から入れよう。遅くはなさそうだな。」

現実逃避はしたくなるのも普通だな。

触れぬ悪魔も祟りなし。

赤銅の馬鹿にも関わりない方がよさそうだな。

お茶を入れ、持っていくと凜が魔術刻印を光らせていた。

「うつさいわね!!。」

うわーガント炸裂か。

にしても、あの水晶の刀はなんだ。

私にもいまだ理解が出来ない。

もしもその話題から離れるために仕掛けたのならば、別の意味で警戒をしなければいけない。

えみやしろう。貴様は何が目的だ。

「危ないなあ。もう、遠坂さんつたら。」

別の意味でもイラつくな。

この衛宮士郎は。

「避けんな!。」

「嫌々よ!。」

…そんなわけがないか。
うん、在り得ないな!。

さて、えみやしろくに替わりご飯を作ろう。
美味しいご飯をな！。

そんな感じに現実逃避をするみなさん。

みんなにはスルーと言う隠しスキルが追加されました！。

スルー 凜だけがE 他D B 誰なのかは想像しよう。

何事にも日本人は見て見ぬ振りをする。

あまりの衝撃な話にも冷静に進めるためのスキルとも言える。
またの名を、現実逃避。

事件6、困惑極まる赤と赤銅の外道。（後書き）

書きたかった。

重要なお話でもあります。

しろっ視点だとネタバレしますのでアーチャーになりました。

魔術少年の生活振り（前書き）

こんな子供になつたらなんよ！。
寝る間を惜しんだら成長やら遅れるからね！。

魔術少年の生活振り

私の名前は流々子と言います。

リユリユコでは無く、ルルコですと主張させて頂きます。

悠太曰く発音が好きらしいです。

はい、よくは解りません。

最近では魔術師と言うのは引き籠もりと言うのはつつすらと知識にあります。

ですが、魔術師と言うのは根源に至るための研究者と言うのが悠太の主張です。

研究者と言うのは皮肉のつもりでしょうね。

かなりのトラウマがあるみたいです。

悠太と出会ったのは3年前でした。

悠太の両親はキメラやら人体実験やらしている馬鹿でした。

ま、今は死んで清々しています。

私の朝はご飯を作る事から始まります。

美味しいご飯を作り、栄養満点の野菜をおかずにつけていきます。

さらに眼にも美味しくきれいな色味のもの使います。

綺麗に器に盛り、おしおき用のハリセンとフライパンを持って悠太の部屋に向かいます。

最近は大飯喰らいダメットさんがいますが色々と問題があります。

ルーンの勉強中らしいですが、いい加減にしろ。

話し声が聞こえんぞ。

デймさん。お前は止める気が無いのか？。

そうですね、あつと言う間に時間は過ぎるのね。

そうですね。

「ここで火の概念だと、他のプログラムが…。」

「ですが、ルーンで簡略化したのですからその位は。」

紙に書く音やらが、聞こえますね。

アイデア、実現前の下準備なのですね。

さてと、殺気を抑えるのって息が詰まりますわ。

「お前等、寝たかー！ー！！。」

魂の叫びと共にドアを蹴り破る。

一気に泣きそうな顔になる二人。

「ひっ、寝てません。」

ああ、もう！。

やはりですか。

「朝でしたか。」

そうですか。

お前等、堕ちろ。

どうしようもない馬鹿。

引き籠もり共が少しはこっちの苦勞を知れ！！。

「さっさとご飯を食べて仮眠して1時間。

そして基礎練習やらなんやらしてきっちり昼ごはん。

その後にはお風呂に打ち込みます。上がった後はディムさんとの特訓を受けて晩御飯です。

後は子供らしく寝ろ。寝てください。」

ご飯を出してガブガブ食べていく。

「よく噛んでください。」

こくこく。と頷く。

食べないのですか。ダメツトのくせに。

「固形食の方が健康的では?。」

はあ。

ふざけんなよ。

「そんなもの、嗜好品です。きちんと食べた上で摂取するのが一番に好ましいです。」

それしか食べていると栄養が足りなくて倒れますよ?。」

事実、悠太もそれで倒れました。

言っと食べだしました。

：魔術師って食べる事さえ面倒臭く感じるのですか?。

どうしようもない生き物ですね。

それでも、

3年前は悠太は点滴とかゼリー系のドリンクとかああ言うのを好んでいました。

過保護になるのも仕方ないと思いますが。

モンスターペアレントにはなりたくもないです。

ああ、魔術師と言うのは理解が出来ません。

できる事なら、悠太の友達にまともな人が居て欲しいものです。勿論生きている方がいいです。

魔術少年の生活振り（後書き）

こんな感じなのが悠太です。
10歳なのに枯れている。

事件7、会議勃発しました。（前書き）

悠太陣営とえみや連合がバトルと言うフラグが。
大丈夫。

悠太には見せ場がありますからね。

事件7、会議勃発しました。

ところ替わり、俺えみやしろうです。

只今のところに置いて、アーチャーが泣いています。

セイバーがまずいの一刀両断したのだからしかたないな。

前待つて用意したハンバーガーもどきを食べている。

スライスチーズを挟みました。

モチュ、モチュと言う音が響く響く。

いやー、セイバーって可愛いね。

「なぜだ。なぜなんだ。」

もうOTLの状態になっています。

うわー、あんな大人にはなりたくないな。

「敗走、ここに在り?。」

あれ、アーチャーに何か刺さった?。

ドサクサに塗れ、ライダーや慎二も食べている。

「おいしいですね。」

「だな。僕もそういうサーヴァントだったらよかった気もするけどさ。」

なんだか、のんびりしている。

晩御飯の風景にしては他の魔術師がドン引きしそうだ。

聖杯と言う優勝商品を巡る戦いなのに穏やかだ。

こんな日もいいな。

食べ終わり、片付けて居間に行くと会議を始めていた。

「まず、判明している英霊はディルムッド・オディナでいいかしら。」

遠坂が聞くとセイバーは頷く。

てか、ディルムッド・オディナってだれ？。

「はい、たしか前々回の聖杯戦争に会いました。」

へえ、ん、前々回？。

たしか、黒、赤…『死』。

痛い、痛い、痛い、なんでだ。

なんで忘れる、今は頭の片隅にまで押しやれ。

大丈夫、大丈夫。

「ランサーのクラスでしたが、その前に埋まっていますね。」

「よね。」

たしか、あの蒼い変態タイツか。

速いよな！。

オーバーバイクを追えるくらいだからな。

でも、俺のバイクの方が速かったような気がします。

「すみませんが、その前に柳洞寺の魔女を早く片付けた方がいいですよ。」

魔女？。

たしか、レギュラークラスのキャスターだっけ。
ん、なんで最弱なのに速めに片付けるんだ？。

「なんでさ。」

「魔力が貯めるとんでもないの。ガス事件があつたでしょう？。」

あつたな。

たしか、死者が0って言う奇妙奇天烈な事件だなあと思っていたけど。

「魔力の消費が多いの、キャスターだけにね。厄介極まりない参謀役なのよ。」

なる。

天変地異が出来るまでに魔力が溜まるのは困る。

家が吹き飛ぶぞー！！。

いや、ジャンルが違うか。

「だが、ローアイアスを破ったデイルムツド・オディナのマスターも厄介だ。」

「なのよね。まずは柳洞寺に居るキャスターを倒しましょ。」

うーん、何か重要な何かを忘れているような気がする。

アーチャーが言っていた事が気になるので聞きますかね。

「てか、デイルムツド・オディナのマスターって背が高いよな。」

うん、俺よりも背が高い。

なんだか美形だったし、その辺はずるいと思う。

もう少しはかつこよくなりたいと思うのは万人誰でもある。

「子供の協力者もいるみたいだな。」

「どうして、そこまで教えないのよ。」

フンとアーチャーが笑い、遠坂は睨む。
いいコンビだ。

カップリングもいいな。

なんだろう、どうして主従カップルと言う在り来たりがおいしそうなんだ。

くっ、ネタ的においしいぞ。おいしい。

「しろつ。拳を握っている。」

いけない。

つつい、素が出そうになる。

怖いな。

「いや、子供も戦争に参加しているだなんて思ってさ。洗脳教育で
もしてるんかね。」

「さあ、そこまでは解りませんね。」

にしても、ところどころセイバーが柔らかない表情になってきていて
安心した。

さて、寝ようか。

「そんじゃ、寝るわ。」

明日になったらヤバイ事になりますね！。

運命修正率7%になりました。

S o w h a t ?

になりそうです。

遠坂に修理費を要求しました。
家を壊すなです！。

事件7、会議勃発しました。（後書き）

どうしようかな？。

次回はついにタイガーが活躍する。
近々ね。

事件8、予想通りと思ってもうまく行かんの。(前書き)

さてと、イベント開始!!。

イリヤに魔女と女剣士のイベントが始まるよ。

事件8、予想通りと思ってもうまく行かんの。

いつもの朝の特訓をする。

死ぬぞと言われたこの特訓は未だに続けている。

魔力と言うのはようは魔術回路の多さに比例するらしい。

言えば、生まれ持った才能を指す。

だが、俺のしているこれには上記以外の魔力の増やし方だ。穴をより深く掘り進むと同じ行為。

少しでも多く質もよくするように頑張るだけだ。

才能が無いからな、努力は最高にしとくべき。

一応は2本は開通してありますが、其処は無視だ。サブは全開通済みだ。

「投影、開始。」

理解しろ。

よく読み切れ。

年代を材質をもっとより深く。

持ち合わせの神秘を読む。

「完成、かな?。」

妖刀虎竹刀。

なぜか、投影が出来る藤姉の物。

しかもこれは真剣だ。

言うなら、竹刀らしき物が鞘だ。

毎回は2本持っているだよな。

竹刀と刀の2本。

最近は何騒と言いつつも藤姉も何騒だよ。

さて、作りにかかろう。
おいしいご飯にハンバーグを！。

朝のえみやのお家は今日も賑やかです。

遠坂が家の天井が潰れてえみや君の家に一時住む事にします的な事をほざいた。

いやー昨日、人の家を壊した人とは思えませんね。

「いや、オニヤの方が猫だわ。ギャン！？。」

もう、外野五月蠅い。

黙れ。

「猫さんは黙ってくださいね？。」

ナイス、桜。

時折影がニヨニヨニヨって動くのやめてほしいが我慢。
なんか、可愛いもん。

うん、考えるとこの家って神秘の秘蔵なんてしてないな。
オープン的な？。

「じゃ、学校に行ってきたーす！！。」

タイガーは今日も元気いいね。

「あ、桜。昨日電話で頼んだ荷物、持ってきたか？。」

そつえば、桜は大量に持ってきたよな。

桜が泊まるみたいだな大荷物だ。

さりげなく慎二も泊まる的なことを言っていたような
気のせいじゃないんだ。

ネコアルクも慎二も全然影が薄かった。
さすがだね。

「はい、兄さん。どうするんですか。」

「桜も今日から御泊まりな。」

遠坂が睨む。

ん？、話せないって桜の関連か？。
まあ鶴の一言だな。

「じゃ、決定で。前に使った部屋を使えよ。」

オロオロする、桜。

可愛いな。

あいつに一報でも入れるか。

喜ぶぞ、こういうネタが好きだからな。

「えみや君、間桐君。どういづつもりですか？。」

遠坂の癖に生意気だ。

「え？、いやらしい意味じゃないぞ。遠坂もそう思うのか？。」

「違うわよ。」

思い通りの反応。

色々悟れよ、うつか凜。

「いいだつてさ。」

「有難うございます。」

有無言わぬ連係プレイ。

引き際をわきまえているな。

俺に逆らおうとも思うのか？愚か者が！。

「大変大変！？みんな、居る！居るのね！！。」

さすがタイガー、空気を読むね。

なんちゅう慌て様。

頭に枯れ草が乗っているぞ。

「みんながみんな、倒れていたの！？。」

ガシャンと外から音が、自転車でも盗んだのか？。

あー、ありえるな。

「警察にも電話したし、今日から3週間は学校閉鎖だからね。」

いい仕事です。ライダーさん。

手早く冷蔵庫に行って昨日の晩の残りを持って帰っていく。
藤姉、そこまでどうすんの。

ちゃんと食器を返してくれるからいいけどさ。

「ああ、もう、獅子ちゃんの世話にいの！。頂くわ。」

といつてすぐに、玄関に消えていった。
自転車は…ないな。
でも、

「慎二、獅子つてなんだ。」

「さあ。危険生物だろ?。」

余った時間は食料を買いに外に出る。

「しろつ、私も着いて行きましょうか?。」

せつかくのセイバーの頼みを断り一人で行く。
一通り買つて公園と通ると、不吉の白を見た。
イリヤさんだ。

「隠し子さん!!。」

「違う!?、わたしの事、何も知らないの!!。」

知らん!と主張の横振り。

「痛っ!。」

ああ、首がゴキつて言つたよ。
ゴキつてさ。

痛い。マジで痛い。

「えっと、大丈夫?。」

「へーきだよ。」

ジーと睨まれる俺。
悪い事なんてしてないよ。

「切嗣の事知らないの?。」

じいさんの事か。
はっちゃけの方じゃないな。
いや、知ってたらそれは引くけどさ。

「知っているけど、どうかしたのか?。」

答えたら、真剣な顔で悩みだす。

…、わからん。
じいさん一体どうなってんだ。
説明しろやゴラ。

「あ、じいさんはよく外国に行っていたぞ。」

そうだ。よくいつていた。

なんか、傷だらけだったんだよな。
毎回毎回。

「お土産にはゾーリングゲンのやつを沢山買って来たんだよな。あれ
はいいぞ。」

「わたしも…愛用してるよ。」

ん?何気にやや考えていたのですか?。

よく解らん。

今も生きていたら、色んな手を使って聞き出すぞオイ。

「そう、そうなのね。お兄ちゃん。ちょっと、こっちに来て。」

近くに行く。

三家のAさんだからルールは守るだろうと樂觀視。
しちやいけないけどさ。

年下の言う事は聞かんといけないんだ!。

「わたしのお城の行き方を教えてあげる。」

森が広がってビューーという勢いで駆けていくみたいだ。
城は大きいぞ。
うわー本物だ。

「って、説明だけかよ。」

気が付いたときにはイリヤスが居なかった。
帰るか。

うん、帰ろう。

「なわけだ。」

「なわけだって納得するかー!!!。」

この場に居るみんな、桜を含むので相手が電波な人にして
魔術らしきところは携帯のムービーという感じに説明。
悪い事したかな？
いや、してないな。

「危ない子ですね。」

その言葉に同意するのは慎二だけだった。
ほら、俺たちつて一度は会っていますからね。
其処は忘れないでよ。

「だよな。以外に最近の連続失踪者の犯人とか？。」

慎二よ。

お前、頭悪い。

仕方ないか、会った事らないもんな。
さて、ご飯を作ろうかな？。

P i p p i

…藤姉、なんですか？。

題名　ちよつくら注意しに行くね！

葛木先生の嫁さんにお話、お願いしに行くね！。
倒れたらめんど

「藤姉~~~~~!!、色々ふざけんな!!」

下処理を済ませ、後の事を桜に任せよう!。
あの女、絞める!。

「桜、後は頼むわ!。トリス行くぞ!。」

「うむ。了解だ。」

そんな感じにお寺に向かうのです。
勘弁しろ!。

ちゃんと準備して行った事をココに記す。

事件8、予想通りと思ってもうまく行かんの。(後書き)

どうなるの？藤姉さんは。

大丈夫だ。うん。

解決エミ―道場！！（前書き）

ココにて参戦！。

師匠とロリブルマはお休みだ。

解決エミ―道場！！

「はいはい！！お馴染みのタイガー道場だぞ！」

「なんつーか、色々だるいな。」

今回は赤銅えみや様と新緑悠太さんです。

「馬鹿な御二人はお帰り申したぞ。」

訳は脅したと言う事ですわ。

「Yes。」

「うーん、ひくわ。」

そんな感じに参加しているこいつらですわ。
バイクに乗るな！。
怖いからさ！！。

「ちえ」

命の危険を感じるわ。

とは言ってもテレビに写っているだけなんすけど。

「では、ゆるつと行こうぜ！！」

あいさ、

では、忘れていた解説を行う！！

ローアイアスを破ったちびっ子の魔術？の解説です。

あれは投擲系に無敵の防御力を誇るとされていますが、
ランクの1は下がって出てくるんだから敗れるのだと思います色々
こんな事になりました。

かなと思っのですが。

悠太自身、奇異極まる魔術の担い手。

故に破られました。

「説明になってないぞ。」

的確に指摘するな！！。

かなり伏せているんだよ！。

それでなくても、気が付いている人が居るのかなと気にしているんだよ。

「へー。」

何汗かいてんの？。

新緑さん。

「何にもないです！。」

それと、後、水晶刀は解りますよね。

「え、どういう事ですか？。」

頑張れ！。

解決エミ―道場!!（後書き）

うな感じですね。

事件9、虎と獅子と柳洞寺（前書き）

このお話は彼女の話にもある。
真面目のようでカオスです。

事件9、虎と獅子と柳洞寺

私は藤村大河。

職業は学校の先生。

副職には… ないです。

そんな私、藤村大河とはある加護を持っています。

「うん、しろうにはメールしたし行こうか。獅子王ちゃん。」

保険は沢山あればいい。

願わくはこの戦いにも終止符を打たなくてはいけない。
ぶつちやけ私の存在価値をばれたらヤバイから、が理由なんっすけどね。

「了解がお。」

水筒はかけた。

虎竹刀二種、良し。

「いざ参らんってね。」

私の最善を選びます!!。

柳洞寺の階段を一気に駆けます。

うつ、なんつうか

「はあはあ、ツラーーーー!!。」

「なんだ、面妖な客人たちよ。」

うわーロンゲさんだ。

ウザイよ。

帰れ還れチリとか分子にさ!？。

「なんというか、そんな顔するな。」

どんな顔ですか。

先生解んない？。

「がお。」

なによ、獅子王ちゃんまで呆れた顔して？。
お口があるなら喋りなさい!!。

「ちょっと、葛木先生に用があるので通してくれます?。」

あくまで、私の用があるのは葛木夫妻?だ。
だから通してくれないと困る。

「無理だな。そんな妙なやる気を出されてはこちらも困る」と言っ事
よ。」

つち、駄目か。

ああ、やっぱりこうなんのね。

「プランB始動します。」

「がおがおーん。今もって通る!!。」

獅子王ちゃんがロンゲの侍さんに斬りかかる。

応戦する侍さん。

そこを悠々と駆けて行く私。

「夜分、ごめん!!。」

虎竹刀をやる気や元気で出口を作る。

ガラスの割れる音と壁が崩れる音がした。

いやー便利だわさ。

「なにが夜分ごめんよ。」

外国妻のキャスターさんが来る。

今の私には関係のないお話。

「藤村先生、少々お時間があるようだな。」

…、うん色々やばす。

まっそんなときでも笑うのが私クオリティ。

妖刀虎竹刀に持ち換え、2人に向ける。

どちらにしろ、ヤバイをピンチに変えるしかない。

「うん、私もお願いに回りました。」

始めよう、私の最善の意味を。

ここに幸せを、ここに可能性を見出し紡いで高らかに日常だと謳歌するために。

「いざ、尋常にお願いを聞きやがれ!!。」

虎聖杯よ。我らに勝利を下さい!。

藤村大河 25歳

混沌 善

筋力 B (B + + +) 魔力 - (?)

体力 B (B + + +) 速さ C

耐久 C 幸運 A

魔術 -

言うまでも無く、えみや様の話や性格を変えた当本人でもある。
持ち前の幸運があると作者は思い、
葛木といい勝負というより学園のとても人物、強い人であるので
メインに出したかった。
さらに現在あるはずのない虎聖杯を物にしており、
セイバーライオン作中に獅子王と書いております。
はちゃっけサーヴァントである。
なお、虎聖杯を所持しているため魔力が(?)になっている。
さらになにやらと知っている模様。
セイバー対決をしなかったのはそれを意味する。

スキル

何とかなるでしょうが！！ A

根性で道を開くもの。

火事場の馬鹿力を発揮してしまう。

藤村大河を象徴しそужゃないかと主張する。

虎聖杯の加護 A

虎属性の藤村大河を主張している加護でもある。

なんでも自分の都合のいい方へとひっぱることができるが可能。

宝具

虎聖杯

レンジ：自分

願いを叶える願望器。

何を願ったのは秘密だ。
ネタバレだしさ。

事件9、虎と獅子と柳洞寺（後書き）

すべてはえみやしろうのために藤村大河を出す事に。
感想を待つ!!。

書いて欲しいと作者は願っています。

事件10、バイクとライオンとお姉さん（前書き）

ゆるっと頑張るの！。

タイガーパワー！？。

事件10、バイクとライオンとお姉さん

打ち合う。

拳と刀がぶつかり合う。

「なんなのよ。魔術を切るなんて、どっいつ神経よ!!。」

切る。

刀とは切る事に特化している。

でもね、私も良くはわかんねーのよ。

妖刀虎竹刀は本当によく『切』れるの。

人は切れなくて『何』を切れる。

「きつと、私の好みに合っているのよ。」

でも、この拮抗は短い。

一度は見ているからまだ、対策は出来た。
出来ただけだ。

ヤバイ。本当にヤバイ。

「藤村先生、どこで『蛇』を見たのですか?。」

いいつつも拳を打ち込む。

どっつて、意味解るか!?!といいますぞ。

「知らないわ。」

今は、そういう答えを言うしかない。
だって『私』は知るわけもない。

それはたしかだ。

「そうか。」

「にしても、このままじゃあお願いも聞かないのね。」

このままだとだ。

ふふ、でも、

「勝利の音は近くに来ているわ。ラストスパーク!!。」

私の努力は実るのだ!!。

「ほう、向こうではもう少しで勝負がつきそうだな。」

「タイガは負けないがお。」

それでもこっちも不利だがお。
困ったのだ。

「ではこちらも終わらせるか?。」

困るがお。

まだ、いけるがお!。

「ならば、行くぞー!!。」

肉を構え、今、宝具を起動する。

獅子はあと少し頑張ればこっちの勝ちだ!!。

「ニクス」

「秘剣」

ホンの一瞬だ。っと思うがお。
音がしたぞ。

「動物の勝ちがお!!。」

タイガは言っていたぞ!。

この音がしたら、勝ちだって!。
あ、発動止めちゃった。

「燕が!?。」

「おおー!!。」

かっこいいがお!?。

「ふん、またつまらぬ何かを轢いてしまった。」

後ろには顔色が悪いうっか凜と
なぜがテンションが高いセイバーに、

小さく俺に対する文句を言いやがったアチャ男。
ここのレバーを引くと石ころが出てきます。
ほれっと。

「つつ。」

「どうかしましたかー。」

頭を押さえずに俺を睨むアチャ男。
大変ですな。

「ま、俺は虎を絞めに行くわ。」

そのまま、ロン毛を置いとくのはどうかと思い両手を縛って引き回す事にした。

美形は全滅しろ。

切実におもに慎二。髪ワカメを中心に。

「…！？。外道だ、が、がお。」

「それもそうだが、凜、早くキャスターを探すぞ。」

「そうね、そうね。」

「だが、キャスターにもあの侍にも同情しそうだな。」

ニタと笑うセイバーさん。

さすが、赤銅の外道のサーヴァント。

コレには全員が確かにと思ったのは言うまでもない。

ついでに虎も危ないめにはあいそうなのですが、どうでしょうか。

「終わりよ、何か言う事はないかしら。」

「そうねー。バイクに轢かれる。」

やった。

言えましたよ!!。

「ここにて参戦。2人で1人を虐めんな!!。」

可愛い男の子です。

なんで、こんな子が戦争に参加してんの。

こんなの知らないわよ。

いや、マジで。

「えっ、子供でも手加減なんてしないわよ!?!。」

かなりの動揺しています。

あっ、

「ごめん、虎ごと先生と不審者とお子ちゃ魔を轢いちゃった。」

あは が似合うこのお声。

外道な性格になってしまったなあ。

さすが、えみやしろっ様!!。

「私が先に轢かれたぞ。」

ガンバ。

先生はその言葉に尽きるわ。

「なんか、面倒だな。満月だし。家まで連行だ!!。」

ちよつ、あ、待って!!。

あー連れ去り事件発生したよー。

警察、警察様、SOS、ヘルプ、ヘルプ、ミィ。

「…堂々と憲法違反してるよ。この人。」

これが、常なのよ。
少年。

で、こちら外野側では
かなりあたふたしていたのは言うまでもない。

「ど、どうします!!。」

動揺をしてしまう、赤い麗人。

「どうしようもないですね。」

ざつくりと切り落とすメイドさん。
呆れの声が響く。

「様子を見るしかないですか。」

溜息は響くばかりだ。

事件10、バイクとライオンとお姉さん（後書き）

悠太君が捕まりました。

後もう少してAUOが出てきます。

事件11、虎は、尋問す。（前書き）

始まります。

でも、大河はやりすぎたかな？。

いや、フリーダムに生きるのだよ。うん。

事件11、虎は、尋問す。

王様の椅子は高そうな1人用のソファーに座っているのが俺のやり方だ。

大丈夫。

座布団もそこそいいのだからね？。

「では、取調べを行います。異議は聞き入れません。」

ああゝ楽しいなあ。

にこにこと笑っているみたいだな。
楽しいな、本当に楽しいな。

「まずは…」

誰にしようかなあ？。

蒼い魔女さん、先生、虎、少年、着グルミ。
悩むなあゝ？。

どうしようかな。

「先生、なぜに戦争に参加したのですか？。」

はい、まずは葛木先生です。

気になるんだよな。

まあ、虎が謎な水筒をかけていますが、
なぜに。

「キャスターが参加しているからだ。」

…どうなっている？。
まあ、聞けばいいか。

「そうですか。キャスターさんは聖杯が欲しいのですか？。」

聞くとギラッと睨みを聞かす。

コワイ。

でも、どこぞの混じりものの兄貴の方が怖いんです。
馬鹿ですか？。

「いらないわ。私は宗一郎様と一緒に暮らせたらいいわ。」

諦めているよ。

いいでしょう。

闇の中にも光あり。

色々聞いてから、魔力補給源を提供しよう。

ソレまで、絶望の中に居てもらいましょるか。

喜びようが楽しみだな。

「虎、何か訳、理由あんの？。」

「ちよつ、私だけ乱雑なの。」

文句があるんだ。

へえー感心した。

しばらく黙ろつか。

沈黙の効果っていいよね。

「御免なさい。私が悪うございました。」

宜しい。

さあ、尋問を再開しよう。

「なんで、戦争に参加している。」

まずは、ありえない。

藤村大河はかなりの実力者とはいえ、魔力がない。魔術を使えるわけがない。

現にあの着グルミを従えている。

「したい事があったからが理由かしら。」

言うとは遠坂の方をみた。

睨んでいると同じだ。

いや、睨んでいる相手は遠坂じゃないみたいだ。

「遠坂さん、あなたのサーヴァントを出して頂戴。」

あれ、何この展開。

藤姉が怖いな。

遠坂も若干顔色が悪い。

少年も勿論ながらもネコアルク、ワカメ、皆が顔色が悪い。アーチャー、お前は何をした。

「この場でちよつとお願いではなく話し合いをしたいのよね?。」

ゆらゆらと妖刀虎竹刀を構える。

笑顔が無く、眼が怒りの色に染まっている。

ランサーよりも怖いしヤバイ。

「藤村先生、ドウゾ。」

現界した様子が焦っている。
慌てている。

「凜、私を売るのか!?。」

あ、そっぽ向いた。

まあ、自業自得か?。

虎のせいとは言えねえ。

「今、言うわ。」

しろつ君に八つ当たりしても無駄よ。まったくの無駄。」

はい?。

どう言う事だよ?。

理解の範囲を超えているよ。

「言うけど、あなたと言う存在はきちんと登録されているしね。
ifの存在をブン叩いても無駄。座の縁を切らないと。」

????????????????。

何の次元ですか。

「後は、耐・え・ろ。置いて行つた罪に溺れやがれ!!。」

情けない事にアーチャーは悲鳴を上げる。

といつても、ヒツと短いのですがね。

竹刀を構え、袋叩き。

急所に躊躇い無く打つ、突く。

時たまアーチャーが応戦するものの武器が粘土を糸で切るように斬られる、壊れる。

コレには、ドン引きしました。

「我が家はついに人外魔境の地位についた。」

「えみや先輩、帰つて来て下さい!?!。」

さらに急所を叩く振りをして急所の手前を叩く、殴る。
怖いなあ。

「平和だニヤ。」

可哀相な事にそんな状況についていけない人が二人。

「どうなっているの。」

少年こと悠太君。

彼はマトモ人だ。

ある一面置いてはマトモ人だ。

「待つしかないわね。」

うつか凜です。

まあ、アーチャーが高町式話し合いに合っているのですから。
実は作者は魔砲少女が好きです。
機械、SF系が大好きです。

事件11、虎は、尋問す。（後書き）

さて、フリーダムにやってみた。

最近はなのはのにじファン小説を見ました。

お願い、頼み事がお話に被って見えた。

…どうしよ。

事件12、なんだかワカメが大変だ。(前書き)

事態急変。

えみや様の伝説は過去から始まっていたのである!!
ほんとよ。

事件12、なんだかワカメが大変だ。

外野は無視しよう。

俺の心が安泰しないし。

ここは無視が一番だ。

「次は…、少年。」

どうやら、少年も虎と不審者2のやり取りを見ていた。

駄目だコレ。

はい、次っていないよ。

あっ居た。

「タイガーは何を思っで行動してるか知っているか?。」

「うう?、ご主人様は面白おかしくこの先を開拓するっと言っていたがお?。」

はい、意味解んない!!。

理解不能!?。

面白おかしくですって!?。

次元が違っし、マジ解らないし。

「すみません、これはどう言う事になっているのです?。」

あ、やばい。

これは、うん。

「意味解らない集団だ。アレだアレ。えーっと、コスプレイヤーっ

て奴。」

「…はい、解りました。」

桜も、あの魑魅魍魎の館の地下にも行ったこともあるし、安全大丈夫。

多分だけど。

そんなモンと思うでしょう。

あそこは真面目に常識が崩れるからな。

特に死の恐怖とか、メカメイドとか、トランク一つで片手に大砲を撃つ可笑しな人等。

常識？、美味しいの！？的な。

「どこぞの機密館のようなモノですね。」

うん。そう思っで。

思えば我が家もその魑魅魍魎の家になりつつあるんだな。

ああ、嫌だな！！。

「それと、ワカメがイカ臭い、がお。」

「なぜに。どうして。」

ワカメを見ると何かが変に感じた。

ウジウジ、ジメジメ。

ワカメらしくもないジメジメ感。

おかしい、変だ。

オカシイオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイ。
変変変変変変変変変。

「誰だよあんた。桜、俺の部屋に行ってくれ。不審者が侵入してきた。」

「はい!。」

たたったと去っていく桜。

俺の部屋は安全な所だ。

言うと、多重に結界を重ね掛けをしている。

魔術を切る妖刀虎竹刀では無いと無理。

あれ、だとするとアーチャーの剣って魔術の関連?。

いや、藤姉が凄いだだけだ。

気にするな。

「かかったか、忘れたとは言わせんぞ。ワシの家を殺虫剤塗れにした事をな!!。」

あの事と理解して、左手に拳をぽんと叩く。

「ああ、あれか。虫だらけだから、つつい。」

真面目に虫だらけだったからな。

高一のとき辺りに、どこぞの高名な殺虫社の殺虫剤を買って

慎二の家に行くと言う口実で持っていたただよな。

一回目で虫だらけで、二回目で殺虫剤塗れにして、三回目に掃除しに行ったんだ。

そこから、定期的に殺虫剤を撒いているんだ。

素敵な事に毎回違う会社のお薬を購入しているわけで。

「つつい、だと...!?。」

いつの間にか静かになり、ワカメ？は囲まれた。
みなさん、睨んでいます。
俺とか、俺とか、なぜさ、なんでさ。

「えみや君・・・って大物なのね。」

引き攣った笑顔。

他蒼い魔女さんも苦笑い。

「と言うより、こんな大勢で勝てんの？。」

少年が言う。

確かにそうだな。

「かか、無理じゃな。しかし、ワシは死なん！！。」

言つと窓を割って外に出て行つた。
って

「弁償しろーーーー！！。」

「「「「そこか！！。」」」」

黒い虫の上に乗っているワカメ。
どうなるの？。

俺の八つ当たり相手を返せよ！！。

運命修正率30%になりました。

So what?に移行します。

繰り返します、So what?ルートに移行します。

赤銅の外道による無双劇に移行します。

事件12、なんだかワカメが大変だ。
(後書き)

殺虫剤、殺虫愛な話でした。

どうなるワカメ！。

えみや様は無双劇なお話になりました。
もともとか。

マジ狩る。第2話のお前等、遅れ。(前書き)

お久しぶりです。

マジ狩るの開始です。

マジ狩る。第2話のお前等、還れ。

大騒動の予想のえみや様。

彼は広場を回っていたりも、していた。

「虎柄かー。アレのせいかな？。誰だっけ、まあいいや。」

アレとは言うまで無くタイガーです。

えみや様の所のタイガーは強さが段違いなのは言うまでも在りません。

「おや？、ちょっと、其処のあなた。バイクなんて憲法違反ですよ。」

親切な人に感心したえみや様。

しかし、顔が姿がオカシイのです。

真アサシンですよ。

怪しいではないですか。

思わずじつと見つめるえみや様。

失礼ですよ。

「えつと、なんです。」

「変。変だ。素晴らしい位に変だ。」

本当に、失礼ですね！！。

なんだか泣いています。

それはそうですね。

うん。

「あんだね、変って言葉は言わないのが普通でしょう!!。変な人に変って言うのは!?!。」

気にしてんだ。

意外だ。

「大体ですね、あなたって桜殿のお婿さんでしょうが。何をぶちやけているんですか!!。」

「うわ、うわって危険だろうが、憲法違反はお前だ!?!。」

ダークを投げられつつも避けるえみや様。
流石です。

時々双子なメイド姉妹に投げられていますからね?。
しょうがないっす。

「それと、桜って誰ですか!?!。」

言いつつも何処から出したか解らない水晶刀で応戦する。
叩き落とすだけだが、暗殺者に応戦しているのだ。
凄いなのだが、ああ噂すれば影です。

「先輩、誰って覚えても無いのですか?。」

黒桜が光臨しかけている。
怖いよ!。

黒い影がニョロロ〜としています!!。

「あれ、ヤバス。あれだ、宇宙人、未来人、超能力者、居るなら来

い的な力オスだ!!。」

つつこみ!?をしました。

危機的状况ですからね。

考えてもこんな状況について考え付くわけも無く。

「ああ!!、これじゃああああ!!。」

剣を投影して出すえみや様。

バイクにまたがる剣士もどきがココに完成した!!。

真アサシンに殴る、それで逃げた。

「なんでさーーーーー!!どうしてさーーーーー!!。」

爆走する。

逃げる。

「夢だ、フリーダムなんだ!!、これが俺の理想なのか?、嘘だ。嘘だ!?!。」

悪夢と思うしかないえみや様。

恨みが溜まる溜まる。

「全部、あのヘンテコ杖のせいだ。

死刑私刑、撲殺圧死刺殺なんでも、してやるわ!。」

ああ、頑張れ えみやしろう。

逃げた方がよくないかルビーちゃん。

迷惑が襲って来たぞ、衛宮士郎。

「どうしたのさ、藤姉。」

どどんと登場のタイガー。

この小説では重要人物に上り詰めたお人とは別ですが。

「…、うん、なんか違うわ。」

ほっと一息の先生。

お隣には言峰綺礼がいました。

楽しそうな笑顔でござんますね。

「そうだな、バイクも無いようだ。」

確認すると詰まらんと言う顔になる。

衛宮士郎君は迷惑そうだ。

「なんで言峰まで、何事だよ。」

いたってマトモに衛宮士郎らしく礼儀正しい。

その様子には二人は

「「違う」な」

と納得。

「??。まあ、お茶でもどうぞ?。」

そんな様子に戸惑いながらもお茶を出そうとする。
玄関がすんごい音がした。

「先輩！！、違いますね。」

桜登場。

あれから急いだらしく肩で息をしていると言っ。

「桜もどうかしたのか？。」

色々突っ込め！。

何で急いでいたとかさ！！。

「何もありませんよ、先輩。」

ニツコリと返す。

黒かったのは夢みたいだ。

「そうか。」

なぜか、身の危険を感じ出した衛宮士郎でした。

マジ狩る。第2話のお前等、還れ。(後書き)

そんな感じに始まった。ようすだ。

事件13、状況把握をするか。（前書き）

伏線回収編がここから開始。

事件13、状況把握をするか。

「どうなってるの。」

大河がこういうのも仕方が無い。

あのワカメ、殺すぞ。

どうなっているんだ。

窓ガラス代を請求できるのかな。

「その前に、あんた、なんてことしてるの?。」

はて、蒼い魔女に言われても何もでないのかなにか?

「えみや君ワールドに突っ込みは不要よ。余計に疲れるだけだしね。」

遠坂、酷いな。

俺は、普通のもりなのに、俺ののりに乗れない方が悪いぞ。

「しろうはフラグブレイカーだからな。」

「どういう突込みだ。冗談のもりだよな。そうだよな。」

…、アレ、この状況って俺のせいですかね?。

そしてセイバーとアーチャーが普通に会話している時点でも突込みが出てきそうだな。

何を、知ってたんだよ。この二人は何を知ってたんだよ。

「すべては、私のおかげよ！。其処をわかっているのかしらね？」

まずは、状況から把握しよう。

第一、学校にはアチャ男とうっか凜コンビと変態タイツのランサーが戦っていた。

俺は通報して俺も逃亡。

セイバー召喚。

全身変質者がまた来てセイバーが必殺技を喰らって退散。

アチャ男コンビが来てドタバタ。

説明とかしてくれた。

うっか凜の癖にマトモだな！。

いや、その前に桜、間桐についての事だな。

五月蠅い、臭い、虫だらけ。

監視の眼だらけとも言えるところ。

真昼間にカーテンを開けて殺虫剤を撒いた事か。

…、あれ？だとしたら何で俺が生きてんの。

いや、使い魔を殺せたといっても、相手は虫使いなわけで…。

夜だったら、カーテンを開けていなかったら死んでた。

こわ！。

第二というか、うっか凜に騙されて、嵌められて教会に行って神父さんに挨拶。

あいつって怪しいよね。

マジ聖職者さんですか？。

雪ん子にあってバトって奥の手一の魔術使用。

じいさん、ハッスルして作った子供らしいがかなりの矛盾が生じる。だって中学のときは寝込んで居たんだ。外に出ているわけが無い。

大体、ドイツまで日帰りで帰れますか？。空間転移があるなら良いとして、ガチありえない。

推測一、実はじいさんは空間転移が出来て真面目にハッスルに行った説。

推測二、大昔にハッスルして出来た子供。実は中身は20後半。

推測三、昔にハッスルした。年は見た目のまま。

推測四、思いつき。コレには無理があると思う。

顔がマジだったし。

睨まれましたしね、うん。

「いや、無理やりすぎるな。」

どちらにしろ、あの戦闘前の同盟発言のおかげで今がある。

あの夢の翡翠の娘はセイバーだろうと確信してしまう自分がいる。

フリーサイズが一致しているし、骨格も一致。

どうしようもない。

第三は、偽名はあらかじめ決めていたのでなんとか乗り切り、食事でありつけたわけだ。

あの刀は鑑賞部屋に置いてありますがなにか。

学校に行ったら、性的に襲われそうになって、完。

水晶刀の開放を見られてはいない。

第四、家はで連行して、話せないって言われた。
名前を言う価値もなくなったよな。

あの野郎、機嫌取りの紅茶を使いやがっていつかは殺すではなく殴る。

バイオテロの打ち合わせをして、その後にあの子供に襲撃された。
若い？って言われたけど、どいう事だろう。

アチャ男の宝具を開放しても防ぎきれなくて、俺の水晶刀を開放した。

あの後は何とか逸らしたが、問題がある。

使い魔に対すること。

結界とか相方が張ってくれていたからよかったんだけど、居ないし。
俺はそんな簡単な魔術も使えない。

第五、アチャ男の発言に可笑しな点があった。

『だが、ローアイアスを破ったデイルムツド・オディナのマスターも厄介だ。』

あの矢は空から降ってきた。

必然的に空に浮いていた、もしくは空間転移をして降らしたか。

どちらにしろ高位魔術師だと推測。

あの背の高いアレはなんだったんだらう？。

ヒトだとは思えたんだけどな。

子供の協力者といっていた。

ラインとか、令呪で大体は解るんじゃないのか？。

マスターかどうかはさ。

あ、では、真面目に使い魔さんですか、あの美形さん。

じゃあ、もしかして、取り返すために襲撃とか

「あるわけだ。」

ちようど、目の前には不審者二名。

槍兵、ドレスに鎧を被っているお姫様が居るわけだ。

全員、戦闘態勢ですが人質とらないのかな？と思います。

俺は勿論、

「動いちや駄目駄目だ。」

視線が俺に降り注ぐ。

睨んでも、なんにもでないよー。

まっ、とりあえず

「一回は落ち着けや、オイ。」

また、窓ガラスを割りやがって何様だ！？。

「ふむ、それはちよつとな。」

なにこの娘は、イラッと来るぞ。

そのドレスは、センスは良いとは思っけどさ。

ああ、いらいらする。

「だから、言いましたでしょう。派手な登場はよしましようって、ねえ。」

眼鏡をかけている槍兵が真面目顔に言う。

俺を睨んでいるけど、怖いとか思わないんだ。

ドレスはかなり反抗しているけど。
見て、楽しいな。

「だって、こういうのは派手にジャジャン、っているのいいと思うのよ。」

真面目な顔で何言ってるの!!。

あ、こいつらって問題児だ、問題児ですよ。
呆れの空気が漂いだす。

どうなってんだ。

急にデイルッド・オディナと言う名のイケメンさんが出てきた。
今まで霊化していたんだ。

「すいませんが、目的から外れていませんか?。」

止めに来たのか。

なるほど、ドレスがどうしようもない事を言っていたからな。
俺が何かしました。

誘拐しましたが、其処に原因ありだよね。

「楽しいのいいのよ!。それが我が覇道!!。」

無駄にカツコイイ事言ってもますますお馬鹿丸出しです。

しかも、無駄にスタイルいい、とは!!。

桜より下だけどいい体つきをしている。

でも、握力筋力のバランスが酷い。

ココまで筋肉がついていたら、マッチョのはずなのになぜだ!。

「自粛やがれですが、なにか?。」

黒オーラ出現！！

何、何ですか、この混沌、カオスは。

「う、文句のいいようが無いです。」

「ですよー。ま、楽しいですからいいですけどー?。」

ドレス、槍兵は、それでいいのか！。

お前らの要救助者、この少年だろ！！。

あれ、突っ込みどころが沢山だ！！。

「解る解る、楽しいって一番に色々優先する事よね。」

藤姉、何てこと言うのさ。

なんでだ、緊張状態からハイテンションな話し場に変貌した。

「大河、その言葉には色々問題満載だがお。」

突っ込みはここにも居るんだね。

よかった。

真面目組みは未だに戦闘態勢ですけどね。

「紅茶だ。こうなれば、平和的に話し合いをしろ。

むしろ、そうしてくれ。」

アーチャーよ、お前、俺の紅茶をまた使いやがって！！。

殺す！殺してやる！。

「おい、アーチャー。」

んところちを見る。

コイツは唯では終わらせんぞ。

「後で、お・も・て・に、来いや。」

俺の命のストックを浪費しやがって、もう許さん!!。

「どうなってんのかしら。」

「気にしたら、負けなのよ。」

事件13、状況把握をするか。（後書き）

フリーダムがこのクオリティ。

ギャグ要員は

えみや様 悠太 悠太の関連 ネコアルク セイバー
ある意味アーチャー うつか凜

フラグブレイカーにいつの間になっていた。

事件14、みんなの不幸。とくに、アチャ男。（前書き）

ついに登場の誰かさん。

ここまで何とか頑張ったぞ!!。

事件14、みんなの不幸。とくに、アチャ男。

俺が言うといえつと言う空気になる。

そりゃあ、英霊さんにケンカ売ってんだから当然だし？。

「つ、ついに、一対一の頼み事が起きたニヤ！？。」

ああ、うざいぞ。もう。

そういうのは、今は無視。

煮て、焼いても足りないなあ。

よくも、高級もんを使いましたねえ！！。

「お前は解っているのか？。」

「解りたくもねえよ。生え際ハゲ。」

うん、アチャ男の第二のあだ名は生え際ハゲだ。

外野に笑い声が聞こえたのは言うまでも無い。

本人はちよつとショックを受けていた。

「お前は本当に正気か？。真面目に本気に正気ですか。」

なんですか？。

今、眼を細めているような気がします。

くくく、楽しい遊戯の始まりだ。

「さあ、始めような。」

「えー、実況は私たち、葛木夫人と遠坂さんでお送りします。
どう思われますか？。」

夫人と言う言葉に反応して赤くなる。

いいとこありますね、奥さん。

かわゆいじゃんか！。

「なんと言つか、かなりの不利と思うわ。」

うむ、たしかに。

あの時の士郎くんは勝てたみたいだけど、

こう言うのに喧嘩売るなんて、しろらしいよね！。

大丈夫かな？。

「たしかにね。もどきとか言っていたから、かなりの半端者と思うし。」

あのさ、かなり忘れてないかな？。

ここはえみやしろうの陣地だよ。

魔術師は得意分野で戦うの。

大体、勝てない喧嘩はしないのよね、私のしろつくんは。

「ま、勝ちのはお決まりですけど。」

えっ、と声を合わせて私を見たのは言うまでも無い。

唱える言葉は一つ。

「この身は夢見の剣で出来ている。」

有り得ない事を形にするのが俺の剣。
俺という存在でお前を叩く!!!。

「懺悔をココに」

打ち合う。

解らないだろうが?。

ここは、俺の陣地である事を。
罪の数を数える
顔とかも青くなりやがれや。

「裁きはこの手」

勿論の如く、俺の事だ。

この手には俺の象徴の折れた剣がある。
始めますか?。

「願いも聞こえず」

「待て、何をしようとしていますか?。」

焦りの顔が出てんぞ?。
バイク地獄開始つと。

踊れ踊れ!!。 はははっはははっはは!!!!。あ
あの訓練は地獄だったわよ!?。

「形が無いのが我等自身であり」

ついでに追撃システムを始動。
ほほほ、無駄よ。

ソレは俺という存在がある限り止まりやしない。

「完全などありやしない。」

俺のターンです。
打ち合って打ち合って逝けて避けて。
なんだろうか。

この感覚はなんだろう?。

「故に裁こう」

俺の本気モード炸裂です。
言っとくけどコレは奥の手2です。
自粛?なにそれおいしいの?。
あと、さり気無く戦場の匂いと感覚がします。

「この意思で汝を剣に捧ぐ。」

祈れ、その身の無事をな!。
紅茶の仇を討ってやる!!!!!!。
八つ当たり上等だ!!。

「宣戦布告だ、ゴラ!!!。」

自己強化、マックスブレイーード。

「待つて、マジで待つて下さい!!。」

持つてた折れた剣が釘打ちバットになって打ちまくったのは言ってもありません。

後はバイクと追撃システムでのうちしやがれ!!。

「ふゝ。すつきりした。」

何?。後ろを向くとびくっつかれました。

俺ってなんかした?。

未だに轢き殺しコンボをかまされてオンボロとなるアチャ男。

「ふん、馬鹿な奴等ばかりよ。」

成金でた?。

その鎧は、なんぼするんだ。

どれほどの銃や名剣を購入出来るんだ!!!!。

いいなあ。いいなあ。

不審者さんだけど、いいなあ。

「よあ、坊主。出来れば、二度と会いたくなかったけどな。」

さり気無く、顔色が悪いのは普通か?。

カルシウムを取れよ!。

「変態タイツは帰れ。」

持っていた釘打ちバットを変態に投げた。
背後にガッツつと当たるようにな。
リフレクトショット応用編だね！。

「うげっ、だから嫌なんだよ。」

顔も身体も真っ青そのものだ。
ははは、俺の気に触れるからだよ、君。
金色にもドン引きされました。
なぜに？。

えみやしろっの象徴の折れた剣。
をぺたつと貼りました。

> i 1 9 8 0 2 — 2 3 2 8 <

こんなものと思ってくれば良いです。

事件14、みんなの不幸。とくに、アチャ男。（後書き）

この身は夢見の剣で出来ている。

コレを言わせたかった。

投影開始のトレースオンとかもいいけど。

ここはオリジに走りました。

衛宮士郎のようで違うのですから。

これには、藤村大河が関係しているのは言っまでもありません。

長い自己強化は、

相手に宣戦布告とともに

自分のヤル気を起こすためのスイッチの役割を補っています。

まだ一般人のつもりでいるようなでこいう面倒な事をしています。

では、詠唱をお聞きください。

懺悔をココに 裁きはこの手

願いも聞こえず 形が無いのが我等自身であり

完全などありやしない。

故に裁こう この意思で汝を剣に捧ぐ。

では次回！！。感想を下さい。

えみやしろつと言つ存在の意味（前書き）

彼の紹介ページです。

兼セイバーが見た夢でもあります。

えみやしろうと言う存在の意味

俺は、気が付いたときは病院だった。

思えばあのころは空っぽで赤い何かで詰まった人形とも思えた。

じいさんが馬鹿で魔法使いなんだ、つと言ったオカシイ人。

でも、信じるしかなくて、そうでないとあの光景が嘘だとも言っているように聞こえる。

俺が言っている、あれはそういうのが関わっているのではないのかと。

だから、俺はじいさんに引き取られた。

それからある日。

「僕は、魔法使いじゃないんだ。魔術使いなんだよ。」

じいさん曰く俺には魔術回路があつて、しかも特殊。

言うなら才能があると言われた。

特異な才能だから狙われるかもしれないと言われて、教えてくれると言われる。

カッターナイフが無いから、造ったのが原因だったと、今は思える。

脆かったな、思いつきり真面目に脆い。

とは言っても、ここまで特異だったので基礎の基礎を教えてもらって銃を覚えてくれた。

ごめんだけど、カッコいいんだ。

機能美、シルエツト、殺すという特化が素晴らしい。

「僕と違って、才能があるね。」

そう言つては教えてくれるんだ。

時折、嬉しいような悲しいような顔になるけど仕方が無いよ。

そして、
刀も同様にカッコイイ。
美しい。

切るという一点に特化している。

芸術クラスの刀が涙が出るぐらいにホントに綺麗だ。

奈良、京都に行くときは刃物店に行ったものだ。

俺は、欲しいと心底から思った。

買うには一万以上のお金がかかる。

すごい途方の無いお金がかかる。

なので藤姉に聞くと

「うなもんはね、非合法に稼いだり、合法的に稼いだりすればいいのよ。」

教えてくれたのは良いけど、不倫や修羅場、心理などの勉強。

人の弱み、警察を中心に色んなお金の強請り方や裏の仕事とはいう

お勉強。

ようは、

「ばれなきゃいいのよ!!。」

「解ったよ、藤姉。有難う!!。」

稼ぐには、修理しながらがいい。

合法にはソレがいい。

飛ばしの携帯、パソコン色々揃えた。

見るだけで解析が出来るようになった。
魔眼開眼!!と言う。

これで成分や重量、年月、神秘が解る、理解できる！！。
じいさんに言うと、凄いなといわれた。

発動中にも眼の色が変わらないみたいで、便利だ。

じいさんの身体は鍛えられていたんだというのも解った。

でも、藤姉は凄いというぐらいに鍛え上げられていて、時折外国に行っているらしい。

何をしているんだろう？。

そして、いつだったか、満月の夜だった。

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた。」

なにを思った。

穏やかだったのは覚えている。

諦めとかもあのときにはあつたと思える。

「で、それで、どうしたんだよ。」

俺には理解が出来なくて見るしかない。

「ヒーローは期間限定で大人になると名乗るのが難しくなるんだ。」

懺悔にも聞こえて怖くなる。

あのころは衰弱が酷かったと覚えているからだ。

「そんなこと、もっと早くに気がつけばよかった」

なんだよ。

うーん、これじゃあじいさんが安心できない。

なら、言う言葉は決まっていた。

「しょうがないな。魔法使いにもなれなかったんだ。」

魔術師の達成、目標の『根源』の到達。

コレについては、教えてくれた。

じいさんは目指してない。

「そうだけど、どうしたんだ。」

引き攣った笑顔。

何を言っているの解んない？。

「なら、俺がすべてを達成する！」

驚いた顔になる。

ドン引きしたんだろうな。

立ち上がって宣告したな。

黒歴史だ。

「根源の先の先を見たいし、銃を金属を破壊する兵器を開発すれば良いと思うし、何より！」

俺は、我が儘だ。

だから、俺が死ぬまでは平和にする。

情報を錯乱しメディアを活用して、弱みを握り、

いざと言うときは他の魔術の神秘を見せて死に急ぐようにする。

全部したい。

刀も欲しいし。

服も作りたい。

「俺がオンリーワンでいればいい。」

「うん、しろうはそれが一番だよ。」

アレからゆつくり死んでいったんだよな。

藤姉からとんでもない国や三咲町に放り込まれたりした。

まじで、じいさんが来ちゃ駄目だよ!?!と毎回夢で言われた気がする。

渡し守に銃とかをぶっ飛ばしたり、はっちゃけすぎだろ。

何回か死んだよね俺。

「しろう、一体あなたは どうしてあんな性格になったのです?。」

理解が出来ない。

解るのは、キリツグとタイガのせいだという事だ。

「…、考えないようにします。」

それが一番と私は思いました。

えみやしろつと言つ存在の意味（後書き）

よく解りましたか？。

大河のせいが大半を占めるのです。

ここまで大河がでしゃばっているのはこの小説のみですね。
もっと活躍しますよ。

突撃！えみやさまの評価は！？〔池袋〕（前書き）

クロスしますと警報を流します。

さて、話は伏線回収に乗り出しております。

ギャグ成分が少ないこの頃な感じがしますね。
だから、決行します。

ニヤツとしてくれば、幸いです。

ドキドキ！？突撃取材班を、です。

突撃！えみやさまの評価は！？〔池袋〕

あまり名前が出ないって？。

まあ、プライバシーの保護と言っておきますか。

では、決行！。

さてさて、ここは首なしライダー都市伝説で有名な池袋。

時折で赤毛の少年が目撃されている。

なので、誰から聞こうかな！。

あ、そのの（冴えない）高校生一行が居ります。

以外に女の子は胸があるな。

ごほん、では突撃です。

すみません、この写真の赤毛の少年について何か知りませんか？。

「解りません。」

「紀田君、ソレは無いと思うよ。ろくでもない人でも、ちょっとは
…。」

鬼門でしたか。

では、あなた方の学校に殴り込み？をしにきたのもこの人ですか？。

「知りません。」

「はい、暴走族を連れて来ましたけど？。」

有難う、女子よ。

では、次に突撃だ!!。

ジメツとした裏路地で御座います。

何かが起きそうでドキドキなこの頃です。

うお、取材班の頭上を何かが通りました!!。

ゴミ箱?、でも重そうです。

ああ、そこにいい御年の不思議君たちが居ます。

物が飛び交っています。

あと、ナイフがついでに。

これぞファンタジー!!!!。

すみませーん、赤毛の少年について何か知りませんか!?

あれ、喧嘩が止みましたね?。

もっと近くに行こうと思います。

すみません、この少年について知っていますか。

つか、知っていますね。

「知っているの何も、

君ってこんな危険人物を聞くの?。命知らずだよね。」

命知らずとは?。

危険人物ですか、とんでもない事としている模様です。

「色々、されているの。格安で仕事を押し付けられたりとか」

ふむふむ、

「忠告とかされたりさ。」

火遊びのし過ぎですね。

あきらかにし過ぎだと思われます。

で、そちらのバーボーイはどうかしましたか。
軽く汗が噴出していますか。

「いや、夜には気を付けると喧嘩をしたら両成敗しか、ねえです。」

.....。

なんだか理由とか想像出来ますね。

木製バットとか、バイクとかな感じに。

どうかしました。

気まずそうにして何かなさいましたか？。

「何にも無いです。」

「俺もね。」

そんな感じ別れましたが、
情報屋さんが命の危険を感じるワーストトップテン入りをしているらしいです。

公園です！。

広いですね。

嫌な感じもしませんし、最高です。

あそこに美人そうな黒い女の人を発見いたしました！。

ネコヘルメットですか。

可愛い。

取材開始です。

すみません、この少年について何か知っておりますか？。

「勿論知っている。」

どういった間柄で？。

「ある意味助けて貰ったぐらいかな？。詳細は言えない。すまないな。」

いえいえ、それで結構です。

では、有難う御座いました。

ふう、では、結果。

殴り込み事件は始めの高校生の学校で起きた事。

不思議コンビは弱みを握られている様子。

忠告も受けているようです。

美人なヘルメットさんは助けてもらったらいいです。

きっと、認知障害の物を貰ったと思われます。

親切なのかね？、しろう君は、先生は交流関係が心配だぞ。

突撃！えみやさまの評価は！？〔池袋〕（後書き）

伏線回収つと。

どうでした？と聞く作者です。

事件15、命を狩る金色と足掻く者たち。（前書き）

回収中、回収中、伏線を回収中。
頑張っております。

事件15、命を狩る金色と足掻く者たち。

「…、で、茶番は済んだか?。」

すぐに、顔を直す金色。

「なあ、セイバー、俺ってなんかしたか?。」

金色よりもそつちが気になりました。

考えてみるよ。

皆にドン引きされたんだ。

聞きたくもなるよ。

「しています。絶賛でしていますよ。」

うーん、なんとなく、変態に蹴りでも入れたくなるけど我慢しよう。

「なにか用ですか?。」

藤姉が金色を見ている。

藤姉の後ろに本物の虎が見えそうな気がする。

そんな気迫がある。

俺の本能が言っている、虎は本気だ。

英霊と同等の殺気を放っている。

…、喧嘩を売る相手を根本的に間違っていると思う。

「うむ、無視をしていないのは良しとするが。」

会話にもなっていない。

俺のせいかな、俺のせいなのか。
皆が戦う体制だ。

もう、戦いが始まっているけど。
カツコイイ美形さんやドサクサに塗れ男装麗人???が参加。
頑張つて『死』を払ってください。

「中心が我^{オレ}では無いのが不服だ。」

そんな中、嫌な予感。
嫌な予感だわ。

金色の後ろに違和感が出てくる。
あれはなんだ。
ヤバイヤバイ、真面目にヤバイ。

「死ね。」

やばい。

水晶刀が手元に無い。
ああ、俺のうつかり!?!。
うっか凜と言えないな。

「コレクションの部屋で死ねたらな。」

「そこか!?!。」

藤姉が徹底抵抗の意思を示す。
同時に飛んできた武器を弾き出した。
セイバーも同じように、みんなは諦めていない。
先生、拳で弾くなんて二次元のようです。
取りに戻る、ダウト。

根性で天下の宝刀を投影する、アウト。

「開きて、閉させ。」

大量の死が飛んでくる。

死が巨大な本の中に入っていく。

ぱかぁを白紙と思われるページに武器がドンダカ入って行く様に見える。

欲しいな。

亜空間の保管所にお似合いだ。

いいよな!。

にしても、明らかに少年が焦っている。

「オーバーヒートを確認。

操作強化のためプロトタイプを本書に回収します。」

棒読み、機械的な言葉だ。

で、プロトタイプって何。

ロボットか?。

????????。

考える時間が欲しいと思うのですが。

「了解。」

ドレスが言つと消えた。

険しい顔ですが、大丈夫か?。

「はいはい、御意ですよ。」

怖っ。

笑っていやがるぞ!!。

ああ、こんな余裕っていいよね。

顔とか表情とかを良く観察できるっていいぞ。

「余裕あんのか？」

「あるが、何か。」

ランサー相手にはセイバーが、
その他と言うが金色の相手をしている。

「なんだ、その本は?。」

肝心の相手は余裕そのもの。

なんというか、堂々としすぎだ。

俺なんか死ぬのが嫌でこそそしていたりもするの
に、
以外に慢心でもあるのだろうか。

「誰が、自分の手札を、言うか。」

途切れ途切れの言葉には力なく、左手で頭を押さえている。

どうやら、少年の魔術は脳の負担をかけられると思われる。

俺の魔術もそういうのに関連するんだけど。

飽和状態見たいな感じ。

造る言葉はコレしかない。

トレース・スタイト
「投影・開始」

大体、アレと同じ言葉なんか言いたくもない。

ムカツキを通り越して八つ当たりでも、すんぞと思うのですが。
ジジイに言われたときは吐き気が出たぞ、ゴラ。

「完了つと。^{アパート}開。」

俺は、出来そこないだ。

自分を持つては居るけど、其処には微かに俺が居ただけだ。
この才能が人を傷つける。

迷惑をかける。

だから、俺は、人を好きにはなれない。

いけないんだ。

と、思っている。

封印指定の仲間入りなんて嫌だ。

「^{フェイカー}贋作者か。」

こめかみに血管が!!。

裸足で逃げたい。

むしろ、裸足で逃げれる。

「俺の所持品の偽ですけどなんかあんのかよ!!。」

最悪でも危険物の投影なんてするか!。

俺が墓まで一生抱えて隠すに決まっているだろうが。

ああ、睨みが怖いと思うこの頃でござんます。

「許さん。」

また、あの夜の感覚が出てくる。

あの『死』が近くに来る。

言うなら、宝具開放だ。

ヤバイ、偽でもかわし切れるかが疑問符だ。

「キャスター、すぐに結界を。」

足しにはなると信じたい。

なればいいけどさ。

「エヌマエリシュ天地乖離す開闢の星。」

思いつきりセイバーたちも巻き込んでないか？。

しかも、偽は途中で壊れ、キャスター製の結界を壊す。

勢いが、止まらない。

「I am the bone of my sword」

その声は生き様に聞こえた。

やめろ。

それは、なんの言葉だ。

体が侵食される気がして、頭の中に幻想が見えて仕方が無い。

蒼い、青の騎士王がちらついた。

俺が呼んだのは黒の暴君で。

アレが呼んだのは青の騎士王じゃないのかと。

「ロー・アイアス熾天覆う七つの円環！！」

なんて言う忌まわしき偶然。

解った。

じじいが言っていた馬鹿は、コレだ。

アレがコレになるのか。

「エミヤの家系はどうしようが無いつて事かよ。」

それでも、僅かすぐに壊れる。

最後の一枚があつと言う間にひびが入る。

「アーチャー、あたしたちを守り切りなさい!!。」

令呪だ、遠坂が令呪を使つたんだ。

「悪あがきは無駄だ。」

金色が言おうと聞きたくは無い。

それでも生き残りたい。

少なくとも俺は死にたくない。

隣で盛大な舌打ちが聞こえた。

「我、望む。開け。」

歪みが見え出す。

あの時の歪みが見える。

大きい歪みがあつと言う間に広がる。

ひびが出てきた。

「創造主の命により、我等を誘え。」

水晶刀を投影する。

骨格、神秘、年月、概念を再現する。

はつきりと、黒を、個を造り出す。

「^{アバト}開。」

出した瞬間に壊れて偽を展開する。

あっと言つ間にまた、ひびが出てきた。

早くしてくれ!!。

「書の世界に我等を飲み込め。その他以下省略、金オーラ除外で。」

その瞬間俺たちは、確かに世界から消えた。

「あのゝ、あたちを忘れてませんか?。」

ネコアルク以外は確実に居なくなりました。

金色も残されたままで物語は動きを変えたのは当たり前前の事である。

事件15、命を狩る金色と足掻く者たち。 (後書き)

やっと、伏線もどきを回収。

次回は話の中で解説しますので宜しく!!。

事件16、世界のどこかの世界って??. (前書き)

ヒーーーーーッアッッの中的な感じ。

逝くぞ野郎共とも言っ。

事件16、世界のどこかの世界って?。

ココは何処ですか。が一番の場所。
整理しよう。

ソレがよし。

まずは、周り。

真っ暗な大地に黒い霧。

しかも、金色が放った武器の数々。
大地に刺さっていて怖さ増大。

(セイバーさん、セイバーさん、何処に居ますか。)

マジで怖す。

何処ですか、何処ですか。

嫌いだ、世界は残酷。

理想郷などは無い、あるのは現実と言う何か。
感じるのはなんだ?。

声が聞こえた気がして周りを見渡した。
人の気配が無い。

「うん、歩こうか。コレも回収して方がいいに決まっている。」

好みそうな武器を拾うと歩く。

怖くなんか無い。

怖くなんか無い。

ざくざく、ざくざくざく。

誰かにつけられていて怖くて。
逃げるように走る俺。

向くな向くな、後ろを見るな、見たらやばい事にしかない。

「何処だ何処だ、真面目に何処ですか、ガチで何処ですか。」

早口になる俺の口。
怖いです。

「居た居た。」

「少年！！、よかった。」

助かった。
怖かった。

「常夜の大地に居るとは思わなかったけど。」

なんですか、ソレ。

厨二病的な名前は何。

しかも、危険臭がするのは気のせいですか。

「さて、権限発動、エタシエス国、首都エルファ。」

ノイズが走り、場面が変わりだす。
錯覚の世界なのかと思ってしまう。

『ココ』は何処だ。

「人形管理室へ移動。」

一瞬、白に包まれた。

つつ、ココは何処だ。

また少年のせいだよ。

周りを見ると

セイバー 遠坂 アーチャー 先生 キャスター 虎 獅子王？
が居るようだ。

論議中みたいで、やや興奮気味だ。

とくに、遠坂とキャスターが怖いぐらいに興奮中で。

「セイバー、どういう状況だ。」

聞くしかないのが現状だ。

ある意味混沌。

しかも、どこか息苦しい。

「よく解らん、としかいいようが無い。」

…。盗み聞きするかと聞き耳をたてた。

その前に、

「サンキュ、助かる。」

心底から困った。

誘拐犯め、どという神経してんだ。

俺もそうだけども。

「マ・濃……。」

「……いのね。……の方……いのね。」

何の話だ。

聞き取れない。

解らん。

ひょこつと、扉から顔を出す少年。

「えーと、皆さん怒っています??。」

少年に視線集中。

悲鳴を上げて隠れる始末。

うん、引きずり出そうと決心がつくのは当たり前に近い。

「う、ごめんなさあああああーい。」

この時の俺はきつと、営業スマイル120%だと思う。

いや、無表情よりも怒りの顔よりも笑顔、スマイルがいいと思うんだ。

で、外野は何を見て引き攣った笑みを浮かべてんだ、ゴラ。

引きずり出して俺は聞く。

「よし、さて、聞こう、ココ何処ですか?。」

と、さつきからさ、魔眼を展開したらチカチカ眼の奥が痛いんだよ。説明しやがれや。

「そうですよ。先輩は最強なんですから、早くしちやって下さい。」

は、い?？。

さくらさん。

どうして、ここに居るの?。

まあ、

「質問変更だ。どうして、桜までまきこんだ?。」

返答によっては滅するぞ。

桜まで、こんな危険な世界、魔術の世界に関わらせただよ。
そんなの最悪だ。

非道だ。

ああ、コロシテもイイですか。

「残していても、人質になってあの金ぴかに殺されるだけと思うですけど。」

たしかに、あれは短気そうだ。

最終的には記憶を消せばいいんだっけ?。

桜にはその手段を使おう。

「先輩。」

俺に向けて笑う、桜。

俺の日常を彩る人。

何を言うつもりだ。

「大丈夫ですよ、元々、魔術と関わりを持っていましたから。」

「「え?。」」

さて、俺と誰の声が重なったのだろうか。

「なんで、桜が?。」

遠坂凜と重なったらしい。

桜の関係者か?。

どういう意味デスカ。

俺の日常がホウカイして逝くのが解った。

いや、元々無いんだ。

笑えるな、そんな展開には。

「全部、先輩のおかげなんですよ。」

何が俺のおかげだ。

俺は何もしていない。

何一つもしていない。

「三咲町に連れて行ってくれたおかげで」

…、していたらしい。

はて、何をしたのかな?。

「寄生虫を払えましたから。」

「すまん、一から言ってくれ。これじゃあ、電波だ。」

俺が言うつと最高の笑顔になった。

うん、俺は桜も好きだな。

……『も』？。

「はい、勿論です。」

桜がいうには、

まず、三咲町は化け物町で、

俺が魑魅魍魎屋敷に行ってお泊りするときに死の脅威が襲撃をしたらしい。

その際に寄生虫、間桐臓硯を殺したようだ。

そこからは感謝の言葉だらけでした。

なんつーか、

「えみや……いえ、土郎先輩。」

いい感じに、桜に詰め寄られる。

えっと、胸が当たっています。

真面目に周りが怖い。

遠坂から殺気を感じる。

アーチャーも同じく。

虎は何やらと独り言。

キャスターは息を荒げている。

先生、奥さんは変質者です。止めてください。

「答えはすべて終わってからで伝えます。待ってくださいか？」

・・・・・・。

少しぐらいは高望みしてもいいか？。
でも、俺にはソレをしてもいいのか？。

「待つ、よ。」

すぐに、答えが得れそうにもなく、今は曖昧に答えるしかない。

「あゝ、まずは情報を整理しましょう？。」

ギロリと睨まれる運命と言う。

とくにこの状況下にはきつとソレを指すと思う。

「ここは何処かと言いますから。」

内容を整理すると、ココは書の世界。

悠太君曰く、

小説を読むと内容に書いてある風景を幻視するので可能ではないの？
？と思つて造つたらしい。

偽者なのに本物らしくするために世界中の土や植物を採取して、大胆再現をしている。

バグが沢山あって、俺の居た常夜の大地は危険度マックスのようだ。

聴いた瞬間に殴った俺は間違っただけだと断言できる。

「だから、マナの濃度が高いのね。」

意味が解らん。

「昔、神代はマナの濃度が高いのよ。」

へえ、ん？。

疑問が出てきたぞ。

「現代は低いわけか。俺たちは大丈夫なのか？。」

実を言うと酸素中毒？？があるのです。

二酸化中毒が当然あるようにそんな中毒もある。

「解んない。」

真面目な顔でほざきやがる。

「この身は夢見の剣で出来ている。」

こんな行動に出ても俺は悪くなんかない。

真面目にふざけんなよ。

「やめろ、えみやしろっ！。待て、待て。」

両腕を封じられる俺。

アチャ男にハゲの呪いをかけなくなるのは俺だけではないはずだ。きつと、そうに決まっている！！。

「そうよ、えみや君。」

こいつを殺してあたし等が出れなくなったらどうすんのよ!!。」

「殺さないわ!、木製バットで殴り倒す^殺だけだ!?。」

半殺しぐらいで止めるから待たんか!!。

離せや、うつか凜、生え際ハゲ。

いつそのこと、さげまんにお前らの名前を書かせてやろうか。

「だって、逃げるのにこういう手段しかなかったじゃんか。」

あ、そうでした。

「だったら外に出せ。」

ドスが聞いたのは言うまでも無い。

睨んでいます。

悠太君が泣いています。

ピーピー泣くな。うざい。

「俺は、どうなるんだ。」

…。

「なあ、誰か、コイツの契約ラインを切れる人。」

一応でも敵なので。

すんごい嫌がらせでもある。

もう一度、言う。

「変態タイツの契約ラインを切れる人いますか?。」

敵とか、死ぬとか勘弁して欲しいので言う俺。
もういいや、少年を無視とする。

事件16、世界のどこかの世界って??. (後書き)

死ねた。

やっと、後はお話の解説編後半。

間桐臓硯のお話も出ます。

矛盾なんか誰がしますか。

きちんと、消化していきますとも。

来週はお休みするかも。

短編を書こうかな?。

マジ狩る。第三話の蒼き騎士王、降臨。（前書き）

短編のターーーン!!
頑張って後三話よ、私。

マジ狩る。第三話の蒼き騎士王、降臨。

さて、ここは冬木。

なのは当たり前である。

えみや様はルビーちゃんを探してノーヘルでお散歩中。

「いない。何処じゃ。」

かなりのドスが効いている様子で。

かなり遠巻きにひそひそ話し声をする。

おい、衛宮士郎よ。

速く何とかした方がいいよ。

と作者は主張します。

「士郎・・・!?!。」

「誰。」

この話には初登場の腹ぺこ王。

驚きのまんまるお眼目であります。

驚きますよね。

うん。

「誰って、わざとですか!!。」

凄い剣幕にえみや様、ドン引き。

引いています。

「いや、会った事無いし話したこと無いし。」

それ以前にノーブラじゃないか。
と小さく蛇足する。

この小説のえみや様は解析魔眼もちです。
セクハラもできるのです。

「ノ、ノー！？、なんですか、その爆弾発言は！？。」

はい、聞こえていたようです。
うわー可哀相に、と思いますが気のせいかな？。

「そこだけが幼児じゃないか。」

これ、ソレはならん。

冷めた眼で本家セイバーを虐めるえみや様。
セイバー、騎士王の顔が真っ赤に染まる。

「いいでしょう。その根性を叩き直します。」

聖剣を丸出しに本気モードになった騎士王。
うん、怖い。

「また、銃刀法違反者が！？。おまわりさー！……！！！！。」

いや、自業自得だぞ。

誰だってコンプレックスはあるんだ。

大体、騎士王だって女の子だよ？。

欠片ぐらいは気にしてるに違いないと思う。

「行きます、約束^{エクス}された」

バイクのエンジンをフルで焚く。
凄い速さで逃亡。

・・・逃げ切れないです。

「核ミサイル発射か!!。」

騎士王はきつちりとえみや様を見る。

セイバーの名に恥じないけど、怒っている内容で台無しだ。

「勝利の剣――――!!。」
カリバ

本気の本気、全身全霊全力全壊で放たれた宝具がえみや様に近づいています!!。

回避は…無理ぽ。

「どうして、なんだか、嫌な感じだ〜〜〜〜!!。」

きらーーんと飛んでいきました。

うむ、ご愁傷様。

さて処替わり衛宮邸では

「ねえ、私が見たのは気のせいかしらねえ?。」

お茶をすする。

虎と聖杯戦争の元黒幕。

一回? いや、二回も死んでいるもんね。

心なしか、衛宮士郎はやつれている。

桜さんも居ますからか?。

「先輩、肩を揉みましようか?。」

うん、桜さんが言うところだとエロいと感じる作者です。

女ですけど、うーん。

「頼むよ。」

ほのぼのの日常とはこの事を言うかもしれない。

しかし、忘れてはいけない。

元々のたいコロはギャグ成分で構成されている事を!!!!。

「士郎、ここに跳ばされていましたか。」

鬼の形相のセイバー様登場。

「なんでさ。」

頑張れ、勇気を持って聞くがいい。

こんな修羅場は勘弁と言わんばかりに汗をかいている。

面白そうに虎や外道神父が見学をしている。

「よくも、私をノーブラと言いましたね?。」

セイバーの後ろには黒い炎が見え隠れをする。
気迫が凄く殺気立っている。

「いや俺、さっきからココに居たし、なんでさ!!。」

「え、そうですか。」

さらりと殺気が無くなるセイバーさん。

「もしかして、セイバーさんも」

桜に注目が行く。

この人も怒っていた。

「馬鹿男を見かけ・・・ましたか？」

ここから、えみや様包囲網が敷かれ出す。

どうするえみや様、早くしないとルビーちゃんどころじゃ無くなるよ!!。」

マジ狩る。第三話の蒼き騎士王、降臨。（後書き）

頑張ってマジ狩るを完成させます。

いろんな意味でマジ狩るな事態になっています。

マジ狩る。第四話の全員、集合!?!。(前書き)

さあ、楽しく。

マジ狩るブレイク!!。だよ。

マジ狩る。第四話の全員、集合!？。

バイクの音が鳴り響く。

乗り手は恐ろしい剣幕で乗っている。

顔は般若並み。

「なんでさーーーーー!!。」

えみや様のバイクを追う五人の影!？。

その名は!!!!!!

正義の味方?いえ、見習い魔術士です。

衛宮士郎君。

色々と黒幕をしていました。

心が両方の意味でからっぽで嫌な外道神父さん。

言峰綺礼。

でも、心も身体も綺麗ではない。

先輩ラブなヤンデレ症候群。

間桐桜。

黒桜は夜道歩いちゃいかんと思います。

ミラクルパワー全壊つす。

タイガーーー藤村大河。

ちゃっかり、タイこゝろで黒幕?していました。

えみや様本編には一回も出ない悲劇の正史ヒロイン。
蒼き騎士王セイバーさん。

なんでえみや様を追っていると言うのは、えみや様自身から出た錆です。

悪い事はしてはいけませんの象徴です。

「銃刀法違反、銃刀法違反、

そして法が無くなり犯罪都市、犯罪国家になりましたと、さー!。」

かなりヤル気満タン。

黒鍵や矢が飛んできたり、剣が飛んできたり??で避けまくり、ギミック『銃』で応戦。

セイバーや士郎が接近戦を仕掛けたらギミック『ソード』でお返ししている始末。

「なんですか、あのバイクは!。」

ドッキリセイバー!。

勿論、えみや様特製オーバーバイク。改造バイク。

バイクとしての機能もハイアップ。

趣味で武装もつけました ゴツツイ イカシタ バイクと言える。でもね、馬力が酷くて無意識に強化しているのよ。

「ほう、いいな。欲しい。」

・・・お金を出せば作ってくれますよ。

現金大好き!。

金欠気味ですが何か?というのが、えみや様。趣味に生きているえみや様。

「あいつ、違反しまくってないか？。起源は同じだよな？。」

考えると、突っ込み派だね。
まとも君は珍しいと思う。
言いつつも剣を投げている。

「外道な先輩なんて、存在させません！」

うん、解るけどこれが事実。
事実なのだよ！！。

「あなたの存在を許しません。」

黒き炎を燃やすセイバー。
その姿はセイバーオルターだ。
逆鱗触れすぎだよ。

「いや、国民が憲法違反者なのか？。」

あゝもう、会話が成り立たない劇のよう。
避けて蹴って轢いての繰り返し。

「お姉ちゃん、泣きそう。」

忘れていないか。
彼女は先回りをしていたのだ。
ゆらーっと幽鬼のよう。

そこまでに外道走りしたえみや様が許せないと言っのか？。

「^{タイガー}虎の」

えみや様はまた焦る。
悪役の如くやべえと思った。

「ははは、何でだろ。怖い。」

取りあえずは、ステッキへし折る。

「^{アボカリプス}黙示録!!。」

ドカーーーンと景気よく飛んで行きましたとき。
続く!!絶対が続く!!。

マジ狩る。第四話の全員、集合!？。(後書き)

タイガーアボカリプス
虎の黙示録。

適当に調べてペッタとしました。

この技を出したかったのです。

次回、マジ狩るブレイク、第5話の参謀に会いました。
宜しく!!。

愉快な工ミ―道場！！（前書き）

愉快に本編前に。

愉快的エミ―道場！！

「やつほー！ー、元気ですー！。エミヤンと」

「ユウヤンに」

「師匠！。弟子一号の」

「『『『道場でーす。』『』『」

「そんな感じに開始しますです。」

「今回に限り作者は出てきませんのでよろでーす。」

「ウツスー！！」

「つか、なんでおれも参加しなきゃいけないんだ。」

「シヨタだし、ロリブル魔が居るから調度いいじゃないか。」

「はい、解りましたら、バイクを出さないで。」

「では、伏線回収中って言っているでしょう？。まあ。」

「その他もろもろの解説でもあります。」

「えーまずは、えみやしろっから行っきます。
まあ、あの強化詠唱の意味からかな?。」

懺悔をココに 裁きはこの手

願いも聞こえず 形が無いのが我等自身であり
完全などありやしない。

故に裁こう この意思で汝を剣に捧ぐ。

「懺悔はココに、

自粛はしないと言う事だ。

まあ、迷惑はかけているし。」

「うわ、まともな懺悔だ。」

「確かにね。でも、解ってしているのもどうかと思うわ。」

「んで、裁きはこの手、

彼自身は自身の現時点の日常がなくなるのを恐れているんだ。
日常を守るためなら友人でも斬るぞ。

後、手加減はしないからな。もありますよ。」

「うわ、ガンスルー来た!?。」

「黙れ。願いも聞こえず、

お金はたまらないや人が居る限りは平和になりやしない
と言う皮肉的な意味合い。

「形が無いのが我等自身であり、

矛盾に満ちている人類を意味してるんだ。」

「以外にリアニストね。感心するわ。」

「まあな。」

「完全などありやしない。」

理想は理想、手は届かない。

「故に裁こう」

危険理想者には俺が斬りますよ的なやつ。」

「うわゝ、正義の味方キラ！。」

「危険思考だからな。それも。」

「以外にアンチ色があるのが特徴だもんね。」

「いや、エミヤンが危険」で、「すみませんでした。」

「この意思で汝を剣に捧ぐ。」

貫く覚悟があるなら罪の数を数えろみたな。

剣っているのは十字架、罪を象徴しているつもりだ。」

文

訳

懺悔をココに

（自粛はしない。）

裁きはこの手

（だから、全力で行くぞ。）

願いも聞こえず

（何も叶わない。）

形が無いのが我等自身であり

（矛盾に溢れているのが我等人類。）

完全などありやしない。

（理想は理想、手は届かない。）

故に裁こう

（理想を求めるならば、打ち砕こう。

）
この意思で汝を剣に捧ぐ。
で叩き潰すからな??。）

（覚悟はいいな、罪を数えろ、全力

「うわー物騒。」

「過激にエミヤシロウが意味を知ったら切れそうね。」

「怖いのはどっちも普通じゃあないのかな??。」

「お前等、俺の認知はなんだ。」

「「「・・・」」」

「まあ、いいや。」

「あと、しろう君の、この身は夢見の剣で出来ている。
は象徴をこの手に握るための詠唱。

一応、其処から形を変えられるわ。

でも、材質は変えられません。

あの時の釘うちバットは釘打ちバットの形と色、質感をした金属バ
ットです。

トレース・スタート

投影・開始はしろう君が使い慣れている品の複製制作。

なので、水晶刀を投影できました。

後、もう少し話以内に藤姉の陰謀?が発覚します。なので楽しみ
を!!

「...94...」

愉快なエミ―道場！！（後書き）

ではさようならで

事件17、やっちゃんいました。
(前書き)

にゃは!。

張り切っています!!

事件17、やっちゃいました♪。

.....

「おい、待てや。」

はい、拒否権は無いです。
マジでどうなってんだよ。
と、思いますがなんかあった？。

「それなら、私の宝具でできるわよ。」

「頼んまーす。」

議題になっている本人は慌てる。
というか、動揺中。

「ちょ、え、おい、俺の拒否権は？。」

虎が変態タイツに笑いかける。

「ないと思うぞ。」

「がお。」

だって、亡霊さんに拒否権はないです。
そうでしょう？。

俺は間違ってない。
抵抗します感が漂ってきた。

「勘弁してくれよ。なあ。」

真紅の槍を出す。

戦闘??。

「すいませんけど、戦わないで!!。」

必死の形相。

どうした。

「耐久試験を終えてないの!?!。」

たしか、こいつの魔術でしたね。

えっ、耐久試験って。

「壊れる」かも?。

「だから、駄目ええええええええええ!!!!。」

「要約するに全滅するかも?ってやつね。」

するとまたの沈黙。

タイツはどうすれば良いんだという微妙な顔。

戦うのが前提の戦争。

「だったらどうすんだ!?!。」

何処かで見覚えがある麗人が後ろからひっそりと来る。

うん、暗殺者の感じがする。

怖い。

いい音が場に響いた。

「わあ、クリーンヒット。死の一撃って奴ですか。」

「手加減はしていませんから、当然です。」

当然ですか。

やっぱり、この人。

「お久しぶりですね。」

帰っていいですか？。

「えみや君、どういう意味かしら？。」

ああ、そういえば、遠坂家ってセカンドオーナーでしたね。もぐりは許さずでしたよね。

その場過ごして遣り過ごしたからね。

「えーと、仕事先でばったり共闘した仲です。」

俺って厄日ですか。

「なるほど、だからあの火の一撃を使えるわけですか。」

納得するセイバーさん。

疑問に思っていたんだね。

「ほお、あなたは何者ですか。」

怖いです。

桜も怖い。

桜のほうを見たく無いです。

「封印指定の執行者ですが。」

そのまんまの事を言うな!!。

ああ、仕事が、お金が。

「契約ラインを切ったわよ。」

ナイス!!。

「じゃあ、誰が契約すんの!?!。」

ジーーーーー!。

視線が痛いです。

「私がしますから、彼女等と話し合いしたらどうですか?。」

え?。

なにそれ?、おいしいの?。

お前もトラブル発生器でしょうがかんべんしろ。

「じゃあ、ちょっとこっちにおいで。」

藤姉の後ろに本物の虎がいる。
怖い。

「はい、先輩も一緒にです。」

影が鞭みたいになつてビュンビュン鳴っている。
黒と赤のちっちゃいのが複数いる。
死んだかも。

「不正バイトだな。」

不正でも無いです。

裏のお仕事です。

お金稼ぎの手段ですからね？。
注意するのは其処ですか。

「一から十まできつちりとお金を払ってもらわよ。」

うん、貯蓄を渡して味方につけよう。

アレは渡さんけどさ。

あは、またじいさんがはっちゃけたよ。

また三途の川を渡り掛けた。
渡し守も武装していて、怖い。

つか、そんな事してもいいのですか？。
ライフルかけーとしか言いようが無い。

『僕が間違った事を教えたからなのか！！。』

あの魔術の特訓のやつですか。

おかげで、深く掘り下げました。

魔力が上がりますし、便利ですよ。

痛いけど、死にそうだけど。

『知りませんから、またの違反ですか！？。』

お疲れ様です。

毎回うちのじいさんがお世話になっています。

おもに俺のせいだけ。

『地獄廻りでもしやがれ！！。』

あ、槍投げた。

こんな渡し守には乗りたくも無い。

まあ、死神さんですよね？。

見方を変えるとき。

『僕にはしろくの心配しかなから大丈夫です！。』

其処じゃないと思うよ。

やっぱ俺のせい。

『胸、張るなああああああああ————！！。』

さーせん。

俺は天井を見た。

壁を見た。

拾い物はきちんと壁にかけてありました。

「いっしょ。」

まあ、寝る！。

事件17、やっちゃいました♪。(後書き)

ブラックリスト入りしています、えみや様。
何処でしょうか？と言っときます。
短編連作を終わらせないとヤバイ。

事件にはいる前の俺にとっての朝の地獄。(前書き)

食事は次、事件18で。
書きたいですよ。

事件にはいる前の俺にとっての朝の地獄。

うん、朝です。

朝日の日差しが素晴らしいです。

日課の強化。

いや、死ぬかもしれない訓練をしたいのですが、他人さんの所でできるか!!。

まあ、探索と言う感じに部屋巡りをする。

「・・・・・・こんにちわー。」

ばたん、良い音が鳴り響いた。

・・・・・怖い人形さんがぶらりとずらりと並んでいた。

腕とか足とかもう、人間にしたらスクラップも良いところだ。
マジで怖い。

もう一度。

・・・・・・・・・。

はい、人形さんの場所が動いてるーーーー!?!。

次だ、次!!。

この家はなに屋敷ですか。

埃が一つも無いし、黒中心な屋敷? 館? のようで。

しかも、薄暗い。

『楽しいよ。』

『おいでおいで。』

『水が滴るぐらいに遊ば。』

俺は念話をする。

(セイバーさん、カモン!!、ココは怖いです!!!!!!!!!!。)

がたつと後ろから音がした。

階段は何処かな？

窓から見てもここは二、三階ですよ。

飛び降りようかな!!。

「あなたは、そんな事に令呪を使うのですか。」

後ろから掴まれ、無理矢理に振り向かせる。

うん、セイバーだ!!。

わーいつて令呪？

「しろっ、こうなれば美味しく頂きましょうか？」

「はい?。」

え、え、押し倒されている??。

なにこれ、美味しいの。

そりゃあセイバーは綺麗よ。

むしろ好感とか持てるよ。

いや、この状況って美味しいのよね。

「何、やっているんですか?。」

桜さん。

あれ、なんだろ怖い。

危機的状况でござんます!!。

「朝ごはんを食べましょうね。先輩。」

俺、死んだかもしれない。

案の定、遠坂さんに怒られる。

「あんたね」

赤いお人に睨まれている、えみやしろうです。

その他遠巻きに睨まれています。

「せっかくの令呪を使うなんてどういう神経してんのよ!!。」

アーチャーが空笑いをして窓の外を見ている。

なんだ。

ランサーは隅っこでダメットさんに問い詰められている。

で、俺はと言うと、両手に華と言う最高の状況でもあります。

「あたしと同じ失敗をするなんて、馬鹿だわ!!。」

「自分の恥を暴露しているのか?。」

黙れと言わんばかりのガント。

一発でもこれは最高の一撃だ。

さらに顎に当たるなんて、理不尽な。

事件18、いろいろ自粛な食事。（前書き）

タイトル変更しようかなっと感じるこの頃。

事件18、いろいろ自粛な食事。

食事は美味しい。

いまや、情報交換の場になっている。

議題出ているのは、

「何にしろ、異常ね。」

「「ですね。」」

俺だ。

だって、ぶっちゃけ、俺が高一の頃に桜と三咲町に遊びに行ったのが原因。

しかも、知り合いの魔眼を隠すために適当なでっち上げの魔術礼装で桜の中に居た蟲を殺したと言う適当極まりな説明をした。

問い詰められましたよ、勿論。

でも、早死にしたいならいいよ。と満点の笑みで言った。

顎がまだ痛い。

後、適当に桜とアレとでバイクを乗り回したことや別件の死徒轢き

逃げの話をしたりで

引かれました。

「その乗り回しや、銃乱射で警戒されたのです。」

議題に上がっているのは俺だけではない。

慎二の事も含まれる。

「あの妖怪にか。」

「はい。」

あのヨボヨボは何考えているか解らん生き物だ。

うん、朝から唐揚げは重い。

欲深いというか、執念の塊というか、どうか逝っている。

俺も執念の塊では、結構な事にもなっているんです。

「お爺様は召喚をするようにと、言われました。」

・・・

うん。

アレは妖怪の駒になっているわけだと思うな。

「ライダーのマスターは私です。」

あ、やっぱり。

非難の声があれこれ出そうで、遠坂は拳を握りこんでいる。
箸がミシミシと鳴いている。

パクパクとあっさり感が出ているがかなりの重いお話だ。
まったく、楽しくない。

「デーム、おかわり。」

「はい。」

のんびりしているな。

真面目に毒抜きされる。

「まさか、お爺様が私に変な物を植え付けているなんて、あの時
ま
で知りませんでした。」

その変なものは、蟲である。

流石に食事中にはその言葉を自粛しているなんて思わなかった。
で、虎は凄い勢いで食べている。

ライオンも当然のようにおかわりをしている。

「おかわり！」

「がお！」

はいつと言う感じにディルムッドさんに渡す。

ぱっぱっと入れる姿に違和感が無い。

無さ過ぎる。

現代に溶け込んでいるとしか思えない。

こんな風景に頭痛を感じる真面目組みは呆れかけ、

ランサーにいたっては今はとりあえず落ち着いている。

うん、俺も執事服見た時は驚いてけどね。

アーチャーは遠くを見ている。

聞き耳はしっかりしているよう。

「色々ありまして、兄さん、自らマスター代行をしないと言い出し
ました。」

（先輩を仕返しがしたかったと思います）」

馬鹿ですねと言わんばかりに食べる桜。

まあ、慎二にも蟲を植え付けられている様子だ。

要するに名誉回復したぞ。

ごめんね、俺が勘違いしたばかりに酷い変換をしまつてごめん。

「それって、脅されたわけか。」

もしそうなら、刑罰を三倍にしないと、と思う俺。
にこやかに怒っています。

「いえ、兄さんの立候補です。」

へえ、以外に勇気あんじゃん。

桜には生きるか死ぬかの争いには参加してほしくない。
にしても、この千切りキャベツはもさもさして、食い辛い。
もっと、自然に形を残したままにした方がまだ食べれるのになあ。

「あのワカメにもそれ位の勇気が合ったんだな、面白くない。」

サラリと面白くないと愚痴るセイバー。

にしても、生地から何から何まで本物の執事服だ。
俺にもそれ位の根性があるのになんだ、この本格派は。
ラインから、サイズはぴったりだ。

メイド服も良い所、いつている。

なんて、なんて言う趣味に生きる魔術師だ。

分かり合えるかもしれない。

でも、虐めているから無理かもなと思う俺がいる。

「まあ、まあ、意外すぎて私にも頭が痛いのよー。」

意外すぎるのは、藤姉も、この殺し合いに参加？している事だ。

藤姉も命の遣り取りとかには敏感だったはずだし、俺的にはなぜに
と思う。

セイバー、アーチャーは何かを知っている。

アーチャーはとにかく、問題はセイバーと藤姉。

何を知っていて、なにを思っているんだ。

「考えると私って天文学的な奇跡よね。」

パクパク食べていく藤姉とセイバー。

唐揚げも好きと言うのも追加だ。

プリンとか、お菓子系も好きなのかもと思う俺が居る。
並みの魔術師が見たら気絶しそうだな。

以外にもサーヴァント組みはご飯を食べている様子。

「どういつ宣伝よ。」

「それは、乙女秘密。」

なんていう、カオス食事会だ。

事件18、いろいろ自粛な食事。（後書き）

解説、間桐とえみや様に関する事件。

- 1、えみや様、蟲に気が付く。桜とお友達になりました。
 - 2、バイク乗り回し。
 - 3、銃乱射。
 - 4、爺さん、警戒。
- 慎二にも自分の蟲を投入。
- 5、殺虫剤事件。
 - 6、蟲の片付け
 - 7、爺さん、三咲町で片割れ死す。

現在、慎二を乗っ取附中。
ついでに、ライダーも未だに従っている。

事件19、どこその御家。（前書き）

誘拐事件は外せないのが決まりと思っている作者。

事件19、どこぞの御家。

・・・。

ココ何処です？。

俺、縛られている。

足とか、手とか、口には無し。

何でこんな所にいるか思い出そう。

確か、家に帰って装備を整えてフルで武装をしたはずだ。

後はコレクションの刀とか、剣とか、妖刀、魔剣を眺めて幸福を感じていた。

それと、ライフルとか色々。

武装コートを着て外を歩き回って・・・・・・・・。。。

歩き回って・・・・・・・・。

「この先はなんだよ！！。」

確実なのは、聖杯戦争の関連だ。

魔術って誘拐にも応用できるんですね！！。

キャス子は違うし、遠坂も違うと思いたいし、蟲妖怪は・・・違うな。

あいつだったら、多分こんな明るい昼には出て来れないはずだ。

俺の推測が合っていればだけど。

まあ、いいか。

リリース
「開放。」

・・・何が悲しくてライフル級のルーン弾を開放せんとならんだ。

高いのに高いのに、珍しく宝石製なのに。
縄は、切れた。

「幼女か。」

消去法で行くとあの幼女だ。
あの餓鬼、殴ってやるわ。
笑いが止まらない。

「こんにちわ。」

アルビノってこういうのを言うのよね。

こいつはどうしようもない。

まったく、その小さな身体にどれほどの魔力を持っているんだ。
油断はしない。

「手荒いお招きで御免なさい。お兄ちゃん。」

手荒いで済みますか。

せめて一言入れてから連れ去れ。

「で、用件はなんだ。」

クスツと笑う。

ふざけんな、俺の幸福の時間を邪魔しやがって。

あの後、美味しいジャンクフードとか食べながら手入れをする予定だったのに。

「切嗣は何処。」

・・・。

「あんた、じいさんの実の娘さんで合っているだよな。」

「そうよ。」

おいおい、どうなっているんだ。
訳が解らん。

「5年前に死んだ。知らなかったのか。」

見る見る顔色が変わる。

どういう、なんだろう、色んな感情が入り混じった顔だ。

「嘘よ。」

面倒臭い。

でも、しかたがないよな。

「だったら、あんたのお父さんの骨を渡そつか?。」

DNA検査でもすれば一発で解るはずだし。
魔術でも、大体は解るだろう。

「嘘よ。」

はあ、埒が明かない。

「じいさんの魔術刻印の写しでもみるか？」

大体は写したんだよ。
紙にね。

アレでも情報があつたりするといいけど。

「あと、実娘さんなら知っていたとは思っていたんだけどなあ。」

だんまりか。

・・・、コレは無いだろ。

「じいさんの体が弱っていた事をさ。」

「嘘吐き、嘘吐き。」

「確か、聖杯戦争は夜からだつたよな。」

じいさんの墓に来るか。

言えばこつちを見る。

まじで、何も知らなかったのか。

はあ、殴れないなあ。

俺って甘過ぎだよ。

一緒に外に出ると、森が広がっていた。

「たしか、あっちだったよな。」

抜けることは出来た。

お寺に向かう。

「ほれ、ここだ。」

お寺の墓。

近いって良いね。

「本当、だったの、ね。」

顔がよく見えないけど、かなりの悲しみがあるように見える。

何を思っ聖杯戦争に参加したのが気になるが、どうしようもない。

「切嗣、どうしてよ。」

はあ、バサカさん。

この子を守っていて欲しいものです。

「じいさんは、よく、ドイツに行っていた。」

薄汚れていたりとかで心配の一つはしたし。

聞き取りづらいけど泣いている様で、どうすれば良いのか解らない。
とりあえずは、毛布の投影……。

はアウトだな。

このコートは武装で重いし、どうしようもない。

「なあ、聞いてもいいか？。」

俺は独り言のように聞きたいことを言う。

もしかしたら、やっぱり、

じいさんの身体を蝕んで、死んで行ったのがこの戦争の影響ならば
止めないと行けない。

俺の日常のためにも是非に。

「10年前の大火災は戦争の性か？。」

考えると、この答えに行き着く。

じいさんが死んだのは5年前。

このイリヤスさんは最低でも5年は生きているということになる。

最近はクローンとかあるしね？。

後は、洗脳教育すれば完成！！ってな訳だ。

そして、極め付けが黒い太陽や外道神父。

少なくとも、外道神父は前回の関係者だと思う。

遠坂とも仲が良いのも、その関連だと思うとしつくりは来る。

始まりの三家は絶対参加の戦争でもあったはずだから、なにやらと
この子も知っている。

「多分ね。」

・・・。

多分か。

それでも十分な成果だ。

「災害を撒き散らすのが願望器のする事かよ。」

これだと、聖杯関連のお家は完全に解って災害を撒き散らしている
と言うことになる。
ヤキ入れに行こう。

「そうよ。」

うーん、今のところは敗者や戦死者、死亡者が居ない。
マスター、サーヴァント共に無事とも言える状況下だ。
はつきり言おう。

「この聖杯戦争は完全に破綻しているぞ。」

「え?。」

今の状況下を話しても大丈夫だ。

聖杯の機能も壊れていると来た。

それに考えれば、全員で押さえつけければ良い。

三騎士はこちら側。

キャスターやアサシンもこちら側。

さらに、悠太のサーヴァントにも協力は出来るはず。

藤姉の底力も恐ろしい。

ライダー・バーサーカのマスター、サーヴァントの意思次第でもある。

「いうと、キャス子組みは戦う意思はない。」

ココが重要でもある。

最弱でも厄介なのは当然だ。

しかも、聖杯はいらないとはつきり言っている。

望みは先生と一緒に暮らす事だ。

安全だね。

「さらに、ランサーはいつの間にか俺たちの陣営の仲間入りしちゃっている。」

キャス子の性でが一番でかい。

にしても、なんで執行者が聖杯戦争にしゃしゃり出ているかが気になるけど・・・。

まあ、依頼なんだな。

「遠坂も入らない感じがある。アチャ男も同じく。」

俺も、そんな物入らん。

何でもかなうとは言っても、誰かを台にしても欲しい物はない。

それに、苦勞に苦勞して、相手を足蹴りにして手に入れるからこそコレクシヨんだ。

リアルに欲しがる相手にどれだけの差を付けるかが大事なんだ。

悔しがるあの顔とかも最高だ。

闇討ちする馬鹿には麻酔銃で撃ち落す。

男だったらある筋の人に売りますけどね。

「俺は入らないし、セイバーもきつと欲しがらない。」

あの黒いセイバーは欲しがるわけが無い。
これは解っている事だ。

「で、こんな状況に、道徳、人として入らなくな？。」

もちろん、人払いや防音の結界は張っています。

事件19、どこぞの御家。（後書き）

誘拐事件は自力解決。

ちなみに、心配のしの字すらされていない、えみや様。

一応は宝石魔術は使えます。

但し、ルーン入りの奴しか使えないのがえみやクオリティ。

クロス!!。夜には奴が出ますので注意をしてね!。池袋(前書き)

うーん、楽しい。

やや過去の話。

クロス！！。夜には奴が出ますので注意をしてね！。池袋

夜。それは、馬鹿に異常な奴も来る事もある。

黒いコートの男が来る事がある。

彼は、モデルガンを街でそれなりに乱射している。
きちんと計算して撃っている悪質な常連者である。

「ふー、良いとこだね。三咲町とは違う意味で楽しそつだな。」

彼は、えみや しろつ。

冬木に住んでいる中学生である。

大型の休み中に来る事がある。

彼は災害と呼ばれる。

「またか、あいつら。」

ふふふふふふふふふと不気味に笑う。

黒いコートには武装がたくさん。

本物も偽者も入っているコート。

実に重い。

目の先には、奴等が暴れている。

「アホかよ。」

ナイフを袖から出す。

投げる。

投げる先は奴等。

こういう裏道は道が狭い。

リフレクトショットの刃物バージョン。

喧嘩の音が止む。

俺とは逆の方角に走ってくる馬鹿と馬鹿。

「俺が逃がすと思ったか。」

簡易強化をする。

走る。

奴等は逃げる。

撃つ。

それなりに乾いた音が響いた。
消音銃で撃った。

「お前等、またんか————!!。」

カチッと、金髪に麻醉銃の強を撃つ。

ヒット。

次に黒髪男。

消音モデルガンで頭を撃つ。
ヒット。

「お前等、また喧嘩したのか。」

ゲっと言う顔が彼を見る。
見上げる。

彼等は、座り込んでいるのだ。

「それに人気の無いところに行くなって言っただよな??。」

彼の後ろには月があり、逆光で顔が見えない。
殺気染みた怒りがあるのは確かだ。
彼等にはヤバイと思っている。

「確かに、言っていたよね、シュウ君。」

シュウとも言おうしろ。

シュウと言っるのは彼の仕事名。

さらにビビットな、赤の中の赤な髪をしている。
ようはカツラだ。

「そうだよ。喧嘩組み。」

顔は笑っているけど、気配は怒りのままだ。

「臨也が悪いんだ。」

金髪は言う。

しろ、シュウの眼が向く。
うっと微かな声。

「また、それか。」

怒りはいまだ、逆に黒い何かが漏れて来る。
消音銃で金髪の足元を撃つ。

もう、ニコニコ、怖いのマックス。

「許して欲しかったら、なんか、ご馳走してね。」

二人は年下のいう事を聞くのでした。

ちなみに、この時のえみや様の頭の中ではどうやってこいつらを追い詰めようか悩んでいた。

いっそうのこと、あいつにBLEETAを提供しようかな。と思っっていたり。

クロス!!。夜には奴が出ますので注意をしてね!。池袋(後書き)

良いと思いませんか？。

完全に作者の自己満足。

事件20、やっちまおう。(前書き)

頑張ろう。

事件20、やっちまおう。

俺の家には色んな仕掛けがある。
いきなりなんだって?。

イリヤさんがいるからだよ。

惨事が酷く、庭は凸凹が酷い。

外の結界もずたぼろだ。

気脈が崩壊しかけている。

家には、万が一の結界を張っていたおかげで半壊は逃れた。
一部は全壊だけだ。

「でも、なぜ、トイレなんだ!?。」

生活に大切な御トイレ様が壊れている。

便器は残っているけどさ。

コレは無いだろ。

ある意味奇跡だな。

便器の周りが全壊で水道管や便器が無事と言うのは奇跡だ。
部分破壊と言うものだ。

「えっと、どうかしたの?。」

「トイレが壊れたんだぞ。」

青空教室ならぬ青空・・・言いたくない、考えたくない。
修理費を出すなんて考えたくもない。

お金が消えていくのが俺の運命フエイトなのか。

「酷く不便だ。」

ああ、と言う感じに納得するイリヤスさん。

お前は金持ちか、金持ちなら呪いの気持ちを送るぞ。

「ご苦労様。」

愚痴ぐらいなら言っても良いよね。
いいよな。

「あのさあ、イリヤス。」

「イリヤって呼んでいいわよ。その呼び方、気持ち悪い。」

あつそ。

どうでもいいですわ。

「成金の金色野郎に襲われたんだわ。

武器を後ろの空間から吐き出すわ、全部素晴らしい武器だし
羨ましい、欲しい欲しい、コレクションに加えたい。

大体武器と言うのは匠によって作られた努力と神秘、概念の塊だ。

美しい。斬ると言う一点、殺すと言う一点に特化された姿は武器を
越え芸術と言うのは

まさにあの金色が出した武器の事を言うと思うんだ。

イリヤ、どうかしたのか。」

肩を震わせ、小声で繰り返し何かを言っている。

あれ、こんな子だったっけ。

俺が前、みんなにイリヤの説明案内を痛い子説明に変換説明したの
がいけなかったか。

「私の知らないサーヴァンは居たらいけないだから。」

何この子、さつきから繰り返す同じことを言ってるやがる。
怖い子、痛い子なのね。

「御免なさい、ちょっと動転しちゃった。」

「ちょっと所でも無いぜ、レディ。」

ああ、たしか、俺はこいつに餌をやりに来たんだった。

「ネコアルク、今、猫缶を開けるからな。」

「うむ、勿論、宜しくニヤ。」

ん？、どうかしたのか。

イリヤがネコアルクを見て怯えているけど。

キコキコという、缶詰特有の音が部屋に広がる。

聖杯戦争になってからはマジで酷い事ばかり。

一般人を襲う馬鹿とかいるし、俺の日常を守るには戦争を越えない
といけない。

あえて、言おう。

「面倒だ。」

缶詰も勿論のように。

それでも、ネコアルクを雇っているからな。

当然の報酬だ。

あの割烹着、こいつを懐柔すればそこそこ便利なのになぜに毛嫌いするのやら。

「できた。」

専用の皿に入れて、猫餌を解す。

このぐらいのサービスは当たり前よ。

「来ないでーーーーー!!。」

「ンニヤ、ニヤ、我等キャットを嫌うなんて

お月様が許そうとこのネコアルク様が許さないのが決まりなのニヤ!!。」

はあ、こいつは、あほか。

「悪い子は居ねえかあああああああ!!。」

「先ずは、止める。」

BB弾乱射。

一気に距離を詰めて足蹴り。

空に飛ばしてから、空中コンボ。

「大丈夫か。」

「う、うん。」

器はきちんと縁側に置いてある。

さらに、そこにネコアルクが這いずっている。

こいつは猫缶のためだけ頑張っているから、当然か。

「ねえ、その同盟に私にも参加させて。」

いいねえ、いいねえ。

さて、たのしい遊戯の始まりです。

「まあ、そんな感じにAさん^{アルツハイマー}がここに居るわけだ。」

「アインツベルンよ。」

流石です。

ただいま、悠太君の家で会議をしている。

広いお部屋の長い大きい丸机で会議をしている。

「ルピが可笑しくない?。」

気のせいです。

「そんな感じに会議をするのですが、ここで大同盟を組みたいと思
います。」

特に金色に対してと個人的に慎二奪還?。

あのアホ老人に色々されたくないしな。

「目的は偏屈意味解らん爺ぶっ殺しと金色張っ倒しの同盟です。」

商品は、アレしかない。

はあ神秘の安売りバーゲンだな。

「商品は・・・、葛木夫人は魔力補給源。

ランサー組には、あとで希望を出してくれ。ある程度は叶えるようにはするから。」

あとは、破綻していると言う解説を皆さんにイリヤがしてくれれば良い。

本人も両方の自覚はしているみたいだし、頑張ってね。
俺の日常のために!。

「いいわよ。嘘をついたら、解っているわよね?。」

「もっちです。」

さて、あとは、セイバーに餌付けでもするか。
ハンバーガーを作るか!!。

事件20、やっちまおう。(後書き)

えみや様の装備。

取りに行ったので装備が標準に。

と言うか、魔術師の装備ではない気がする。

武装コート、隠し武器倉庫。

銃多数、アップル多数。

ルーン弾、宝石弾、銀弾など。

ナイフ、殺し用や死徒用。

水晶刀、斬撃や回避用。

あと少しで藤姉のもくてきが書けそう。

何処までのんびりなんだ。

はやく、第二シリーズをしたい。

マジ狩る、第五話の再誕せしえみや様。

ここはルビーちゃんパラダイスの天国。

そんな天国の中、彼は倒れていました。

タイガー奥義を受けたのですから、ぶっ飛んだでしょう。

あのロケットのようにキラリーンと。

「あら、彷徨える子羊が舞ってきましたわ。」

どうしようと言わんばかりに悩むこの人、紙袋さん。

「誰だ。」

起き上がり、だらけた顔で紙袋さんことマジカルカレンを見上げる。
どうでも良いような顔ですが。

「そのような無礼は神がお許しになります。」

「ちょ、手にモーニングスターは無いでしょう!!。」

焦るえみや様、当然です。鈍器ですから。

言葉と動作に0と1の差が在りますが気にしてはいけません。

そんな様子を笑うカレンさん。

「ああ疲れる、犯罪国家日本だから監禁拉致も普通の事なのか!。」

そう言いつつも、犯罪行為をしているえみや様。

バイク改造とか銃刀違反の常連者だろうが!!と、作者は突っ込みます。

「あら、ここは日本じゃないから監禁とか拉致とかしても良いのよ。」

「そうなのか。」

そこで考えました。

こんな痛い人は消毒がしたいと思う。

夢だからと言う、ステキな合言葉があります。
だから、なので

「銃乱射とか、バイクで轢いてもいいんだよな。」

ニタアと笑うえみや様。

その様子にまたも微笑むマジカルカレン。

「はい、勿論です。」

「潰しあいましょう」か。」

モーニングスターと銃とが乱舞する。

時折銃を鈍器に使っている姿はなれた感がある。
マジで光速戦闘のようです。

バイクで轢こうとしても避けられるわけですが、ここ、
ルビーちゃん天国は狭いのです。

作者も、あの柄の部分で袋叩きにあっています。
狭いから逃げるのにクルクル逃げ回るわけですよ。

「逃げないで下さい。」

「無理です。」

さて、気付いていますか？。
何かを未だに使っていないのです。

「んじゃ、落ちろ。」

ギミック使用。
さらにバック。

出来上がるのは、

「むう、三下は三下です。」

と言って、ぱたっと、倒れるカレンさん。
バック轢き逃げをしたわけです。

「生きてはいるよな。」

ふーと言ってバイクから降りる。
降りるとバイクは消えた。

「む？。」

「あつはー！ー！お久しぶりです！、どうですか！。」

「あ、酷い、怖い怖い。」

「何を逃げてんだ。」

銃乱射の足元攻撃。

クネクネ避けるルビーちゃん。

「お前な、俺をどうしたいんだよ。」

悪人顔全開のえみや様。

そんな形相に驚くルビーちゃん。

「いえいえ、あなたを外に放り出したらどうなるのかなあと思いま
して」

「「あは」」

がしつと柄を掴むえみや様、マジ切れを起こしています。

「色々と、ふざけんなよ。」

「えへ。」

フルフルと怒りを込めるえみや様。

張り付いた笑顔と青筋が浮かんでおります。

背後オーラがドス黒く、ヘドロのように粘つと感がある。

今の状態が怒りが頂点に来た様子。

「覚悟を決める。この墮杖。」

えみや様の両手が輝く。

えみややしろうのエクスカリバーの代名詞の秘必殺奥義が炸裂する。

マジで続く、というか、最終話はネタバレなので代名詞を作ってからの作成になる!!。
お楽しみに!!

マジ狩る、第五話の再誕せしえみや様。（後書き）

以上ッス。

事件21、黒と混沌のち、白で結果。(前書き)

さて、後一日で。の予定。

事件21、黒と混沌のち、白で結果。

ふう、ココまですれば後は何とかなりそうだ。

後と言うと、あの神父に事情でも聞きにいかうかな？。

だって、あそこは『元』孤児院だからな。

「済まないな。」

情報屋を開設している同世代のメールを見て呟いてしまっ。

「それと、有難う。」

おかげで、討つべき仇が解ったからな。

さて、どうする。

この情報だけでもかなりの推測が出来る。

あれが世話でもする性格ではない。

心も身体も捻じ曲がっている。

矛盾そのものな生き物だ。

否、生ゴミそのものかもしれない。

「どうしよっかな。」

歳の差、実力の差、経験の差。

どれを言っても俺より遥か上の存在。

銃なんか弾かれそうだ。

バースト
爆発弾を使うのも気に引ける。

あれって、宝石製のルーン弾なのに。

まあ、切り札は切るためにあるのですが、それはそれ。

「金欠だ。」

ああ、卒業したら何処かに所属でもしようかな？？。
お金が欲しい。

後、優遇が良い所がいい。

でも、自由が一番。

「でも、その後の戦力でセイバーは欲しいよな。」

個人的にもかなり好ましい。

性格とか、あのもきゅもきゅとか、かなりいい。

色んな服とか着させたいしな。

く、ロリータ系も似合うかも、でも白は似合わない。

あの陶器肌には白は似合わない。

おっと、脱線した。

「ふう、問題だらけだ。」

でも、まあ、思いつきりも無いと勝てないからな。

メールを削除して、パソコンを閉じる。

一応はまた、一時帰宅をしている。

調べ物は、自宅が一番と言う。

後は、魔術回路を鍛えますか。

毎回ながら痛い。

真面目に腹が抉れるような痛み。

何度も死んでいる痛み。

なぜか、生きている『俺』。

死ね死ねシネ●ね死●死ね死ねしね死ね死ねシネ。

毎回の事。

昔を思い出せば、襲われる俺の根本、0の所。

俺が生まれたその日の声を思い出す。

毎回毎回、しつこいなあ!!。

クロス。

はい??。

「つつ。」

危ない。

アレの反応も酷いものだ。

・・・。コレってやっぱりさ、

「聖杯戦争と関係あるだな。」

勘弁。

面倒ごととはさっさと終わらせるに間違い無い。

さて、ハンバーガーのタネを熟成させよ。

悠太の家に行くと会議は纏まったらしい。

いや、いいね。

俺はこうやって調べものについて逃げれるってのは。
まあ、般若が居る訳ですが、それはそれ。

「えみやく〜ん。」

あれ、何そのニュアンスというか、発音。
なにか、いやです。

「えみやせ・ん・ぱ・い。」

ああ、怖いですね。

外野は平和そうだ。

なんと言つか、アーチャーが軟化している。
お茶とかお菓子とか持ってきている！？。
なにあの主夫。

欲しい！！！！！！。

「どういう情報を持ってきたのかしら？。」

有無言わせぬ気迫。

そして、可笑しい事を言ったら解ってんのかしらと言つ言葉が感じる。

「はい、これ。」

写しの紙を遠坂に渡す。
ひったくるように奪う。

まあ、内容はかなりです。

見る見るのうちに顔色が変わる。

……。同じ推測になったかもしれない。

「セカンドオーナーとして、見過ごせない事態ね。」

推測が当たれば、ね。

と言葉を濁す。

やっぱりですか。

読み終わると文字が消える。

驚きの顔。

「それはな、消えるんだ。」

まあ、科学的にもありえる素材で出来ているので気にするな。

「あんた、どういう魔術なのよ!!。」

「あの子。それは科学の域だよ。」

魔術も、科学で再現できなくも無いし、どっちもどっちでしょうが。

「くっ。」

お前、最近の魔術師は科学も嗜むのが常識だぞ。
と言いたいが、我慢。

一瞬、魔術刻印が光った気がする。

来たのは、切れの良い鳩尾の一撃でした。

「最近の魔術師は武術も嗜むのが常識よ。」

それ、俺のパクリだ。

悶絶します。

喋れねえ。

「遠坂先輩、何を私の先輩にしたんです?。」

あれ、蟲?。

.....

台所の悪魔!!。

「みぎゃあ、ディムさん、背負って!!」

俺だつて嫌だよ。

ああ、高台に逃げていますよ!!。

椅子に乗るセイバー!

直ぐに机に乗る人等。

ダメットさんは泡を吹いている。

「禁術だ大魔術だ!!。」

つか、キャス子さん。

何とかしてくれ!!。

入る方角をみるが、ああ、気絶している。

水が浸水する如くにみっちりで恐ろしい。

「ちょ、桜!!、何のつもり。」

「ふふふふ、誤まるまでは、許しませんし、引きません。」

うわ、ヤンデレ屋。

逃げたいな。

でも、惚れた弱みは凄いです。

いいよな、毎朝のおいしい食事を用意する奥様。
.....

こんな状況でも、笑える。

にやける。

「誤まるから、ごめんってば!!。」

言っと、帰って行く台所の悪魔。

「ふーん、何にしる野蛮ね。」

バーサーカの肩に乗っているイリヤ。
確かに、確かにそうだ。

「あのさ、結果は??。」

「満場一致よ。大聖杯を破壊しましょう。」

破壊だけならいつでも出来そうなの。

場所って何処なの。

解れば、普通人と真祖の差別的な火力で消毒してやんよ。
マジで。

事件21、黒と混沌のち、白で結果。（後書き）

後、もう少しです。
になるはずです。

事件22、パワフルに襲撃前。（前書き）

ふふふふふふ、やってきました、藤姉の伏線!!。
真面目に後もう少し。

事件22、パワフルに襲撃前。

へえ、色々のことをばらした様子の聖杯戦争。
そんなこんなでドタバタの夕方。

「はい、まずは三班にわけます。」

大聖杯襲撃隊。

金色及び不審者襲撃隊。

慎二というか、妖怪爺さん探索及び抹殺隊。
の3つに分けられます。

というか、言う前から決まっているのですが。

「と、言う訳で、これで。」

真つ青の悠太くん。

驚きの藤姉。

「これで、行くのか??。」

うーんと、紙を見て、悩む。

突っ込み所が無いらしい。

あつたら、説得するしかないけどさ。

「色々、問題ありニヤか。」

ついでにネコアルク連れてきた。

最悪でもこいつを盾に使えるからが理由だ。
まったく、便利なやつ。

これは俺の独断の判断だ。
もつとも、失敗したときのリスクが高い。

「確かに、適正だけはうまくいつているわ。」

だけか。

確かにね、俺も解つては、いる。

「うまく行かんと、商品が手に入らんぞ。」

ああ、貯蓄を材料にまわしているこの空しさ、悲しみを理解できるか？。

材料があればな、作れるんだよ！！。

まあね、完成品にちよっと手を加えればいいのですが。

「そうだったわね。」

火力が強いのが大聖杯に、小細工というか意外性を金色に当てる。
妖怪爺さん探索は大聖杯側。
その紙には俺の名前はない。

「先輩の名前がないですけど、どうするんですか？。」

「ちよつとは聞きに行くだけだよ。」

手にはサブマシンガン。

みなさんは、なぜに引くんだ。

「ちょっと、お願いにあがるだけだよ。」

ほんのちよこつとね？。

。。。。

「衛宮、銃刀法違反だ。」

「緊急ですから、勘弁」

沈黙しか流れませんでした。
なぜに。

「これでうまく行くのかしら？。」

はあつと溜息をする遠坂凜。

遠坂凜がこの隊、大聖杯破壊組みに所属。

そう、アーチャーが大聖杯組みに所属したのだ。

「うまく行くしかないだろうが。」

はあつとまたもや溜息。

唯一ハイテンションなのは、

「楽しみよねー！！。」

「がおがお。」

・・・。

赤主従はこの二人を見てまた溜息。
なぜか、ちゃっかりつと参加している。

「なんでさ。」

こつも、言いたくなる状況下。
どうしようもないと言つ一点張り。

「こんなおふざけで何とかなるとでもいうのかしら。」

愚痴をこぼす、魔女。

当然のように場の空気が明るく、観光に行くかのようである。

「まあまあ、私たちには私たちの目的があるのよ。」

気にしない気にしないと、空気が言っている。
しかし、目が笑っていない。

顔には笑顔満開であるが、眼までが笑っていない。
覚悟は藤村大河にもある。
目的もあるのだ。

「ふーん、私たちね?。」

意味深なのだろう。
何を求めているのかは、解らない。

「そつよ。」

顔は未だに笑顔。

しかし、眼光が増す。

その迫力には武器を手にしたくなる位だ。

「そうでしょう。」

まるで確認でもする様に二度も言う。

笑いが空に舞う。

不気味だ。

衛宮士郎とも違う不気味さ。

「今、私たちは頑張るしかないのよ?。」

笑顔は笑顔ではないように見える。

笑顔を纏っただけの仮面。

この中でも歪なものだ。

性格が、心が、剣が、日本離れ、平和離れた実力。

マスターの中ではきっと、上位に入る体力と剣の使い手だ。

「そうね。わたしも賛成だわ。」

目の前には柳洞寺が見える。

時間は夕方から夜に変わる間の時間だ。

黒い影が遮る。

「なんのようでしょうか。」

黒い影。

アサシンだ。

「やっぱり、こうなっている訳ね!!。」

ちっと言う舌打ちをし、魔術を展開する。
異常な数攻めで抑えられるわけだが……。

アサシンの中のアサシン。

正式なアサシンが彼だ。

だが、イレギュラーだったのだろう。

彼ではなく、彼女だ。

私は心の中で思う。

言う。

さあ、私たちの物語はここからが本番だ。

私たちはここに居る。

努力も力もここにある。

いざ、再び戦場に戻ろう。

事件22、パワフルに襲撃前（後書き）

藤姉のしゃばりを出せたかな。
まずは、この二組から始めます。

事件23、パワフルに収拾（前書き）

藤姉の願い。

という、副題です。

事件23、パワフルに収拾

アサシンと見慣れた紫のサーヴァント。

「ライダー。」

本来なら桜ちゃんのサーヴァント。

脅されたか何か解らないけど、まあそこはまだまだ解る位置だ。

「桜。すみません。」

常識を考えれば、

サーヴァント2人分を維持する魔力を持っているのかと言う疑問だ。

あの爺ちゃんの体の維持も魔力で補っているはず。

「かつかか、衛宮の坊主は何処じゃ。」

あー、この人って恨みの一つは持っているわよね。
忘れてた。

「あの諸悪の根源め!!」

この人も被害者ってわけね。

どうでもいいとして

「私の剣で何とかなるかしらね。」

魔力の体なら何とかなるけど、あの慎二君の体に籠っているからねえ。

どうしようもない。

なんというか、同情はしてあげれるわ。

「魔術師殿、どういたしますか。」

あの子ってボンキュボンだね。
趣味を疑うわ。

「殺せ、殺すのじゃ、小聖杯は殺すな!!。」

あはー、いい悪役ですこと。

まじで死ぬ公害そのものだぞお前。
つかさ、イリヤちゃんに手を出すなよ。

「はい。」

「御意。」

そんな事で何とかなるとでも?。
しろつ君の策略には酷いものがあるのよ。

「破戒すべき全^{ルブルレイカー}ての符。」

キヤス子さん最高っす。
あれって宝具ですよね?。

「こつもあつさり。」

「おいおい、どうしようもなく同情するぜ。」

赤蒼コンビにいわれても実感がでない。
確かにね。

真面目にそうだわ。

だってね、あは、考えるとマジで怖い。
魔術に関するものの破壊ができる。

しかも、転移魔術さえも使える。

アサシン並みの奇襲。

乱戦となればその価値は高い。

大勢となれば、マスターを狙えばいい。
しかも、気付きにくい。

「じゃあ、進もうよ。」

あと、もう少しで目的が悲願が叶う。

中は淀んでいる。

濁っている。

素晴らしい位の大聖杯。

根元に繋がるだけに、呼ばれた生贄の羊たち。

座とは、登録されたサーヴァント、英霊が居る場所。

「以外に広いわね。」

座は、星の数ほどある。

平行世界の数だけ座も英霊も居る。

だから、アクセスできるのは根元に近いこの大聖杯。

「虎聖杯よ。」

ある意味簡単だ。

皆の願いを叶えろという、願いさえも叶える虎聖杯。
だから、私はした。

私の願いを叶えて、という願い。

まずは叶えるだけの魔力と実力が無かった。

実力は継承式にした。

魔力も継承式にした。

そして、記録を伝え続いた。

「苦労したがお。」

まず、1人目の私は絶望した。

エミヤ君が死んだ。

そして、世界と交渉したと言う事を知った。

何とかしようと考えても無駄に等しかった。

根元を目指すわけもない、魔術を覚えるだけの素質も無い。

「エミヤの座を書き換える。」

どうしようもない。

虎聖杯にはたくさんの私の思い、後悔、絶望が詰まっている。

そして、獅子王を維持する魔力も虎聖杯からだ。

「何をしてるの?。」

イリヤちゃんに言われようとも私は今は答えない。

そう、叶える力は虎聖杯のほうが上。

形の無い制限の無い願いを形にできる。

ならば、明確な形をもつて魔力を使えばいい。

3つの願いを差し引いた魔力で。

今までの私が試したときよりも倍以上の魔力がある。
なら、可能のはずだ。

「この魔力は・・・、藤村先生!?。」

だから、簡単だ。

大丈夫。

「どういう事だ。」

また、また、また、継承すればいい。

光あれ、希望あれ。

エミヤシロウに救いあれ。

「また、頑張るがお!!。」

獅子王が消えた。

叶ったんだ。

私たちの願いの一つ目が叶った。

「ありがとね。」

さて、後はえみや君よ。

この場は何とかなるから。

「説明を求めようか。」

さて、エミヤ君に頼まれたわけだし、

先生は頑張るよ!!。

さて、虎聖杯は消えたし、後は大丈夫よね。

事件23、パワフルに収拾（後書き）

むがむが、初心者ですがまだまだよろしくです。
頭が痛いかもしれない。

事件24、世界の担い手。（前書き）

さあてと、いきますか。

お腹がすいてハイテンション??だよ。
無理やり感じが多いのはきにしない。

事件24、世界の担い手。

なんで、こうなったか知らない。
なぜと言っ言葉は要らない。
結果はこれだし・・・。

「デйм、お願いね?。」

なんでこうなったんだ!!。

「はい。」

見慣れた執事服から軽鎧。

というか、全身タイツもどき。
うん、体格がいいよね。
いいよな!!。

「はあ、なぜにこうなった。」

がんばるしかない。

「ほお、面白い魔術書グリモアだな。」

こいつを釣るのに本書の封印を解くなんてめっちゃめっちゃだ。
あの、赤銅の外道め。

おれの書、おれの魔術の真髄を見抜きやがって。

「我オレに捧げるのか?。」

「ありえないし、黙って消えろ！」

おれの魔術は、特殊な魔術。
おれのすべてと言える作品。
おいそれと渡すか！？。

「デイルム、行ってくれ！！。」

ゲート、接続。
開門準備、開始。

「御意。」

剣が降る。
死の雨だよな。
さて、集中集中。

「世界よ広がれ、おれの名の下に。」

ただの飾りに等しい呪文。
想像を練るのには言葉が一番。

「来たれ、我が作品たち。」

作品。
誰もが持っている。
妄想、想像、創作。
形にするまでが苦勞をした。

膨大な魔力を外にも体にも廻り出す。
この魔力の運営ができないといけない。
腕の皮が裂けても止まない。
血が滴っても終わらない。
巡る回る。

「よくある、最強とまでには行かないけどさ。」

おれは、俺は、戦う。

「いろんな記憶触媒をコレに費やしたんだぜ。」

おれは子供だ。

大きくなるまで時間がかかる。

一年、二年も待てないのがおれだ。

ならば、被ればいい。

大人の体を被ればいい。

「作者を軽く見るなよ!!。」

召喚、我が作品の分霊たち。

兵も居る。王が居る。騎士が居る。

精霊もどきが居る。

戦うのに広い所が一番だ。

俺は、おれを見る。

パソコンの電源を入れる。

ルーズリーフのファイルが入った鞆や、リュックを下ろす。

おれの頭も痛み出す。

本書専用の記憶媒体に費やしている。

すべて、すべて、記憶の塊。

膨大なデータを捌くのがおれの仕事。

存在するのに必要な魔力を処理するのもおれ。

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。

「なんだ、これは。」

持つて、何分だ。

おれの脳が逝かれるまでの時間は？。
痛い。

「デイルムツド・オディナ、急ぎなさい。」

「解っています。」

おれは見守りしかない。

運営していくしかない。

おれの魔術は書の世界を運営するだけの魔術。

固有結界に近いかもしれない、魔術。

「姫様もお急ぎを！！。」

紛い物と勝手に言え。

おれは、おれの作品は意地でも引かない。

おれがそうであるように、あいつらもそうだ。

「紡げ、紡げ。」

コレが本命。

また、痛くなる。

コレは、セカイの強制力力。

「望む、一撃八白き姫の怒り。」

皆が頑張っているのに、おれだけが見守ルなんて、まっぴらコメン。
ルルコは怒るナ。

「金色ヲ排除セヨ。」

届け。

大量の兵が死に行く。

我が主のためにと、盾となり剣となる。

力の差は歴然としている。

気が付けば少年の隣に立っていたはずの人形は崩れた。
いつからだ？。

死ぬ事なんて恐れはしない。

死んだ記憶は世界^{本書}に戻らない。

一般兵^{モヲ}たちは、だ。

「ここまで粘るか。」

力の差は歴然。

像と大量の蟻の様なもの。

無理にもほどがある。

それでも、牙を剥く。

己の存在価値は主の命令にしか生み出せないのだから。

「褒美にエアを出してやろう。」

少しの価値は、見出せたのだろうか？。
解らない。

それでも向かう戦士たち。

「^{エヌマ}天地乖離す」

気付かないだろうか？

金色の王は、出すのに遅すぎた。

世界には守護者が居る。

ガイア、アラヤなどの守護者が居る。

どんな世界にも居る。とされている。

少年は自身の持ちうる最高の切り札をきったのだ。

白い、影。

アサシンの如くの早さ。

主命、世界の担い手の命により、命を狩った。

標的は死に、分霊たちは去った。

「主!!。」

終わったのだろうか？。

終わったのか？。

痛い、体が、腕が。

やはり、ここまでの行使はきつすぎたのか？。

「デイ、ム。」

世界の担い手。

恐ろしく、燃費が悪い魔術。

おれは、まだまだ、恥ずかしい。

「大丈夫じゃないでね。」

世界の担い手。

金属も宝石も手に入れれる。

世界のすべての金属を手にできる。

世界の紛い物。

この世界を模写した姿。

この事実におれはある物を作った。

デイルムツド・オディナの召喚の触媒物になった、翡翠のような剣。

「まあ、う、ん。」

・・・

こいつの愚痴の一つや二つは覚悟しないといけない。

なんか、保護者のような感じに育っている。

流々子はという風に物事を教えたんだ？。

「では、御家に帰りましょう。」

本書に簡易封印を施し、おれは、目を瞑る。

瞼が重いから、意識を失ってもいいでしょう。

「さて、罰は、一ヶ月、いや、一週間は健康な生活がいいですかね？
娯楽は、お話と訓練ですね。」

にんまりと、笑う、騎士がここに居ましたとさ。

事件24、世界の担い手。
(後書き)

戦闘って書くのは難しい。
本当に、難しい。

事件25、外道は笑う。(前書き)

V
S
V
S。

うにゃ。

事件25、外道は笑う。

暗い、暗い。

呻き声がする。

苦しいと言っ声がする。

死臭がする。

「はあ、やっぱりか。」

最低だな、オイ。

「また、会ったな。」

えみやしろっ、君の噂はいろんなところで聞く。」

こいつが犯人か。

睨むものの怯みもしない。

当然か。

「で、御用はなんだ。元代行者。」

手には黒鍵を手に行っている黒神父。

俺は、手には折れた俺の剣。

腰には水晶刀。

指は、ルビーの指輪、触媒物。

「くく、其処までに殺気を出さなくても良いと思っぞ。」

へえ、よく言っな、お前の口からそんなことを言っなんてぞ。

「さて、本音を言うならば、さつさと大聖杯の所に来たいのだ。」

ははははははっは。

と、お互いに笑う。

穏やかな、話し合いのようですが。

「だが、これでは行きたいのに行けん。」

「そうですよー。そうじゃないですか。」

もちろん。

当然の事実。

にこやかに話が進んでいるように見えるか、あ？。

「頭を潰せばいいとは、思ってもいない、だが」

「君のワンマン劇を見るのも苦しくてね。
いやいや、楽しいものだ。」

ほお、いうな。

このおっさん。

「あー、じゃあ、いいですね。罪の数を数えろ。」

俺の好き勝手に生きる。

そして、そしてだ。

夢の印税生活のようならだらした生活を送るのだ！。
そして、趣味の服作成で通信販売を行うんだ。

あとは、魔術でも売ろうかな？？。

最終手段だけど。

まあ、何するより、

「あんたの事は、始めっから嫌いだ。」

「そうだな、私もそうだな。」

「「死ね。」よ。」

遊んであげますかね？。

心の余裕はいつまでも会ったほうがいいのよ。
そして、太く、短く楽しく生きるんだ！！。

というか、避ける事しか出来ねえ。

「攻撃したまえ、余裕はあるだろう。」

いえ、無いです。

代行者は嫌い中の嫌いですとも。

「ええ？、あつという間に死にたいのですの？。」

怪異なお顔になる。

ははん、それなら俺が何者かはしらんのか。

知らんのだな。

「ほう、どういう意味かね?。」

「こういう意味!。」

大量の折れた剣をコートから撒き散らす。
ガシャンガシャンと、金属音。
軽くなっていく。

「追撃プログラム、攻めのツルギ!!。」

折れた剣は自動的に捕捉し斬りにかかる。
さてと、行きますか。

「この身は夢見の剣で出来ている。」

材質は宝石。

概念、第二魔法。

膨大な情報で脳が体が千切れそうだ。

大丈夫、始めと比べれば、ずっと、痛くもない!!。

「完成です。では」

虹の魔力が織り成す。

俺には理解はできた。

それはそれはどうしようもない位の馬鹿な事。

それでも、それでも、努力は報われると思いたい。
じゃないと、俺の証明が意味が無い。

「Paradigm Cylinder、溶かせ、虹の斬撃!!。」

使いやすいように長い剣のように仕上げた宝石剣。

それは、扱いやすくするための工夫。

しっているか、これには俺の稼いだカネを注いでいるんだぞ!!!

!!。

にして、

「オーバーキル・・・だな。」

いてて、これは痛い過ぎる。

帰る。

俺は、平行世界で唯一かもしれない魔法使いえみやしろっ。

天文学的可能性な俺。

どこかで、こんな俺は存在しているかもしれない。

居ないかも知れない。

でも、それでも、俺は俺だ。

ベースは衛宮士郎だから、お人好しだしさ。

だから、こいつが嫌い。

いや、生理的にも無理。

令呪を消費する。

「なんのようだ。」

平凡顔なセイバー。

どこその、俺が殺したと思う黒い暴君。

「ほお、派手に決まったのか。」

「運んで、くれ。」

俺の意識は・・・沈んだ。

商品の改造は済んでいるし、無問題。

事件25、外道は笑う。（後書き）

なんだかんだで面倒見がいいえみや様なでした。

この人はエミヤシロウよりも死に掛けています。

倍以上です。

後日談連載で行きます。

すいません、マジで、途中でギャグ風味が飛んだ!!。

楽しい楽しい新、生活（前書き）

新婚さん。です。

楽しい楽しい新、生活。

戦いは終わり、後片付けも済み、なんとかなったような今日この頃。それでも、別の戦いは開催されている。

「キャスターさん、これはわたしが買うのですが。」

「なによ。コレは私のよ。」

戦いの火蓋は、スーパーに移っているのである!!。にこにこ、主婦の皆さんは困ってる様子。

争っているのは魚売り場。

手には鰻。

鰻、美味しいですね。

あの、とろつと感とか!!。

「どうでもいいじゃないですか!!、他を当たれ。」

さらつと、暴言を吐く桜さん。

さすが虫使い。

嫌がらせに虫でも使うのか!

ありえないな。

「あら、それはこっちのせりふよ。」

彼女らはなんと、新婚さんなのです!!。

戦いの後はお楽しみの告白タイム、
そしてそして……!!という感じです。
桜さんの方は結婚前提の同居生活を送っています。
高校生なのに美味しい、美味しい展開ですね!。
そうですね!!。

「じゃ、帰りますね。」

さらっと、引いた桜さん。
それではと、見ると、無い。
鰻が無い。

「ナイスです、セイバーさん。」

さらには結婚予定その……一人のセイバー。
楽しげに笑っている。

「当然だ。」

同盟を組んでいらっしゃる買い物仲間。
もちろん、夫のサポートもしますとも。

「やれやれ、恐ろしいものです。」

そう言うては、

お一人様三つ限定のティッシュとココアパウダー、牛乳を購入している執事もいます。

後ろにはメイドさんもいますともね。

「では、一回は家に帰り、今度は文房具です。」

「はい。」

板についているなあ。

こっちも。

楽しい楽しい新、生活。（後書き）

そんな感じにゆるく後日談連載。
書いてて楽しいのですが。

マジ狩る。最終話の最強はこの・・・。（前書き）

さて、さて、行きます。

マジ狩る。最終話の最強はこの・・・。

「ではでは、逝きますよー!!」。

其処に出てきたのは痛い凜。

それを見て、えみや様は感動した。

「すげえ、極彩色の極みじゃないか!?!」。

しかも、猫耳。

同情よりも驚きがあるのがえみや様。

「行くわよ、ルビーちゃん!!」。

「はいです。」

魔力と剣のぶつかり合い

「この身は夢見の剣で出来ている。」

この一振りの折れた剣。

が宝石剣に変わる。

「大きく振り被って、イケーーーー!!」。

というか、野球!?!。

打ち合いは撃ち合いだけど、だけど変!!!。

魔法少女対普通風の男。

的な展開。

「く、やるわね!。」

「おうともさ。俺はただ一人!!。」

あ、突っ込まないんだ。

テンション高くて作者は頭が痛いです。

何かを取り出す痛い人。

「ふふ、もういいわね?。」

大型銃のようなおもちゃな武器が出てきた!。

おおっと、テンションが上がるえみや様。

しかし、空気を潰すのも彼なのです!!。

「てかさ、お前は封印処理より、破損処理した方が良くない?。」

「はい?。」

ルビーちゃんと思う。

なぜに、自分が封印していたのかを知っているか。

そして、ルビーちゃんは気付く。

「ななななな、あなたは私に会った事がありますね!?。」

冗談じゃない!と言わんばかりに逃げ足になるルビーちゃん。
急に思い出したのね。

会った場所が場所だけに慌てる。

てか、気付け。

「駄目だ。逃げちゃあ、駄目だ。」

投げた剣は鉄の縄になって拘束。
そして、唱えだす。

この体は夢見の剣で出来ている。

頭は夢が詰まり 心は空想。

描く心はキャンバスように、あらゆる色に広がっている。

担い手はここに在り、夜明けの丘で『何か』を鍛える。

我が運命は万華鏡のように替わり行く。

この身は自分で出来ていた。

「は、はい！！固有結界ですか！？。」

剣は一応は刺さっている。

しかし、夜明けのような明るさと緑の芝生の大地。

木は一本も生えては居ない。

大地に横たわって居るのも剣。

今、立っている大地には何も無い。

芝生も剣もなにもない、荒地。

まるで、戦う相手には情けなしと、言っている様。

「さてと、負けろ。」

その笑顔は輝かしい。

「バーカ。」

その顔は笑顔で銃を握られていたという。

「夢か。」

そう言った時、

遠坂の御家の宝箱がガタ、ガタンと音を上げたのは夢なのだろうか？。

その音に、アーチャーはどうしようと悩んでいたりした。

「どうしたものか。」

マジ狩る。最終話の最強はこの・・・。(後書き)

そんな感じなお話。

この世界ではルビーちゃん事件は起こっても無いです。
やっぱり、固有結界UBW、これがないとなぁ。
本編出さなかったのはわざとです。

戦争後の事実。(前書き)

ふふーん。

こついうのを書きたかったのだ!!。

戦争後の事実。

さて、俺は両手に花と言うのが、俺の状況だ。

俺に彼女ができました。

はは！！るりららら。

どうだ！、いいでしょう！！。

慎二にも挨拶しに行きましたとも。

『お前ら、お似合いだよ。』

さつと、許可も頂きました！。

俺の人生はただいま御花が咲きに咲いています！！。

「しろっ、ハンバーガを食べたいです。」

レモバーガーのはハンバーガーは高級と思う。
なので、その味を目指しています。

「ごめん、まだ熟成が足りない。」

美味しいのいいだろう？。

と暗に言っている。

実は、セイバーともそんな関係になりました。
にやは！！。

「なら、プリン！！。」

「はいよ。」

冷蔵庫には焼きプリンと蒸しプリンというか、通常プリンがある。
俺のお手製よ?。

主夫率が上がってきているよね、俺。

「どうぞ。」

スプーンと一緒に渡す。

頬張る姿に癒される。

可愛い。

「おにゃあ、平和ボケしてニヤいか?。」

銃を突きつける。

平和ボケ?、出来るならしたいよ。

「出来ればいいな。」

魔術協会はここ、冬木を警戒しかねない。

なので、色々と俺はマトモなお仕事しかしていない。

今の現状でスナイパー、というか、警備の一人でも抜けたらヤバイ
だけだ。

「ウニヤー、まあ、考えればそうだわニヤ。」

どうやら、頭の中は相当な馬鹿でもないらしい。

役所の根回しに諸々の後始末。

霊脈の正常化。

やる事する事が多い。

学校に行った後にこの処理をしている。
交代式です。

うっか凜、キャスター、俺、イリヤと言う、感じた。
ついでに、監督役の2人も追加されている。
玄関が開く音がした。

「えみや君、カレーを下さい。」

昨日の残りにあるから・・・、全部、あげよう。

「金をよこせよ。」

ちゃりんと、お金を貰う。

商売なのですから、当たり前だ!!。

「では、お鍋は洗って返却します。」

はあ、いう、肩とかこった。

そんな感じに今だのお休みにのんびりするのです。

戦争後の事実。（後書き）

監督役の2人はシエルさんとカレンさんです。

ヒッキー生活 (前書き)

む、ちやちやっとならうと。

ヒッキー生活

おれ、悠太です。

ただいま、進行形で規則正しい生活を送っております。
小学校？、ふつ、おれには、戸籍がない！！。
なので、問題なし。

「野菜。固形食。」

嫌だー、おれは楽しく研究生活を送りたいのだ。

お外なんてやーの。

もぐもぐ、噛むなら何か、アイデアを練った方が時間の無駄じゃないです！！。

「はい、一口に20回は噛むように。」

デймさんの鬼畜！！。

そりゃあ、おれの墮落生活を見て『はい？』っていうのには驚いたけど。

おれは、趣味に生きる魔術師なのだ！！。

「ちゃんと、食後のおやつはキッチンとありますから。」

むむ、なら、頑張ります。

「さて、次は・・・、適度な訓練ですか。」

おやつおやつ、楽しみだ。

悠太の今までの生活は、不規則そのもの。
深夜まで起きて、朝まで寝る。

趣味に生きて、いろんな物を制作する生活。
魔術の研究のような物をしている。

食事の時間すら惜しむのが悠太なのだ！！。
さらに訓練には人形、パーフェクトボディで体の動き方をチェック。
訓練もそんな感じに頑張っているのです。

その人形、悠太は、魔術開発に熱をいれている。

「二重生活なんて苦労するわ。」

その方角を別のところに生かせと思う。
まさに、親が居ぬ間というやつだ。

「ふふ、遠坂さんに教えて頂きたいよ。」

そんな悠太君は今日も二重生活を送っているのです。

ヒッキー生活 (後書き)

もっと行きます!!。

結託する、誰かと誰か。(前書き)

アーチャーが軽いネタキャラと化している。
でも、後悔はしない!!。

結託する、誰かと誰か。

戦時的計画と言うのはいつでもでもするものだ。
そういう感じに話し合い。

「狙撃ポイントはここがいい。」

確かに、あ、みなさんのアイドルのアーチャーが何でここに存在するかって？。

藤姉の仕業です。

虎聖杯、願望機の働きによる強引な切断と正しい？一点突破で開放されご様子。

今では、完全に遠坂のサーヴァントというか、執事になっている。ただいま着ているのは

設計は俺の、デザは悠太のコラボ執事服なのです。

赤色執事服でさりげない認知障害がついた素晴らしい作品です。

「どうかしたか、何かおかしい事でもあるのか？。」

認知障害『弱』は弱の癖に強力なのだ。

周りの人は普通の服を着ているような錯覚をして、
本人はただの服を着ているという、認知。

遠坂さえも欺いている。

「無いぜ。」

警備ポイントのお話です。

よく見え、また狙撃、警備しやすい位置を入念に話し合っているのだ。

いづなら、お前は執事服を着ているぞ、と言えばだな、簡単に解けて理解して、赤面物になるのだ!!。

「ほうじ茶を入れて頂戴。」

「承知した。」

こいつは、執事根性が染み付いている様子なので時折はパシっている。

いやゝ、いいねえ。

ドッキリ成功の予感!!。

「うむ、良いほうじ茶だ。どこで購入した。」

もちろん、520円の上等な奴だ。

「場所は忘れた。」

適当に見て購入しただけですからなんとも残念そうにするアーチャー。

こいつは生前はたいした執事だったのだろう。

俺は、主夫にはなるけど執事は無理。

桜とセイバー専属ならいいけど。

影で笑い声がする、声の主はセイバーと桜。事前には話してあるけどね。

いやゝ、事を明かすのが楽しみだわ。

結託する、誰かと誰か。（後書き）

さて、どうなるでしょう!。

1、硬直

2、赤面

3、切れてUBW

えみやしろの工房 (前書き)

真面目なワンシーン。

いつかは、出したかったのです!!。

えみやしろうの工房

えみやしろう。

それは混沌とも言う。

このコレクションルームに一際輝く剣がある。

宝石剣。

魔法を象徴する剣。

材質も概念も、それはそれはこの部屋でも一線を引く。

コレクションルームには銃も置いてある。

刀も置いてある。

ありとあらゆる、概念、魔力の力場。

放たれている魔力が混ざり合い

えみやしろうにとっては心地いい場所となっている。

棚には戦車や武器の本がぎっしりと詰まっている。

「なによ、コレ。」

この混沌に突っ込みを入れる現代の魔術師。

「ん、いいだろ?。」

俺のお気に入りの場所。」

地下に存在するのがこの部屋だ。

トンでもない場所・・・と言う認知は間違っていない。

「あんたって、魔法使いだったのね!?。」

ドン引きそのものの態度。

当然だと言つもの。

遠坂凜が目指している領域にモグリの魔術師、いや、魔法使いはいるのだから。

「はは、まあ、一応はね。」

その横顔は遠慮がちな苦笑いだつた。

そんな顔に突っ込みは入れない凜。

「ああ、でも、俺は、完全な魔法使いじゃない。」

詰まりながらも告げる言葉には何があつたのだろう。
理解はできない。

「遠坂なら、完全な魔法使いになれるんじゃない？。」

どこかの弓兵の儚い笑顔とよく似ていたとかのお話。

えみやしろうの工房 (後書き)

書き貯めは大量に置きます。
置けたらいいのですが。
うーん、悩む。

趣味に生きて、その後。(前書き)

もう、息切れ。

すいません、読者様。

趣味に生きて、その後。

最近は生地屋さんで生地を見ている俺です!!。
今日は野郎+2で来ております。

「外、眩しい。」

お前はヒッキー代表だ。
いい趣味している悠太くんと

「暗いの中で作業をしているからですよ。」

サーヴァント、使い魔さんのデймさんで買い物に來ています。
俺はね、ウェディングドレスを製作するのでーーーーーす!
!。

そのためにも大量の金を持つてきました。

後は・・・、さりげなく結婚指輪の事を聞き出せばよし。

「こいつ、顔がにやけてやがる。」

悠太くん、失礼ダゾ。

荷物持ちもいる事だし、大量に買うか!!。

~~~~~悠太視線

うわー、凄い量を買ってるじゃん、えみやは。  
黒い生地と白い生地。  
他にプリント系の生地。  
上機嫌そのものじゃん。

視線とか、痛すぎる。

まあ、おれは新作のメイド服を作るんだ!!。  
通信販売はいいですね!。

あとは、制服生地も買う。  
パーツも置いてあるから、いいとこだわ!!。  
メモ書きを良く見てメートル注文する。  
揃った、揃ったぞ。

「ありがとうございます。」

帰ったの日からは、ミシンの音が響いている、ようです。  
数日後。

「何をしている?。」

につこりさわやか笑顔で応じる。  
もう、上機嫌を通り越しているのがこの人なのです。

「秘密だぜ!。」

眼の下にはクマがありました。  
うん、心配しているのね。

そんな感じに危機感がありながら、穏やかな毎日の冬木市。  
神秘の大安売りでございます。

そして、七年後。

彼は、スナイパーと呼ばれるまでの悲劇に会う。  
これも、運命なのか?。

**趣味に生きて、その後。（後書き）**

中途半端ですみません。

どうも、EXTの事で思いつき、現在書き貯め中です。  
なので休止させて頂きます。

凄く中途半端ですみません。

ですが、その精神力をEXTに注ぎます。  
お楽しみを。

今月末に公開予定です。

お知らせっス!! (前書き)

公式発表。

精神的にやつれそうな文字です。

お知らせっスー！

なぜか、完結表示がされていない事に気がついた作者です。  
どもども。

「どもども、じゃなーーい。」

あ、ごめんなさい。

これには、息切れが起こしているのです。

「ちょっと読者様方に説明しなさい。」

はい、

EXTRAと言えはよろしいでしょうか。

「え、電子の海の？」

うにゃ、そんな通りでございます。

本音を言つと平行して創作活動を行う予定でした。

文字数や精神的なアレで色々ダウトです。

絶賛に原作を写して、それなりに掘り下げて、  
がちで考えていくとね。

これはもう 流石、えみや様を書いている所じゃなくてね。

「一話が長そうね。」

・  
・  
・。

・  
・  
・  
・  
・  
・。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・。

「ああ、なんかごめんね。

マジで途方にも無いことになってんのね。」

うん。

これをあと、何話だ。

一回戦終了まで何話までかかるのだ。

「あ、ごめんね。」

今月末に公開しますので

見たい方は見て、見ない方は見ないほうがいいです。

「え、なんで。」

EXTRAのネタバレと言うか、  
原作にちよつと手を加えているので、  
嫌いな方はいるなあってね。

ドシドシ応援メッセを下さい。

切実に、かなりの精神的な体力切れを起こしているので  
本気でお願いします。

ちなみに現在は一話が約2000文字です。

「ん、大丈夫じゃないの？」

・・・。

あのね。

現在の書き置き6話まであって、一つは紹介文で大体が700文字。  
さらに、6話目で1500文字位はあったかな。

「うわー！」

うん、がんば。」

（自分で、自分を励まさないとやってられんのだ。）

ンな感じです。

お付き合い有り難う御座いました！！。

ついでに悠太くんが主人公の作品も、今月末。

お知らせス！！（後書き）

•  
•  
•  
•  
•  
•  
○

ほわ。

というものです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9658p/>

---

流石、えみや様。いい性格しています！

2011年6月14日10時30分発行